
吉川的に三回死んだ人

郭堯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吉川的に三回死んだ人

【Nコード】

N0100W

【作者名】

郭堯

【あらすじ】

後漢の名家、袁家に仕える家系に生まれた少女、張？。彼女は遙か未来の世界の記憶を持っていた。そんな彼女が三国時代の乱世で何を為し、何を得るのか？

ちなみにアルカディアでも投稿しています。

序話 誕生！蝶美しい人っばい人！

仏教には輪廻転生と言う概念が有る。平たく言うと人が死んだらまた生まれ変わると言うものだ。まあ、生まれ変わると言う部分だけなら別の宗教にもある。もっともこんな事を本気で信じているのは本気で宗教を信仰している人間か、あたしの様な実際に前世の記憶を持った人間くらいかと思うんだ。

あたしの名は張^{ウチイキチ}？。字は儁^{しゅんがい}。字つてので分ると思うがあたしの生まれ変わったのは古代の中国。後漢の終わり頃。三国演義の始まるちよつと前。

何で生まれ変わるのに二千年近く時代を遡っているの？とかあたしもろに三国志の有名武将じゃね？とか、微妙にズレた部分でパニクった記憶がある。今思えばアレも一種の現実逃避なのだろうか。何せ気が付いたら赤ちゃんになって見知らぬ女性に抱き締められていたのだから。

元々あたしは21世紀の時代に生きていた極一般的な日本人だった。まあ、多少平均よりオタク度が高かったかもしれないが大体の部分では普通であつたと思う。

それともう一つ言うと前世のあたしは男だった。一人称はあたしだが別にそういう趣味があつたわけじゃない。喋り出せるようになってから母上から教え込まれたもんだ。この男っばい言葉使いを維持している分頑張っているんだよ。

で、それはさて置きあたしが色々混乱してるうちにあたしを抱いている母上と思しき人物に

「あなたの名前は？、張？よ。真名は黒羽くろはにしましょうか」と言われた。

あたしがこの時代が三国志じゃね？と思ったのがこの時。確信を得たのもう少し先のこと。や、だつていくら名前がアレでも同名の別人って可能性あるじゃん？だから「多分ここは中国で、もしかしたら三国志？」と言う程度の認識だった。

そして混乱も収まらないうちにある感覚があたしを支配した。空腹だ。まあ、生まれたばかりだから腹の中は空っぽだろうしな。で、腹が減っていると自覚した瞬間突然泣き出してしまった。

あれ？それほど酷い空腹感じゃないんだが？と疑問に思っていると母上が胸を口元に持つてくる。すると口が勝手に母上の胸に吸い付き母乳を飲み始める。どうにも自我と体の動きに齟齬がある。つつか体が制御がうまく出来ない。

この体が勝手に動くのが生存本能と言つもの一種なのだろうか？指とか、自由には行かないが自分の意思で動くのに対し、一部の行動がフルオートで行われるのは正直精神衛生上よくない気がする。食事とか、おしめの時とか。

自分の父親に始めてあったのは生まれてから数日経ってからだ。仕事で数ヶ月間家を留守にしていたらしい。

で、父上のお仕事。袁家の細作（忍者みtainなもの）衆の頭領なのだそうです。この時点での袁家の家督である袁逢と言う人の護衛をしていたが、あたしが生まれたから態々休暇をもらったらしい。ついでに父上配下の細作衆も休暇が取れた一部が付いてきた。細作衆頭領の第一子が生まれたことに、細作衆全体がてんやわんやのお祭り騒ぎになっているらしい。人望はあるようです。

「おお！この子が俺の子か！」

あたしを抱き上げ、頬ずりする。よほど嬉しいのだろう、その表情はだらしなく弛みまくっている。

喜んでもらえていることに関しては悪い気はしない。あたしが何かしたと言う訳ではないが、ここまで喜ばれるとこっちも少し嬉しくなってしまう。だが敢えて言うならば。

正直きついです。男に頬をスリスリされるのは。父上、勘弁してください。

「おぎゃー！」

この時あたしの「ちょっと父上に放してほしい」という感情に体が過剰反応したのだろう、右手で父上の左目を強打してしまったのだ。

「あゝあゝ！目が！目が！」

左手で殴られた左手を押さえながらも右手でしっかりとあたしを抱きかかえてくれてるのはやっぱり愛してくれているのだろうか。

母上が慌ててあたしを受け取り、父上の部下の人たちが父上を心配そうに見つめている。申し訳ない父上。まだこの体をうまくコントロールできないのです。

「ふっ……ふふ……」

心の中で謝っていると父上が目を押さえながら危ない感じに笑い出した。なんか俯いて片目押さえてるせいで厨二病っぽいポーズになっている。まあ、そういうポーズになっているのは殴ってしまったあたしのせいなのだ。

「初めて会ったとは言え実の父に対しても躊躇なく拳をぶつけ、更には俺の隙を的確に狙うとは……」

いや、躊躇に関しては自由に体動かせないし、隙云々はあんなデレデレ状態で、ねえ。周りで見ていた父上の部下らしき人たちも怪訝な表情で父上を見ている。

「この子は天才だ！きつと刺客の才がある！俺はこいつを歴史に名を残す刺客に育てるぞ！」

どういう思考でその結論に至ったか知らんが、歴史に名を残す刺客って、父上よ・・・や、確かに司馬遷の史記にはわざわざ刺客伝が立てられているが。と言つかあたしは武将になるのではないのですか？父上よ。

第一回 遅すぎる初めてのお出かけと、ちょっと早い気がする出会い

父上を殴ってしまったあの日から、父上はあたしに暇さえあれば穩行術や人体の急所などの話をしていた。無論一歳に満たない乳幼児相手に本気で教え込もうとしているわけではなく戯れなのだろうが、それが理解できるだけの自我を持っているあたしには良い暇つぶしとなり、同時に将来役立つであろう知識を溜め込むことの出来る有意義な時間だった。

あたし自身の生まれの都合上、戦場と無縁な人生は難しいだろうし。もっとも体が動かんで実践で練習できないのだが、これは自分の成長を待つしかあるまい。

2歳の頃、ようやくほとんどの行動を自分で操れるようになった。まだ座学だけだが、暗殺術も習い始めた。細作の本来の任務には必ず必要な技能ではないが、父上のように要人の護衛の任を受ける場合もあるので手口を知っているほうが良い場合がある。で、父上は本気であたしを本職の刺客にするつもりなのだろう、情報収集の技能は二の次でこっちを習っている。

後、我が張家に伝わる五禽戲ごたんぎと言う名の武術のレクチャーも受け始めた。何でもこの武術には単純な体術だけでなく、なんと気を使って身体能力を一時的に底上げする術も含まれている。説明を聞

き、訝しげな目線で父上を見ていたら実践してくれた。

部下の人たちに棒で叩かせてそれを折ったり、10秒くらいの間だけ牛を持ち上げたり。ただ、確かに凄かったのだが前世でテレビで似たようなの何度か見ているのでそれ程大きく反応はしなかった。その後で気落ちした父上が部下の人たちに慰められていた。

正直、かめめ波的な技を見せて貰えればきつと少年の如く目を輝かせていただろう。でも家の流派にはないと言われた。多少がっかりしたが、「家の流派にはない」と言うことはきつと使える流派があるということ、いつかそんな技をリアルで見れる機会があるかもしれないと前向きに考えよう。

無論これら全てを父上から直接学んでいるわけではない。袁達様の護衛の任で家にいるのは一年の内3割にも満たない。殆どは父上の部下の方たちから教わっている。

それと最近、偶に父上からマッサージみたいなを受け始める。骨格とかの成長を確認しているらしく、あたしは普通の子より早く鍛錬に入れそうだと嬉しそうに言っていた。

そして4歳の頃に体術に先駆けて気による身体能力強化術の鍛錬を始めた。本格的に長時間使うのは体に負担を掛けるが、基礎的な部分ならそれほどではないので早めに始めようとのことらしい。

それから一年ほどたった頃に、初めて父上に連れられて洛陽にある袁家のお屋敷に連れて行かれることになった。袁家の本拠は豫

州汝南郡にあるのだが、家督の袁逢様えんほうが朝廷の司徒と言つ職につ
てるため、後漢王朝の都である洛陽に置かれた司徒府に訪問するこ
とになったわけである。

と言つわけで地獄のおめかしタイムである。銅鏡を見ながら母
上に似た黒い長髪をポニテにする。最近目元が伶俐になつてきてま
すます母上に似てきたと言つのは父上の言。将来は美人系に成長す
るだろうと。

服装に関してはエセ中華風といったところか。上は紅いタンク
トップに似たもので、下は黒地のキュロットスカートっぽいもの。
その上に黒い外套を羽織っているのだが、この外套のデザインが結
構特殊だった。

まず袖が異様に広い。胸元で腕を組んでも膝下まで来る。次に
ボレロのように前が開いており、水平に付けられた二本のベルトで
止めている。裾の高さは腹より上の位置までの短いものである。

将来胸が出てきたらベルトの間に胸が来るんだらうな。

この外套、元々家の細作が暗殺などのときに使うもので袖の内
側に複数の内ポケットがある。ここに大量の暗器を携帯するための
ものである。あたしはまだそういうのは習っていないので、一応護
身用の短剣を二本隠している。

正直、父上や母上は可愛いだの何だのと囁し立てるのが恥ずか
しくてたまらん。だが残念ながらあたしや女の子なのだ。少なくと
も体は。

そんなこんなで馬車に揺られて1ヶ月くらい掛けて洛陽へ。

「お久しぶりです、周陽様。私が帰省している内にお変わりはありませんか？」

おお、家では21世紀のヤンパパ的な態度の父上が畏まっている。ちなみに周陽というのは袁逢様の字だ。

そう言えば父上の仕事場での姿を見るのは始めてであるのに気付く。片膝を付いて頭をたれる父上の姿を見て、コレがこの時代の主従と言うものかと感じた。大河ドラマとかで見るとは違う、一種の緊張感のようなものを感じた。

それにしてもこの日初めてお会いした、我が張家の主である袁逢様。金髪だった。

いや、それ自体はいいだろう。ここに来るまでの道中、ほぼ初めて実家の外に出たようなもののだが、アニメ色の髪や瞳の人を見た。我が実家たる張家荘には黒髪しかいなかったし。遣伝子学やら何やらの色々重大なことも知れんがこの部分は敢えて触れない。正直驚き疲れたよ。服装とかも昔の絵画とかと違って妙に現代っぽいという部分も。

まあ、道中何度か驚きで声を上げてしまったが、外を知らないからと思われたのだろう、恥ずかしい程に微笑ましいものを見る目で見つめられてしまった。お供の方たちに。

もつとも外出したことがなかったのはあたし本人の問題じゃなく、家が最寄の村まで馬で三刻（6時間）ほどかかるような場所にある

という、地理的な問題があるのだ。

話がそれた。問題の袁逢様。金髪が微妙にカールが掛かっている。口元に蓄えたお髭がダンディ。そしてアジア系人種として見た場合、異常に深い彫り。欧米か！と思わず突っこみそうになったが我慢した自分を褒めてやりたい。

どう見ても中国人違うよ、袁逢様。寧ろナイスミドルな英国紳士です。それでいて豪華な中国衣装が似合うのはどういうことか。

「君も変わらないようだな。その子が君の子かね？」

お、あたしの事か。

「おはつにおめにかかります、名は？、真名は黒羽ともうします。じゃくはいものゆえ字はまだありません」

袖に両手が隠れるように手を組みお辞儀をする。組んだ手はお辞儀した際には額の高さだ。いつもと言葉遣いが違うが相手は父上の上司だ。無礼があってはまずい。何しろこの時代、主つてのは雇用だけでなく文字道理の意味で生殺与奪の権限を握られているようなものだ。

それにしても我ながらこの舌足らずな感じは恥ずかしいものがある。

「ほう、随分礼儀正しいじゃないか」

掴みは成功したらしい。あたしを見て愉快そうに笑みを浮かべている。

「はっ、自慢の娘にございます」

対して父上も嬉しそうに返す。立ち上がった父上はあたしの頭を撫でてくれた。正直気恥ずかしいがここは空気を読んで黙って撫でられておく。笑顔でそれを見ていた袁達様が、控えていた侍女にお菓子を持ってこさせてくれた。そして部屋の隅に置かれた席に案内されて、そこに座って二人の談話を大人しく見ていることにした。

暫くほのぼのとした談話が続いたが、やがてキナ臭い方向に話題が変わる。何でもここ数年朝廷の腐敗振りが凄い事になっているとのこと。

この時代、皇帝が立て続けに若くして崩御。10歳前後の皇帝を立てなければいけないという事態になる。酷い例だと生後100日ほどで皇帝になった者もいるくらいだ。そんな歳若い皇帝に政が出来るわけもないと言っ訳で皇帝の奥さんである皇后の一族、即ち外戚が権力を握ることとなる。

皇帝が若いうちは、それはそれで問題ないかも知れない。だが皇帝が成長し権力を欲したとき、外戚がそれを嫌う場合が多い。当然である。せつかく手に入れた権力を易々と元の持ち主に返そうと

思うような人格者は多くない。そこで皇帝は自分の味方が必要になる。

これが信頼できる忠臣ならば良かったのかも知れない。だが、皇帝たちが頼りにしたのは、幼い頃から後宮で自分たちを見守り続けてきた宦官たちだった。

皇帝に頼られ後宮で大きな権限を手に入れるに至った宦官たちは外戚たちと権力闘争を表面化。そのとばっちりで多くの忠臣、能臣が無実の罪を着せられたり、隠遁に追い込まれていった。

これらだけでも国家存亡の危機足り得るのだが、現在の皇帝陛下である靈帝陛下がとんでもないお馬鹿だった。なんと官位を、即ち国政を動かす権力を金で売り出したと言っただ。三公の地位さえ買うことが可能になり、洛陽の宮廷の前には官位を売る市場さえできていたと言っ。

率直言ってありえねえ・・・

で、袁逢様が仰るには、袁家は後漢王朝開祖、光武帝が兵を興す際その資金を提供した豪商出身の一族である。その功績と、後の子孫も比較的優秀だったこともあり代々皇帝に次いで高い地位である三公を輩出してきた。現家督である袁逢様も三公の一つに数えられる司徒の職に付いている訳だが、代々漢の碌を食む者としてこの状況をどうにかしたいと言っのだそうだ。

最近では官位を追われながらも尚王朝に忠誠心を持つ人たち（俗に言う清流派の人たちのことだと思っ）と色々相談したりしているらしい。

正直こんなこと子供の前で言つなよと言いたい。そりゃ普通の歳の子共がそんな小難しい話を理解するなんてないんだろつが。重苦しい空気に痼癢起こすぞ。や、精神年齢的に無理なだけどさ。すつかりあたしと侍女さんの存在を忘れているらしく、沈痛な面持ちで父上と語る袁逢様。父上つて護衛じゃなかったんですか？なんでこんなことの相談乗ってんですか。まあ、主のメンタルケアも仕事の内なんでしょうけど。

慣れた様子であたしの隣に静々と立っている侍女さんを見て、おそらく毎度のことなんだろうなと判断する。

あたしが重苦しい空気をお菓子一個で耐え、そろそろ何か部屋を出る言い訳を考えようとした時、救世主が現れた。

「お父さま〜、お父さま〜。お客さまですわよ〜」

あたしと同じくらい年頃かな？外から女の子の声が響いてきた。

その声に袁逢様と父上も重い会話を止める。

「おお、麗羽れいはか。父はこつちだ」

袁逢様は部屋の外まで出て声の主を迎える。父上があたしに手招きしながら袁逢様と共に出て行くので、あたしも付いていく。

「お父さま、曹巨高さまがいらつしやいましたわよ」

なんとやって来たのは金髪ドリル!? 女の子二人と侍女数人を引き連れた金髪をお蝶夫人の如くクルクル巻きにした女の子。袁逢様をお父様と呼んでいるのだからこの子、袁紹とかの姉か妹か? まさか袁紹本人ということはないだろ。・・・自分と言う例がいるから断言できないが。

「麗羽、おいで。紹介しよう、張管家の娘さんだ」

管家とは中国で、金持ちなどの屋敷の下働きなどを統率する職業を言う。中国版執事とでも言うべきもので、父上の表向きの身分である。

「はじめまして、名は?、真名は黒羽ともうします」

女の子たちに対し、袁逢様に対してやったように挨拶する。

「あら、はじめまして。あなたがお父さまの言っていたあたらしい友達ですね」

お嬢様だよ。見た目だけでなく喋り方までも。つか舌足らずな声でお嬢語。なんか新しい気がする。いや、あたしが知らないだけ

か？でもなんつうか、こっ、イイね。

「わたくしの名前は袁紹えんしやうといますの。真名は麗羽、麗羽でよろしいですわ」

袁紹だったよ。後の有力群雄の一人だよ。

「それじゃあ、私はお客に会いに行くから娘たちと一緒に遊んでおいで」

そう言つて袁逢様はあたしらを侍女さんたちに任せると、父上を伴つて行ってしまった。

さて、ここであたしは悩んだ。このお蝶婦人のような髪かみの袁紹、もとい麗羽様にどう接するべきか。家にはあたしのほかに子供がおらず、擬似ヒッキー一歩手前の生活を送ってきた。よつて子供同士としての接し方なんぞ分る訳がない。

そうこつ悩んでいると、麗羽様が一歩後ろに控えていた女の子二人を前に出て自己紹介するように促す。そういえば聞いてなかったな。麗羽様のインパクトが強すぎてちよつと注意が向かなかつた。

「あの、私、名前は顔良がんりやうで、真名は斗詩とじといます」

やや緊張した面持ちで挨拶してきたのは黒髪のおかつぱ頭の少女だった。どこにでもいるような素朴さを持った可愛らしい感じの女の子である。それにしても袁紹軍の二枚看板の片割れか。この時点でもう知り合ってたんだな。

その後ろに隠れるように水色の長髪の少女が立っている。如何にも気弱そうで、あたしを見る目が微妙に潤んでいるのは気のせいだと思いたい。

「文ちゃんも挨拶しないと。ほら、怖い人じゃなさそうだし」

怖がられていたのかい。麗羽様をはじめ、ここにいる面子の中では可愛いと言う程でもなかるうがまさか怖がれるとは。

顔良・・・斗詩さんに促されて女の子が前に出る。

「え、えと、私・・・文醜ぶんしゆうです。真名は猪々子いじいと言います」

消え入りそうな声で名乗ったのはなんと袁紹軍二枚看板のもう片方だった。

これがあたしと、後に大陸有数の大勢力となる袁家の未来の中

心人物たちとの出会いだった。あたしの張？としての最初の友人たちであり、最初の主と仲間との出会い。この日、この瞬間、初めてあたしと言う要素が本当の意味で歴史の流れに組み込まれたのかもしれない。

このときを振り返り、そう感じたのは随分先のことだった。

第二回 幼女遊洛陽

父上に付いて洛陽の司徒府に来て早一週間。ここでの生活にも慣れてきた。元々、父上の袁家への帰還ついでのお披露目のようなもんだった。2、3日であたしだけ送り返される予定だったのだが、なんか麗羽様に気に入られたらしくしばらく逗留することになっている。

袁逢様にも頼まれたら正直拒否権などない。まあ、子供相手にそこまで意識してはいないのだろうが。

ここ数日は麗羽様の遊び相手が日々の仕事になっている。少なくともあたしにとっちゃ仕事だと考えんとやってられん。なんでって遊びの内容が問題だ。

あたしは女らしい衣服を余り持っていない。そういうのは趣味じゃないんだ。今は女とは言え、自我が前世のままだからな。

と言っわけで、

「黒羽さん、次はこれを着て見なさい」

「えと、黒羽さんにはこっちの方が似合うきが」

洛陽の衣服店でお嬢様方の着せ替え人形になっているわけで。つつつか、何でこの時代にゴスロリっぽいのがワンプリースとかあるんだよ！下着だってショーツやらブラジャーやらあるのっておかしいだろ！？誰だ創ったの！麗羽様の黒い下着姿にちよつと萌えてしまつて自己嫌悪になつてしまつたじゃないか！・・・初めて幼女に萌えちまつたよ。某魔砲少女にも萌えなかつたのに。

それはそうと、最初は何とか抵抗しようとした。だが今のあたしの体力は肉体年齢相当。麗羽様や斗詩さんたちはあたしとおない歳だから数で押さえ込まれてしまつた。猪々子さんは後ろでビクビクしてただけなのが余計悲しかった。

次に目標を逸らそうとした。斗詩さんを着せ替えようと提案したら麗羽様に却下された。麗羽様がしたいのはヒラヒラなヤツで、斗詩はそういうのが全く似合わないのだそつだ。

うん、斗詩の素朴な感じには似合わないかも。麗羽様に言われていじけてしまつた斗詩さんには悪いがちよつと納得。いや、充分に可愛いとは思つんだが、やっぱりこゝイメージが会わんと言つか。

次に猪々子さんはどうか、と提案したら麗羽様に「何言つてんの？こいつ」的な冷たい視線を向けられ、斗詩さんには困つた笑顔を向けられた。二人が猪々子さんの方向を見るように目線で促してくる。

品物の影に隠れながらこちらを見ている猪々子さんに目線が合うと、ビクツと全身で反応する。そして怯えるような表情が更に崩れていき、目尻に涙が溜まつていく。それを見て斗詩さんが慣れた様子であやしていく。麗羽様には「これでもあの子にやらせるんですの？」と聞かれ、あたしは素直に降参するしかなかった。

結局大人しく麗羽様たちに遊ばれる。寧ろ弄ばれる。下着までコーディネートされた時はマジ泣きしたくなった。

その後、あたしにあつたデザインの色を複数買って店を出た。幼女に物を買ってもらってしまい、色んな意味でやるせない気持ちをあたし自身も今は幼女なんだ、と自分を誤魔化そうとしたら余計にやるせなくなった。

店の外で待機していた麗羽様の護衛の方たちと合流して屋敷に戻った後、再び試練があたしを待っていた。

麗羽様のお言葉により、袁家の皆様の前で個人ファッションショーを開催することになってしまった。一番楽しそうにしていた父上よ、お恨み申上げます。

そんなこんなで更に数日。麗羽様と一緒に行動するのが当たり前になってきてしまっている今日この頃。

麗羽様に斗詩さんと猪々子、そしてあたしと言いつつも面々で洛陽を探険しようとする。生まれはともかく、物心付いた頃にはもう洛陽に住んでいたこの面々（あたし除く）に探険するような場所など存在のかね？そう思い聞いて見ると意外と行ったことのない区画と言つのは多いらしい。

後々考えて見ればそれも当然で、麗羽様たちが行ったことのないのは洛陽の城壁付近。つまりは貧民街に当たる部分のことだった。

ここで説明すると、中国で城とは街を覆っているもので、日本や諸外国のものと大分趣が違う。他国の城が、主に支配者を守るためのものであるのに対し、この国の城は街を守るものなのだ。今でも街のことを「城市」と書くほどだ。

そしてその城壁に幾つかの門があり、その全てに兵を置き人の出入りを管理している。だが、それでも紛れ込んでくる人間とはいえるもので、そういった者達が寄り集まって一種のスラムを形成する。

漢と言う、この時代では世界屈指の大帝国の首都である洛陽もそこら辺は例外でなかったようである。で、お嬢様方は（厳密には麗羽様のみだが）そのスラムを探検して見たいと。もちろんそんなこと許される訳がない。そんなどう考えても治安がいい筈がない場所に、如何にも良いとこのお嬢様な格好の麗羽様が行ったらと何があるか分ったもんじゃない。

至極当然だが護衛の人たちの目があるのでそんなことできない。よって麗羽様は護衛の人たちの目を盗んで出かけるつもりらしい。

麗羽様の護衛の人たちは父上の部下の人たちではないので詳しくは知らないが、この人たちの目の届く範囲ならそうそう危険もないだろう。まあ、袁家は力も金もある家系である。愛娘の護衛に、能力のない人間を雇ったりしない。そんな人たちを子供の頭で出し抜けるのだろうか？知恵を貸すと言う意味では協力せんぞ？あたしや。

何か策があるのか麗羽様は自信あり気だ。

「では黒羽さん、これから出かけますけど貴女いい加減、わたくしが買って差し上げた服を着ていきなさい」

嫌です。とは言えない。ここ数日何とか頂いた服を着ないで来たが、麗羽様はそれがお気に召さないらしい。でもあたしの精神衛生上余りそういうのは着たくないと言うのが正直なところである。

何とか今日もいつもの服で通そうとしたが、麗羽様の命令で斗詩さんに押さえ込まれ、無理やり着替えさせられてしまう。ふと思っただが斗詩さんって案外馬鹿力？体格がそんなに変わらないのにあたしが暴れてもびくともしなかつたよ。

そんな訳で結局黒いゴスロリ風ファッションで出かけることになった。「お似合いですわよ」と麗羽様は満足げだが勘弁してほしい。斗詩さんも相槌打たないでくれ。斗詩さんの後ろで猪々子さんも顔を真っ赤にしながらコクコクと首を上下させている。

ここ最近ようやく猪々子さんともコミュニケーションが取れるようになってきた。相変わらず直接対面とは行かないが、これでも随分な進歩だろう。隠れるものがあれば一対一で対話ができるようになったんだから。

それはそうと、一応万が一の時の為にヒ首を靴に仕込んでおく・・・この靴も完璧ブーツだよな、デザイン。あと、遊びに行くときは持っていくように言われているアレをポケットに入れて、と。

そして斗詩さんと猪々子、あたしと護衛の人たちを引き連れて麗羽様がやってきたのは何回か服を買っていただいた服屋だった。護衛の人たちはいつものように外で待機。さあどうするのかと一步引いたところで麗羽様たちの行動を見ていたが、その作戦は酷く単純なものだった。

前世の日本だったらスタッフオンリーの札が掛けられているだろう、店の奥への扉をくぐって裏口から脱出すると言ったものだった。

こりやまずいと、慌てて外の護衛の人たちを呼ぼうとしたが斗詩さんに羽交い絞めにされ、麗羽様に口を押さえられてあたしも連れ出されてしまう。ちょ、お店の人も微笑ましいものを見る目で見ないで助けて！つか麗羽様鼻も押さえてる！息が！息がー！

じたばたしながらも、あたしはポケットの中に隠してあったアしを取り出す。数珠のように連なった無数の小さな黒い玉。家の細作が尾行をするとき、後から来る仲間に目印として使う匂い玉である。人の鼻では分らないが嗅覚の鋭い動物ならこれを探し出せる。野良犬つぼく汚した犬に追跡させてその後を人がそれとなく付いていくのだ。

事前に父上にチクって来たからな。それとなく細作衆の人たちが通行人に混じって付いて来ていた筈。直ぐに気付いてくれることを願おう。

一番後ろにおっかなびっくり付いてきている猪々子さんが匂い玉に気付いたがあたしが「しー」とジェスチャーを送るとコクコク頷いてくれた。

で、結局あたしが解放されたのはスラムの入り口に入ったところ

ろだった。小汚い屋台に、ボロボロの衣服を纏った人たちがたむろしている。如何にも治安など期待できないであろう雰囲気だ。この雰囲気じゃ見回りの兵隊も少人数じゃ入ってこれないだろうな。

「あの、麗羽様、やっぱり止めませんか？どうにも嫌な予感が止まらないんですが」

さつきから明らかに好意的でない目線がチラホラしているよ。こつ、金になりそうなのが来たぞ的な。

「何を言ってますの。いずれかん王朝のしちゆうを担う袁家のわたくしが、洛陽で知らない場所があるなんておかしいではないですか」

ああ！何でそういうこと口に出しちゃうかな、このお嬢さんは！なんかもう何人が目の色変わってますよ！？

やばい！やばい！やばい！この面々をあたし一人じゃ止められないのは、残念ながらすでに証明されている。斗詩さんはこの面々で最も良識の有る人だが、なんだかんだで麗羽様に逆らえない。猪々子さんは候補に挙げるまでもない。性格的に。

こつなつたら父上の部下の人たちに期待するしかないか。一応あたしも気功術を習っている身だ。今のこの体でも2、3分くらいなら騙し騙しだが使える。相手が一般人なら時間くらいは稼げる筈だ。匂い玉は・・・まだ余裕があるな。

後気功術使えるならそれで麗羽様たち連れて帰れとかいうなよ？使用可能時間と、その後に来るだろう反動考えるとそういうのに向かないんだ。

結局どんどんスラムの奥へと進んでいく麗羽様の後を付いていく。後で後悔することになるこの選択は、あたしらの在り方を決めてしまうことになるとは思いもせずに。

第三回 アリカタ

あたしは今ものすごく後悔している。やっぱ、無理矢理にでもスラム探険なんざ止めるべきだった。襤褸を着た、如何にも流民とといった感じの男たち五人に路地で挟まれながら、あたしは心の中で毒づいた。内二人はそれぞれ鉈と中華料理で使うような分厚い包丁だった。残りの三人はただの木の棒である。

あたしらを囲んでいる連中は皆痩せ細り、獣のような笑みを浮かべている。尋常な状態ではないの是一目で分る。飢え苦しんでいるところに来た、大金になるかもしれない相手だ。色々テンパっているのかも知れない。

「貴方たち！一体誰にぶきをむけているのか、わかっているのですか！」

怯えている斗詩さんと猪々子さんを背に僅かに体を震わせながらも大人五人に言い放つ麗羽様。子供と思えないほど立派ではあるが、あたしからすればこいつらを刺激するようなことはしてほしくなかった。父上の細作衆が辿り着ければ、訓練もされていない、それも飢えた人間などどうともなるだろう。だが、彼らを怒らせた結果誰かが怪我をすれば取り返しが付かない。

「うるせえ！餓鬼がガタガタ抜かしてんじゃねえ！」

鉦を持った、この連中のリーダー格らしい男が怒鳴る。他の奴らもそうだが、こちらに向ける視線に怒りがある。大方、俺たちがこんなに苦しんでいるのにこの金持ち共が！見たいなものだろう。あたしも前世で、親のおかげで遊んでいるボンボンを見て世の理不尽を感じたりしたこともあったが、この人たちは命の危険とかそういうのまで付いてくるから、そこら辺の感情は当時のあたしの比じゃない。

もつとも、あたしらに向けられても困るんだけどね、そういう感情。そういうのは経験して見ないと、本当の意味で理解できる訳がないものだと思うから。

尚も連中に何かを言おうとする麗羽様の口を押さえて無理矢理黙らせる。

「ちよっ、何を!？」

「黙ってください麗羽様。斗詩さんたちが怪我するのは嫌だしよっ、」

事態が事態なので、声が荒くなってしまふ。麗羽様は一瞬声を詰まらせるが、すぐに納得してくれたのか大人しく頷いてくれた。

麗羽様を落ち着かせてから、あたしは一步前に進み出る。兎に角時間を稼ぎたい。そうすれば何とかなると信じて。

「あの、もしお金が欲しいのでしたらこれらで何とかしていただけないでしょうか」

あたしは幾つか身に付けていた装飾品を外して連中のリーダー格の前に差し出す。麗羽様から頂いたもので心苦しいが仕方ない。

「これでしばらくは食べていけると思っんです。これで手を引いて貰えないでしょうか」

差し出したのは玉や瑪瑙などを使ったもので、売ればそれなり額になると思う。これで勘弁してくれりゃそれでもいいんだがね。

「て、てめえ！馬鹿にしてんのか！」

鉈を持った男はそう言いながらもにやけ顔であたしの手から装飾品をひったくる。それらを手に、まじまじと眺めている。結構隙だらけな感じだがこれで逃げ出そうとは思わない。あたし一人ならともかく、子供の足ではすぐ捕まってしまうだろう。

だがこの時あたしは一つだけ、あたしらへの追い風の兆候を見

つけた。前にいる三人の更に後ろの十字路で鈍く輝く、クナイの柄の部分もなくしたような形で赤い布を巻き付けた金属片。ヒヨウ（金辺に票）と呼ばれる、日本の手裏剣に相当する暗器が何気なく落ちていたのだ。そう、余りにも不自然なものが然も当然のように風景に混じっていたのだ。

「ちよつと、黒羽さん！それはぶつ・・・」

それはそうと、またしても怒り出した麗羽様の口をふさぐ。怒る理由は分るつもりだ。友人への贈り物が、その友人の手で物取りに渡されたのだから。

「後でいくらでも叱られますから。今は押さえて、あたしを信じてください」

耳元で小声で伝える。怒りが収まらないのだろう、大人しくなってくれはしたがあたしに睨むかのような視線を送ってくる。

その後ろで震えている二人もこちらに不安げな視線を向けてくる。笑顔を作つて二人に向かつて頷く。あたしに任せな、と。思い上がりかもしれないが、中身は大人であるあたしが何とかするべきと思つている。それになんと言うか、アレだ。コツチで、黒羽として初めての「友達」を存外に気に入っているらしい。

問題は挟まれている、ということだ。前に三人、後ろに二人。多少の距離があればどうにかできるんだが。

いざという時は殺すことも考えなけりゃいけないか。その場合は人を実際に殺したことの無いあたし自身が不安要素になるか。

兎に角こいつらから離れなきゃだよな。

「おい！餓鬼共！」

いつの間にか渡したものを眺めるのを止めていたらしい、鉈を持った男がこつちに向けて怒鳴る。

「怪我したくなかったら大人しく俺たちの言うことを聞きな」

なんつゝか「ゲヘヘ・・・」といった感じの、如何にも悪そうな笑いをしながら連中はあたしらににじり寄って来る。ここは大人しく捕まった方が良いかな。

「・・・分りました。麗羽様も皆も大人しく・・・」

無駄に抵抗して、怪我とかしないように大人しくするよう言おうとした瞬間だった。パンっという音と共に頬に衝撃が走った。麗羽様に平手を食らったのに気付くのに暫くかかった。

「なんあのですか、あなたは！さっきからものとりにごびを売

るように!」

え、えと、あれ?何であたしが怒られたんだ?

「あなたにはほこりはないのでか!そんなやり方が!あんな心までうすぎたないやからに!」

あゝ、あれか?あたしのやり方は麗羽様のプライド的に許せなかったということか?でも、あたしとしては最良を考えての行動だったんだが・・・

「が、餓鬼が舐めたこと言ってんじゃねえ!」

麗羽様の言葉が気に触ったのだろう、鉈の男にいた男があたしを蹴り飛ばして麗羽様の頬を殴りつけやがった。

「お、親に恵まれただけで人を見下しやがって・・・」

殴られ、倒れ伏した麗羽様に一瞥しながら男は吐き捨てるように言う。

あたしの視界が倒れた麗羽様を捉えて放さない。放せない。そして、倒れた時に頭を打ったのだろう、地に赤い色が広がっていく。

あ、なんか視界全体が赤みかかって来た？

斗詩視点

麗羽様がものとりになぐられた。目の前で大事な人が傷つけられた。倒れ伏している麗羽様を見ても、私の足は、体は動いてくれなかった。

「れ、れいはさ・・・ま・・・」

私にしがみつく様にしていた文ちゃんがくずれるように膝をつく。それほどこわいということなんだと思った。私だって体の震えが止まってくれない。

けど次のしゅんかん、男の人のさけびごえで私たちは無理やりに目を向ける方向をかえられた。麗羽様をなぐったうでから血がふきだしていた。

「てめえら、誰に断って人様のともだちに手え出してんだ・・・」

こわい声だった。さいきん聞きなれてきたはずの聲がちがう声

みたいだった。

泣きながらうでを押さえてる男の人の前に黒羽ちゃんが、ひしゅをもったままたっていた。

私は何もかんがえられなくなっていた。文ちゃんも同じだったと思う。私にしがみついているだけしかできない。

そして、私たちの後ろにいた人たちが持っていた棒をふりあげながら黒羽ちゃんに駆けて行った。黒羽ちゃんは一人をよけると、もう一人のひざのうらにひしゅをつきさす。その後は他の人たちも一緒になってらんとうになった。

「く、ろは・・・さん？」

あたまから血をながしながらだけど、麗羽様が起き上がる。ここから麗羽様のかおは見えないけど、やっぱり信じられない気持ちなのかな。

「斗詩！麗羽様つれてけ！」

黒羽ちゃんという言葉で気が付いた。麗羽様がいる場所はらんとうしてるばしょにちかい。私はとっさにかけたして麗羽様をかついでそこをはなれる。そして私たちが離れるのと同時に近くの物陰から黒羽ちゃんと似たがいとうを着た人たちが何人がかけ出してきた。

「お嬢様、怪我の具合は？後、他の皆さんはどうです？」

その内、こっちに走ってきた一人は黒羽ちゃんのお父さんの張管家でした。わたしも、いつの間にか近くまでかけよって来てた文ちゃん。そっか、麗羽様つれてくるのに夢中でおいて来ちゃったんだ。

「わ、わたくしたちよりも黒羽さんが！」

自分のけがをむしして麗羽様が張管家に言う。

「・・・いえ、アレは無事です」

そう言う張管家が目をむけた先には、あのがいとつを着た人たちの一人に抱えられている黒羽ちゃんがいた。ひしゅをとりあげられているのに、まだ私たちをおそつた男の人たちをにらんだ。私たちをおそつた人たちはみんな地面にたおれていた。

そして、私たちを助けてくれた人たちは黒羽ちゃんをだいたままつれて来た。

「こっちは終わりました、お頭」

「そうか。ご苦労だった」

私たちのけががあるかを見ていた張管家が初めて黒羽ちゃんを見る。

「無事だったか」

安心したような張管家の言ってるのが聞こえてないのか黒羽ちゃんはまだ私たちをおそった人たちのほうをにらんでる。おこった表情をしていたけど急にそれがあせったのにかわって、かかえてた人についてからにげ出す。

「あ・・・」

なんとなく、黒羽ちゃんがさつきからにらんでた方向を見た。たおれてた男の人たちの一人が体の上半分をおきあがらせて、包丁をなげようとしてた。

そして黒羽ちゃんが文ちゃんにだきついた。なげられた包丁が黒羽ちゃんのせなかにささった。黒羽ちゃんの黒いかみのけが切れて、黒い服の黒さがこくなっていった。そのまま黒羽ちゃんがたおれてく。

いちばんさいしょに泣き出したのは私か、文ちゃんか、麗羽様

か、私は覚えてない。

袁逢視点

「娘たちのこと、ご苦労だったね」

私は部屋から出て、中庭に設置された石の席に着き、そう口に
した。部屋の中では手当てを受けた張管家の娘さんが眠っている。
娘も、その友人たちも部屋で彼女の様子を見ている。酷く消沈して
いたが、だからこそ医者邪魔になることもないだろう。

「いえ、お嬢様にお怪我を負わせてしまいました」

「あれは麗羽自身のせいだ。寧ろ君の娘まで巻き込んでしまっ
た」

真面目なのは美德なのは疑いないが、張管家はそれが過ぎる。

「それに、幼子に人を殺めさせてしまった」

娘たちが傷つけられた故と聞いた。恐らく張？の心に付く傷は大きなものになるだろう。

「何れは通る道です。それが早まっただけかと」

やれやれ、我が子のことだと言うのに。だが、彼がこう言うのであれば私にこれ以上言う権利はないのだろう。

ただ、自己嫌悪になりそうな考えだが、今回のことは不幸な事件ではあったが、或いは袁家にとっては無形の財産になるかもしれない。娘の麗羽が如何に子供であろうと、今日のことでも何も学べない程度の人物であるとは思いたくない。そして、自分の望み通りであれば、この日を持って麗羽は大きく成長するだろう。これが他者が傷つくという結果を伴ったものでなければどれだけ良かったことか。

「子供たちのことも気になる。部屋に戻るかね」

もう日も傾きかけている。細作衆が子供たちを連れ帰ってそれなりに時間が経っているが、あの子は昏睡したままである。傷はさして酷いものではなかったそうだが、それでも幼子の体にとっては多くの血を流し過ぎたのだと言う。

様子を見に子供たちのいる部屋に戻ろうと部屋の前に来た時、丁度扉が開き麗羽が出てきた。普段の自信に満ちた顔でなく、酷く暗いものになっている。

「お、お父様……」

丁度部屋を出てきたところに私がいて驚いたのだろう、少し慌てた様子だった。

「そ、その、お父様。お話し、したいことがあります」

「そうか。張管家、私は娘と話がある。君はあの子に付いてあげなさい」

なんとなく、娘が良い方にむかって成長しようとしていると感じる。

「いえ、私の任は……」

「父親なのだよ、君は。良いから行きなさい」

職に忠実すぎるな、アレは。もう少し個人の情を出してもいいものを。自分の肩が震えっぱなしであるのにも気付いていないな。

娘だけを伴い、私の部屋に向かう。その際娘は終始俯いていた。

部屋に着いた後、お互い向かい合うように椅子に座る。

娘がまず口にしたのは今回の件の、事の顛末だった。自分が貧民区に行こうと言い出したこと。物取りに襲われたこと。張管家の娘が物取りと交渉しようとしたこと。事の大まかな部分は全て語ったのだろう、そこから沈黙が続いた。だが、娘はまだ本当に言いたいことを口にしていない。

「それで、お前は何を言いたいのだ」

私の言葉に、されど黙ったままであった娘は、やがて意を決した瞳で話し出した。

「わたくしはまちがっていたのでしょうか？袁家の一いんとして、しもじもの人たちのことを知りたいと思っただけです。でも、皆さんをきけんな目に遭わせてしまいました。わたしはどうするべきだったのでしょうか・・・」

成る程。一歩つづ先に進み始めたか。

「間違っではないよ」

そう、その想いは正しいものだ。何れ人の上に立ち、天下を動

かす立場になる者に必要な想いだ。

「でもっ……」

「間違っていないことが必ずしも正しい訳ではないんだよ」

子供にするには難しい話かもしれない。だが、この子が真剣に聞いてくる以上私も真剣に答えねばなるまい。

「……間違っていないことが正しくないことがあるのですか？」

「ああ。そうだ」

決して気分の良いものではないが、この子も何れ政の世に入れば知らねばならないことだ。……私も張管家を謂えんかな。

「……では、お父様。麗羽はどつすれば正しくいられるのでしょうか」

最も難しいことを聞くか。

「常に正しくあり続けることは無理なのだよ。人である限りなだが、お前が可能な限り正しい人間でありたいというのなら、今回の件を持ってまずは身の程を知りなさい」

己に出来ることと、出来ないことを見極める眼をまずは持たねばならない。

「……みのほど、ですか」

「そして学びなさい。今の自分に出来ないことをなすために本当にやらねばならないことを知るために」

人の上に立つためにもう一つ必要なもの、心を支えてくれる友を、お前はもう持っているのだから。

この娘が漢王朝の明日を担う善き支柱となれることを、私は願いながら語り続けた。

「知らない天井・・・すら見えん」

目が覚めたとき、一番最初に見たのは枕代わりらしい毛布の塊、最初に感じたのは手を握られている感触だった。ずっとうつ伏せだったらしく涎の感触もあった。

「・・・えと、猪々子さん？」

眼を向けるとそこにあったのはあたしの手を握ったまま床にうつ伏せになって眠ってしまった猪々子さんと、それに寄り添って眠る斗詩さんの姿だった。

「起きたか、黒羽」

声は父上のものだった。声の方向に眼を向けるが、窓から射す夕日の明かりで部屋が真っ赤に染まって、父上の姿がぼやけて見えた。まるで空気まで何か赤いもので濁っているように見えた。

赤く、紅く、アカク、あかく・・・？

「落ち着け！ゆっくり、息を深く吸って、深く吐け・・・」

気が付いたら父上に抱き締められていた。あれ？息が苦しい。体が寒い？背中から体温が抜けていつているような感触だった。

そういえばさっきの色で思い出した。

「あ、あた、し・・・ひと・・・」

殺した。ころした。この手で、じぶんのいしで、ころしたころしたころした・・・

「違う！お前は守ったんだ！お嬢様と友人たちを守ったんだ！お前はよくやった！お前のおかげで助かったんだ！」

まもった？守った、護った・・・

「そっだよ！黒羽ちゃんが私たちを助けてくれたんだよ！」

聞こえてきたのは斗詩さんの声だ。この時あたしはようやく自分の手を痛いほどに強く握られているのに気が付いた。

手を握っていたのは猪々子さんだった。あれからずっと握っていたのか？目尻から涙を流しながらあたしを見ている。

「私たち・・・黒羽ちゃん好きだよ・・・」

猪々子さんが言った。なんか、今まで一番はつきりと聞こえた気がする。猪々子さんの声。でも、なんか急に息苦しいのがなくなっていく。変わりにすごく眠くなってきた・・・

次に目が覚めた時、手を握る感触はそのままだった。

「黒羽ちゃん・・・」

日が落ち、月明かりが窓から射す薄明かりの中、猪々子さんの声が聞こえた。

「おはよう、猪々子さん。それともこんばんわかな、この時間」

体がだるくて仕方ない。でも、手から伝わる暖かいナニカで妙に口元が弛んでるのが自覚できる。

「・・・うん・・・よかったよ・・・黒羽ちゃんが起きて・・・怖かったんだよ・・・」

涙でグシユグシユいいながらも必死に色々伝えようとしていた。興奮しているせいか、内容は支離滅裂だったが、あたしを心配してくれているのが伝わってきてちよつと幸せな気分になった。それと、猪々子さんの話を聞いている間、斗詩さんが猪々子さんの横で眠っているのが見えた。多分部屋の隅に椅子で座ってる体制の影が父上なんでしょう。

猪々子さんのあたしを心配したり、慰めようとする言葉を聴いていたが、ふと彼女がこんな事を聞いてきた。

「ねえ、黒羽ちゃん。あるとき・・・黒羽ちゃんはこわくなかったの？」

「そんな訳ないじゃん。怖かったさ」

虚勢を張ってはいたけど心臓はバクバクだったし、足も力が抜けそうになってたし。

「・・・じゃあどうしたら黒羽ちゃんみたいに勇気持てるの？」

わ。勇気？あたしみたいに？正直こんな事を言われるとは予想外だわ。

「黒羽ちゃんいつも男の子みたいでとってもかっこよかったよ。それにとってもやさしいの」

あゝ、うん、元々中身男ですもん。

「私も黒羽ちゃんみたいに強くて優しくなりたい」

あたしのように、か。なんとなく嬉しいけどあたしは今の猪々子さんも嫌いじゃないんだけどな。

「今の猪々子さん、可愛くて好きだよ、あたし」

「でも私……ううん、あたしは黒羽ちゃん見たくならないの」！

なんか、言っても納得してくれなさそうだな。まあ、悪いことではない、のかな。

「ん〜、でもアレだね、自分をあたしって呼ぶの、被るのはちよつとな」

そういったあたしの言葉が拒絶に聞こえたのか、しゃくりあげ

てきた。まず、大泣きになる!?

「だからさ、猪々子さんはアタイ、なんてどうかな。あたしと似てるし」

「・・・アタイ？」

キョトンとする猪々子さん。

「うん、アタイ」

「・・・アタイ・・・うん、私はアタイ、アタイになる・・・」

うん、喜んでくれたみたいだ。

「それと、黒羽ちゃんのこと、お姉ちゃんって呼んでもいい？」

うん？姉？いやでも、

「あたしと猪々子さん同じ年じゃん」

誕生日は確かに先だから姉と言えなくもないんだろうけど。

「黒羽ちゃんは目標だから、お姉ちゃんになってほしいの」

「そっか。じゃ、アネキって呼びな。アタイにはそっちの方がらしいよ」

「こそばゆい感じだな、なんか。」

「アネキ・・・うん、アタイ、がんばって強くなるよ、アネキ」

その言葉と共に見せた笑顔は、とつても輝いて見えた気がした。

第四回 狼雇の相ってエクソシストごっこするためのスキルだと思っんだ

ある意味麗羽様たちと友誼を深める切欠になった路地裏物取り事件より早十年。歴史に名を残し得る刺客になるべく鍛錬を始めていたあたしは今、袁家の筆頭軍師である田元皓様に兵法の指導を受けていた。・・・あれ？

例の事件の後、怪我の療養に半年近く袁達様宅にお世話になった。その間、だんだんと明るく元気になってきた猪々子に斗詩と見守ったり（あの件以来、色々あってさん付けはしなくなった）、急に勉学に励みだした麗羽様と一緒に書を読んだりした。

この時期の一番の事件は猪々子の髪だろっ。

例の事件の時に投げつけられた包丁で、髪も一部一緒に切られて、髪型が変になってしまった。よってあたしの怪我の具合が、床から下りれるようになった頃に一度バツサリと切ることにした。そんな時なんか責任取って猪々子が自分でバツサリである。そう言や猪々子かばって髪切られたんだっけ。猪々子の長い黄緑の髪は結構好きだったんだがな。珍しいし。

その後、帰郷してからあたしの鍛錬が始められた。まずはじめに行われたのは体作りのような基礎でなく、いきなり人を殺すこと

に慣れる事だった。近くで捕まえた賊やらなんやらを捕まえて来て、手足の腱を切って抵抗できなくして「さあやれ」である。正直参ったよ、あれは。前回の時は半ば正気じゃなかったが、眼の前で泣き叫ぶ人間を殺すのは自分に刃を向けられた時以上の恐怖を感じた。あたしが竦んで動けないでいると父上に叩かれた。相手を殺せるまで続き、結局そいつを殺し終えた時にはあたしは医者に連れて行かれることになった。父上に殴られたり蹴られたりで。

もちろんそれも一回で終わるような類のものではなく、約一年で三十人ほど殺すことになった。最初の五人を殺し終わる頃には、その場で吐くことがなくなった。次の十人でその日の晩飯が食えるようになった。三十人に近づく頃には一日で複数の人間を殺せる様になった。

正直この頃のことは思い出したくない。後から聞いた話だと、この頃のあたしは例の事件以来情緒不安定気味だったらしい。原因は誰もが察する通りと考えての荒療治のつもりだったらしい。寧ろ悪化しなかったことが奇跡だよ、と思う。そういう意味では父上の言ったとおり、あたしには才能があったのかもしれない。喜ぶ気にはなれんが。

この時期のストレスのせいか、髪の毛の先部分が白髪化してメッシュみたいになったのは個人的にかっこいいかな？と思っっている。つか、どうやってたらこうも意図的にやったと思えないような白髪具合になるのか。

で、本格的に武芸の稽古が始まったのは7歳の頃。最初の一年は基礎の体作り。馬歩と言う、両腕を前に突き出して空気椅子の体制を長時間維持するというものだ。流派によっちゃ違う呼び方もあるがぶっちゃけどこぞの最強の弟子君がやってたアレである訳なん

だが、きつい。とにかくきつい。実際、反刻（一時間）もつ様になるまで二ヶ月かかった。全く動いてないのに汗が出るってどんなだよ！

二年掛けて六刻連続でやれるようになって漸く、五禽戯を学べる訳である。で、いざ学んで見ると以外に技と言うものが少なかった。五禽戯の内容はその殆どが体捌きや実戦心得だった。そこに僅かな技を混ぜての、どういう風に応用できるかで随分変わってきそうだ。尚、五禽戯を使う際、両手に穿山甲と名付けられた手甲を嵌めてやる。二の腕から先を覆う装甲で指先が鋭くなっており、突き刺したり抉ったりすることができる。見た目が一部の特撮系怪人の手に見えるが。

それと、並行して暗器の鍛錬もこの時期から始まった。最初は座学を中心に、ヒョウ（金に票と書く）のような飛び道具を中心に行った。このヒョウも穿山甲をつけたまま扱えるようにならなければならぬ。

これらを毎日続けて十二歳の頃、五禽戯の腕では父上とやり合って勝負の形になるようになった。ヒョウの扱いに至っては10メートル前後の距離で鎧を貫通できるようにになっていた。これには父上も驚きつつも褒めてくれた。尤も気功による身体能力の底上げは、どうにも燃費が悪く長く続かない。これに限っては子供の頃から余り成長していない。まあ、出力と言うか時間ごとのパワーは悪くないんだけどな。

それはそうと、この時期麗羽様たちとはしょっちゅう文通していた。あたしが袁家を出た次の年に妹が生まれたという手紙が来た。麗羽様の母上様とは違う、周陽様の正妻の子だそうだから多分その子が袁術なんだろうな。麗羽様は喜んでるだけ。それで、その

お世話役として七乃という人がやってきたそう。そういや父上の三番目の弟の娘がその名前だったな。たしか張勳、後の衝車な大將軍って従姉妹だったんだ、とか思ったりしたっけ。たしか、あたしより三、四歳上だったっけ。

更にそれから二年後。周陽様の知人である曹巨高、即ち曹嵩殿の娘と御友人になられたそう。真名と思しき華琳と言う名前だけしか書かれてなかった訳だけど、曹嵩の娘って事は曹操のことなんだろうな。いねえのかよ！有名どころで男のまんまのヤツ、誰かさー！

そして、あたしが十三になってすぐの頃だった。

父上が亡くなった。

別に危険な任についた結果とかそういうのじゃない。洛陽で少し疫病が流行った。ちょっとした流行り風邪のようなものだろう。そんなもんにやられてポツクリ逝ってしまった。なんてこともなくあつさり。

父上の葬儀の時に久しぶりに麗羽様たちと再会した。色々声を掛けてくれていたみたいだったが、余り覚えていない。結構あたしもシヨックだったのかも知れない。尤も一番シヨックだったのは母上だろう。まさか、父上の葬儀から一ヶ月も経たんうちに母上の葬儀も行わにゃならんことになるとは思わなかった。

その後、身寄りを失ったあたしは周陽様の好意で田元皓様、つまり南皮城にある田豊様の屋敷にお世話になっている。

聞いた話、父上が死んだことで次の細作衆の指導者を決める必要があるのだが、まあ当然子供のあたしにはまだ無理と言うことで父上の二番目の弟に決まるらしい。後から知ったことだがこの人張勳のお父上だった。

そういうことで袁家での立場を失うことになったあたしだが、麗羽様がそれを望まなかったらしい。ならば、天下の治安が乱れる兆候のある今、将として育てるのはどうか？ということでも軍略に明るい元皓様の下に預けられたのだった。

そういう訳で、元皓様に軍略を学んだり、武術の鍛錬をしたり毎日が日々が三年近く続いていた。そこでもやっぱり基本的に外出しないでいる。別にヒッキーとかじゃないぞ？忙しいんだよ、色々々々。

そんなある日、宛がわれた部屋で「墨子」を読んでいると部屋の扉をノックされた。

「張？よ、居るか」

「あ、はい」

「墨子」を机に置いて扉を開ける。そこに立っていたのは杖を突いて漸く立っているような白髪の老人だった。まるで仙人のよう

な感じの姿で、妙に長く見える頭に、長く伸びて垂れている眉毛に
されど鋭い視線を隠した河北随一の智謀の士である、田元皓その人
である。ただ、如何せん御歳八十六歳。直接戦場には赴くのは無理
なお体だ。正直官渡戦時の切り札になると思っていたが、この人官
渡に従軍しなかったのって投獄されたんでなく純粹に歳だったので
は？尚、沮授さんとも知り合いになった。あたしより五歳年上のお
兄さんなんだが病弱さが酷くて一年の半分を寢所で過ごすお人だ。
この人も戦場に出れるか・・・ここ数年で健康状態が良くなったら
しないかな。

ちなみにあたしの偽父と言つ字は母上の葬儀の時に周陽様にも
らったものだ。

「おお、張？、お主に仕事があるんじゃない？」

「あたしにですか？」

これには少し疑問を感じた。普段はあたしに勉学と鍛錬に集中
させるために家事の手伝いさえさせて貰えないのだ。それなのにあ
たしに仕事とは。

「うむ。お主に迎えに行つてほしい者が居つての」

話の概要はこうだった。

たまに文通している学士仲間で司馬徽と言う女性がいるのだそう
うで、この前手紙で軍略の弟子を取った（あたしのことだ）と伝え
たら向こうも弟子がいたらしく、延々と弟子自慢をする手紙が届い
たらしい。しかもそれが何通も続いてムカついたので、自分も出来
のいい弟子を育てて対抗してやるうという事にしたそうなの。

そういう訳で、以前から目をつけていた知人のお子さんを呼び
寄せ、今日の昼頃に着く予定なので迎えに行つて来いとのことだっ
た。

用件は理解できた。唯一つ疑問があつたので聞いて見た。

「あゝ、元皓様。弟子ならあたしがいるじゃないですか」

あたしも一応元皓様の弟子と、この家の人たちに認識されてい
る。あたしのことを書いたりしなかったのだろうか。

「お主、才能ないからかう」

返つてきたのはそんな言葉だった。

「……才能、ないですか……」

即答された……

「んむ。お主をどう教えても『頑張った凡人』以上のものにはならんしのう。自慢になぞならん」

ひでえ。あたしだって頑張ってたんだぞ、一応。元皓様の弟子ってことで屋敷の人たちには尊敬の眼差し受けるから、プレッシャーきついんだぞ。

そりゃ、司馬徽つつたら正史じゃ実は劉備より年下な水鏡先生だろう。ってことはその弟子は諸葛亮と鳳統だろ。さすがにこの二人と比べられないだろうけどさ。

あれ？司馬徽と諸葛亮、鳳統コンビって十歳差だったよな、正史だと。ということは弟子って違う人？

そんなことを考えながらも、仕事を引き受けていわれた待ち合わせ場所、南皮の南門のところまで待ち人を待つことになった。

尤もあたしは件の人物を知らないのです、どんな人物か聞いて見たら渋い顔で、

「笠から黒い絹で顔を隠した二人組みが来たらそれじゃ」

とだけ伝えられた。何その物凄く怪しい二人組み、とも思ったが顔を知られているほどの有名人の可能性もあることに思い至った。まあ、袁家ならそういうのもあるのかも知れない。皇族出身で曹操

の幕僚だった劉曄と言う例もあるし。

そして、そんな二人組みが来たら確実に門の警備といざこざになり易いだろうからと、事の次第を書いた書状をもらってきている。

で、南門に着いたわけですが、

「ですから田元皓殿に招かれた者だ、と裏禍たちは言っているのです」

「怪しいことなどないので早く城に入れて欲しい、と裏亞たちは要求します」

「顔を隠した黒ずくめが怪しくなかったらどんなヤツが怪しいって言うんだ！」

うん、問題絶賛発生中です。

元皓様が言った通り、笠から下がった黒い絹のベールで顔を隠し、その上そろって喪服のような黒い衣装に身を包んでいる二人が警備に捕まっていた。

絹が薄いのでなんとなく女の子だというのは分る。背は低く、幼い印象を受ける。ただ顔は見えないが、ベールから出ている髪が片方は白、もう片方が赤になっている。この差がないと同じ人間が二人並んでるように見えるな。声も似てたし・・・双子？でも髪が

な。

そんなことを考えながらあたしは警備の兵に声を掛ける。

「あ、すみません。あたし、田元皓様の使いの者なんですけど」

愛想笑いを浮かべるあたしに訝しげな顔を向けてきたが、元皓様の書状を見せると迷惑そうな視線を二人に向けた後、追い払うようにこの場から立ち去るように言われた。

「それでは、田元皓様が招いた新しいお弟子はあなたたちでいいのかな？」

通行の邪魔にならない位置まで移動して二人に聞く。

「その通りです、と裏禍は答えます」

「そういう貴女は元皓殿の不出来な弟子と書かれていた張儁義殿ですか？と裏亞は尋ねます」

何この電磁波シスターズ。つか元皓様そんな風にあたしを紹介してたのか。

「はい、姓は張、名は？、字は雋乂です」

心中の不満もこの二人には関係ないことなので、表に出さずに対応する。

「これはこれは、裏禍の姓は司馬、名は懿、字は仲達です、と裏禍は自己紹介します」

「裏禍の姉で、名は郎、字は伯達です、と裏亞も自己紹介します」

………なしてこげな人がここにおるですか？

司馬懿と言えば演義に於いては諸葛亮に迫る智謀の持ち主であり、実際魏に多大な貢献をした傑物である。

その兄である司馬郎も弟に及ばずながらも、優れた行政官として魏志に名を残している。

ちなみに赤い髪のほうが仲達殿で、白い髪が伯達殿である。

この人たち袁家と接点あったか？なんかどんどん知ってる歴史と乖離してるな。いや、女になってるのが何人もいる時点であたしの知識なんざ当てにならないのか？

「それでは元皓殿の下へご案内いただきたい、と裏禍は要請します」

「余り遅くなるのは無礼に当たるのではないか、と裏亞は考慮します」

こいつらは二人で一人か、いつも一緒に喋るな。大体仲達殿がなんか言って、伯達殿がそれに続く。

「あ、はい。ではご案内させていただきます。伯達殿、仲達殿」

第一印象を良くする為に努めて明るさを演出してみる。計算っぽくてアレだがこの二人と友誼を保つのは将来的に結構戦局に響いてくるだろう。ただでさえこっちの知力担当は（あたしが把握している限りは）不安があるのだ。主に戦場に連れて行き辛い言う意味で。可能ならこちらに取り込みたい。

「その演技は表情がぎこちないのであればやすいかと、と裏禍は指摘します」

「声色と言葉遣いに違和感があるので分りやすい、と裏亞は補足します」

あいた！いきなり悪印象か？

それにしてもそこまで言われるほど分りやすかったか？目上には大抵この態度だったぞ、この十何年間。

「ですが裏禍たちを気味悪がらないのは新鮮な感触だった、と裏禍は述べて見ます」

「人格か、趣向に一般的な人間と乖離があるのかとても興味深い、と裏亞は真情を吐露して見ます」

二人の表情は見えないが、声からして僅かにやわらかい笑顔を連想させるものだった。なのに一瞬背を走った悪寒は何だったのだろうか。

結局その感覚の正体は屋敷に戻っても分ることはなかった。

屋敷に戻り、元皓様の下に二人を連れて行った。その後、元皓様の意向で屋敷の人間全員を集めて二人の紹介を行うことになった。

あたしの時にもやったが、結構でかい屋敷なのに意外と使用人

が少ない。まあ、元皓様以外使用人という支配階級人口の少なさだからな。

客間に集められた使用人は十人ちよい。これもあたしが来たから雇われた人もいる。

そして、あたしは元皓様と二人を挟む形で使用人の人たちと相對する位置に立つ。

「今日から新しく弟子を取った。わしの娘と思って使えるように」

元皓様の言葉に、されど戸惑う使用人の皆さん。まあ、顔を隠した人に「はい、今日からご主人様ですよ」と言われても困るだろうな。

「ご紹介に与った司馬仲達です、と裏禍は自己紹介します」

「同じく司馬伯達です、と裏亞は続きます」

言葉と共に二人が笠を取る。肩まである髪が顕わになる。あたしの位置がやや後ろよりで二人の顔は見えない。だが、逆に使用人の人たちの表情が驚き、次いで嫌悪のそれに変わっていくのが見て取れた。

何事？

「では誰か、二人に用意した部屋に案内せい」

元皓様の言葉に顔を見合わせる皆さん。だが、動く人はいない。厄介事を人に押し付けようとしているような感じた。普段なら結構従順に仕事をこなすのになあ？

「むう、仕方ない。張？、部屋は分るか？」

渋い表情で使用人の人たちを眺めていた元皓様が聞いてきた。そう言えば最近なんか片付けして使えるようにした部屋があったな。

「あゝ、はい。多分」

「そうか、すまんがこの子らを部屋に案内してくれんか？」

「分かりました。じゃあ、二人ともあたしに着いて来て下さい」

そう言っただけであたしは両手で二人の手を取る。この時初めて見る事が出来た二人の顔は、正しく双子の顔だった。髪と瞳の色が違うこと以外は全く同じものだった。

だが二人は動かず立ち尽くしたままだった。

「どうしたんですか？二人とも。行かないんですか？」

あたしの言葉に二人は幼さの目立つ、中性的な顔に驚きの表情を貼り付けていた。

「あ、貴女は何故裏禍たちの顔を見て平然としているのか、と裏禍は問います」

「貴女は裏亞たちがふ、双子の姉妹だと認識していないのか、と裏亞はた、尋ねます」

まあ、髪の色でちょっと疑問を感じたくらいだ。それがなかったら双子である事を疑いもしなかっただろう。

「まあ、初めての時からなんとなくは」

えと、なんでそんなに驚いてんの？双子だけでなく使用人の人たちにも驚きの目で見られる。ただ、元皓様だけが「良いもん見たな」的な顔でうんうん頷いている。

「えと、一体どういふこと！？」

どういふことが聞こうとしたその時、双子に飛びつかれ、頭を打って気を失ったそうなの。

眼を覚ました時には何故か双子以上に懐かっていた。真名を預けられた上、スール宣言を受けました。何故に？

後に元皓様から聞いた話では、漢に於いて双子は忌み子とされ、そのせいで実家でも不遇の日々を送っていたと言う。そして双子を普通の人として扱ったあたしの器に惹かれたのだらうと仰った（元皓様もはじめてあったころは嫌われるような言動を取っていたらしい）。

正直単にそんな風習を知らなかっただけであり、そんなことで大仰に反応されるのはちょっとアレである。寧ろ恥ずかしさが出てきてしまう。

だからあたしは、彼女たちがそれを望む限り、姉として接して行こうと思った。

第五回 勉強しまっせ 引越しの

司馬懿をゲットしてこれなら曹操にも諸葛亮にも対抗できるぜ！なんて思っていた頃があたしにもありました。

司馬姉妹がプテイスールになってから一年ほどたった。元皓様の軍略、政治の講義の後、二人はよくあたしに分らなかつたところを聴きに来るようになっていた。・・・うん、あたしに聴きに来るんだ。

二人は実家でもいい待遇ではなく、この手の教育を受けたことはなかつた。二人の才能云々はあくまで頭の回転とかそついうのである。

二人の飲み込みは異常に早く、正に天才と言うものだろう。裏禍が軍略、裏亞が政治と、それぞれ偏りがあるものの、あたしとは比べ物にならないほどの成長速度である。

とは言え、僅か一年である。あたしとて数年間元皓殿の下で勉強してきたのだ。一日の長どころではないがまだまだあたしのほうが二人より上なのだ。

・・・笑えねえ。

最近は悪徳役人に追い詰められた農民が土地を離れて流賊化して、他の農民を襲うと言う事件が増えている。それで襲われた側も流民になり、やがて飢えて流賊と化す訳で。

黄巾の乱まで秒読み開始と言った感じになってきている。この子達の成長が、せめてちゃんとして軍隊を相手にする頃には形になって欲しいな。・・・ただ、事あるごとに抱きついてくる行為は精神的に多くの癒しを運んでくれるので嬉しいのだが。たまに朝起きたら布団の左右を占領されていることもしばしばである。

それはそうと最近引つ越しました。都にて麗羽さまが正式に官位を授かり、渤海郡の太守になったのである。ただそれ以外に朝廷の直属の将としても官位を受けたので当分は都を離れないと言うことらしい。よって太守代行が必要になる訳だが、軍政両略に通じる元皓様を選ばれ、あたしたちも一緒に渤海にお引つ越しと言う訳である。ただ引つ越しの際、「引つ越し」、引つ越し、さつさと引つ越し、「などと言うニューースで聞いた記憶がある歌を誰かが口ずさんでいたのはあたしの気のせいだと思いたい。

時に渤海って単語がエロいと感じるのはあたしの精神がまだ男である証明だと思うんだ。

と言つ訳であたしらも元皓様の新しいお宅になつた渤海の太守府にお世話になっています。

元皓様が渤海太守代行となつて、まず始めたのが人事の刷新である。永らく袁家に仕えていたりする信頼できる人間を査察官として、県令や相の仕事ぶりを把握していく。有能ならそのままにするか、場合によつてはより上の地位に取り立てる。無能ならば官位の剥奪。汚職を行う輩は法に拠つて裁く。

当たり前つちや当たり前なんだが、金で官位を買つた連中が多いせいか、汚職率の高いこと。空いたポジションが多いからそこから人選だけで大変だつたそう。

次いで袁家の名に於いて私兵を集め始めた。いくら拠点を得たとは言え、郡ひとつで養える兵には限りがある。そしていざ動かす時にも、城が直接攻められでもない限り動かすのに、事務的な意味で時間がかかる。その為に急増してきた山賊やらを討伐するための私兵が会つたほうが都合がいいのである。

本来そんな朝廷にとつても脅威になり得ることが許されることはいらないのだが、名門袁家が宮廷で覚えめでたいことと今の治安の乱れが著しいこの時世によつて認められている。理由の大部分が今の皇帝の無能に起因していることは考えないでおこう。

宮廷で多くの官職と爵位を持つ袁家の碌は凄まじく、貯蓄を一切使わずに養える限界数は一万余だそうで、いざと言つ時のために余裕を持たせて一万の兵を募集する予定らしい。

あたしも最近見習いの将として、仕事を任されるようになった。まあ、見習いなので当然重要なものは回つてこず、寧ろ勉強の日々

と言った感じである。

時に最近猪々子と斗詩が并州から幽州に掛けて近頃活発に略奪などを行っている鮮卑、烏丸の討伐で朝廷からの援軍の武将として活躍しているらしい。麗羽様は合い変わらず宮仕えとの事。

そんなある日、あたしは書き物をした。内容は屯田に関するもので、嘗て曹操の勢力化で韓浩が行ったものをあたしが覚えている範囲で書き出しているのだ。・・・訂正、これから行うだろう、である。

文官でもないあたしがそんなもん書いているのには理由がある。先日、麗羽様から送られてきた手紙で華琳さんなる人物（多分曹操）が陳留の太守になったと言う内容が書かれていた。あたしの予想道理この人物が曹操だった場合非常に不味い。

あたしが知る限り曹操は反董卓連合まで、郡一つを管理できるような官職は経験していない筈である。その後、？州牧に任じられるまで基盤らしい基盤を持ったことがない筈なのだ。

にも拘らずやがては袁紹を破り天下の七割とも言われる巨大な勢力を創り上げるに至るのだ。ならばこの時点で曹操が独自の戦力を手に入れるような基盤を手に入れたことはあたしらにとって大きな脅威足り得る。手に入れてなくても凄まじい脅威なのに。

そんなわけでも何でも良いからこっちの勢力を早い段階で少しでも向上させておく必要が出来た。そんな中思いついた、というより

思い出したのが屯田である。

暇な時の軍人に自分らの食う分の兵糧を作らせる軍屯。これは後に蜀や呉でも行われている。

更に曹操の勢力下でしか行われなかったもう一手、民屯である。これは流民等に空いている土地を与えて開墾させるものである。一見どうと言つことのないように思えるが実際そうでもない。

流民とは即ち生きるために土地を捨てた人間である。そんな人々を再び土地に縛り付けなければならぬのだ。その人たちの感情的なもの等もあり、近隣住民との争いが起こりやすいとも言つ。更に開墾をするための農具、牛馬、穀物が取れるまでの食料の用意等出費も嵩む。

と言つ訳で、

「どう思つよ？二人とも」

軍略はともかく、内政に置いて完全にあたしを上回る二人にアドバイスをもらつことにした。

二人は一つの竹簡に、同じペースで眼を動かし、同じペースで読み終え、裏亞が次の竹簡をもつて来て裏禍が片端を持って広げると言つ見事なコンビプレイを見せていた。

竹簡を読み終わり、二人が視線をこちら見向ける。ちよつと緊張する。

「すばらしく革新的な計画です、と裏禍は感嘆します」

「具体的な数値を盛り込めればすぐに草案として通用する、と裏亞は申告します」

無表情なまま絶賛してくれた。どうやらちゃんと纏めることができていたようだ。思わず片手を握ってガッツポーズをやってしまった。

この二人、出会った日の出来事以来、あたししかない時は顔を隠さないようになっていた。だが、永らく他人とコミュニケーションをとることのない生活を送ってきたせいか、一年を過ごしてきたあたしでも表情から一切の感情を読み取ることが出来ないでいる。

その分体に抱き付いてきたりと行動で示すことがある。そんなときは前世を思い出す。人生に三度あるといわれるモテ期は一度もこなかったが、子供には異常に好かれてたぜ・・・

「すぐに放棄された田畑と開墾に適した土地の調査計画を起草すべき、と裏禍は提案します」

「袁家の碌の余剰分で年間で養える人数を早急に計算すべき、と裏亞は提案します」

読み終わった竹簡を机に纏めるとすぐにこの計画に必要な具体的なデータを纏める計画を話し合い始めた。必要なデータの具体的な内容を他の竹簡に書き込んでいく。あたしはこっち方面ダメダメなので大人しく見ているだけ。

この後三人で元皓様にあたしの書いた屯田計画書と、司馬姉妹が起草した関連情報調査計画書が渡され、次の日にはGOサインが出るに至る。・・・後から気付いたけど、これってある程度資金力がないと実行できないのが難点だな。

そんな訳で屯田に使う土地に関する情報の調査は発案者のあたしが担当することになってしまった。尤もこういう作業をあたしが出来るわけもなく、一緒に来た役人に任せている。一応発案者として何もさせないわけに行かなかった、と言つのがあたしがここにいる理由だった。後なんかあった時に護衛の指示とか。

ちなみに司馬姉妹は農具や牛馬の相場とかを調べて貰っている。

何箇所か打ち捨てられた廃村を回って使えそうな土地の面積を調べ、残りの土地を3日ほどに分けて調べると言う事前の計画通りのペースで行う確認をとり、解散の流れになった。

そこで屋敷に戻ったあたしは厨房に立っていた。

料理。あたしの最近の趣味と言つか何と言つか。

張儁父として生を受けて早十七年。前世の味覚が恋しくなることが偶にある。衝動的にそれらの味を蘇らせたくなることがあり、そういう時は自ら厨房に立ち、色々試行錯誤したりする。大まかな作り方が分つても材料がそろわないものが多かつたりするのでそこいらで苦労するが。

そんでもって今挑戦中なのが、

「不思議な甘さがある匂いである、と裏禍は評します」

「妙に粘着質な感じである、と裏亞は評します」

あたしが鍋の中で掻き回し続けている黄色がかった白濁液を二人はそう評した。

うん、何回目かのキャラメル再現に挑戦中なんだ。

作り方が簡単なお菓子やらは幾つか再現に成功してきたが、このキャラメルだけはうまくいかない。ちなみにキャラメル作り中に二人が来たのは今回が初めて。試作品の試食は何回か頼んではいるけど。

基本的に牛乳に砂糖やら蜂蜜やらを混ぜて水分が飛ぶまで煮続けたり、氷水で冷やしたりなんだがまず最初に材料の生クリームの作り方が分らない。まあ、これは試作品の味を見て変わりになるものを探せば良いだろうと思ひ、取り敢えず作ってみようとしたんだが意外なことに牛乳がダメダメだった。

この時代漢人は基本的に乳製品を食べる風習はなく、牛乳を飲み物と認識していない（一部商人除く）。まあ、近くの農民にお願いして売ってもらったが（こんなもんが売れんのか）と驚かれた味の薄いこと。うん、この時代の中国にホルスタインなんぞいる訳ないもんな。

と言う訳で牛乳と羊乳を混ぜてホルスタインの味に似せることから始まった。牛乳の比率が高すぎると味が薄くなり、逆に羊乳が濃いと羊乳特有の臭みが出てきてしまう。だがまさか、牛乳を「調合」する日が来ようとはな。まあ混ぜてる訳だから牛乳じゃないんだが。

そんなこんなでキャラメルモドキの開発は難航している。そこそこ美味しいゲル状の何かにはなるんだがキャラメルとは、ちと違うんだよな。

「味自体は強い甘みが口に溶けて行くのがとても新鮮です、と裏禍は賞賛してみます」

「ただ後味は油が残っているような感触が気になります、と裏亞は批評します」

うん、煮詰めすぎたか？確かに後味のくどい油のような感じがする。舌に感じる味そのものは悪くないんだがな。

三人で出来上がったキャラメルモドキを試食しての感想だった。
・・・今回も微妙だな。

「以前作って貰った玉蜀黍のお菓子が一番好みです、と裏禍は述べます」

「あの茶色の液体のほのかな甘みが良い、と裏亞は述べます」

ああ、ポップコーンね。カラメルソースを絡めたやつは、そう言えば好評だった。・・・駄洒落じゃないよ？

「ん〜、じゃあ口直しに食べようか。爆米花」

尚、爆米花はポップコーンのことである。玉蜀黍の実が破裂してできる様を見て使用人の人たちが付けた名前である。この二人がその時厨房にいなかった訳だが、そこら辺の事情は今ここに司馬姉妹とあたししかないのと同じ理由だ。

まだこの屋敷の使用人たちに受け入れられていないのである。忌み子と言う悪しき伝統はあたしの想像以上に人の心深くにこびりついているようだ。そのこともあるのだろう、未だ彼女らはあたし

以外の間があるときは必ず顔を隠している。

兎に角あたしは作り置いていた糖水爆米花カラメルポップコーンを入れた壺を取り出し、その間に二人が新しくお茶を入れてくれる。

二人と共に、ポップコーンを食べながらお茶を飲む。あたしが何か喋り、裏禍が応答し、裏亞が追従もしくは補足する。本来なら茶房でやりたいところだが人前で顔を隠す二人はそういう場所には連れていき辛いものがある。なのでいつも屋敷の中でお茶をするこ
とになる。

・・・その所、どう感じているのか。あたしじゃまだその表情や声から彼女らの感情も、心情も察することが出来ないでいる。

渤海周辺の土地調査を終え、太守府に戻り、報告を纏めて元皓様の居る執務室に向かう。渤海の本城だけでなく、郡内八城（本城含む）全ての調査結果を纏めたものなので竹筒で結構な量になる。両手で持ちきれないので竹筒を運ぶ専用の四角いお盆のようなものを使っている。それでも高々と積み上げられている。

ええ〜い！前が見辛い！

そういえば最近乳の成長速度が上がってきた気がする。もうそろそろ、足元が見え辛くなってきている。

恐らく司馬姉妹があたしの胸に顔を埋めるなどのコミュニケーションをとりようになつたせいかと思う。正直あたしは巨乳派だがそれが自分の胸についているというのは正直微妙な気分だ。

そんな事を考えながら執務室に到着。一声掛け、返事を貰ってから入る。

「渤海郡領内での土地調査結果です」

元皓様は見ていた他の竹簡を置き、私の竹簡に目を通し始める。

「では、あたしはこれで」

「待ちなさい、僦。少し話がある。そこで待っていないさい」

部屋を出ようとするあたしを、元皓様が引きとめた。この後、特に用事があるわけでもないあたしは黙って部屋の隅の椅子に腰掛ける。

その後、元皓様は黙々と竹簡を読んでいる。一番上に置いているやつだから渤海本城管轄範囲内のやつか。

しばらくして竹簡を読み終わったのか、机の上に置く。そしてあたしに向き直る。

そして放たれたのは、あたしが予想だにしなかった言葉だった。

「のう、僞父。お主、将になるのを諦めんか？」

第六回 黒羽の旅

故あつて渤海を出、旅を始めてもうすぐ一ヶ月。取り敢えず行く当てもなかつたのでこの時代に生まれてから一度も見えていない海を見てみようと東に向かつていた。

荷物は頂いた驢馬に積み、あたしはそれを引つ張つて歩いていく。幸い路銀は結構な額を貰っているからそつちでの心配は今のところはな。そんな訳でトコトコ野を歩く。水と食料も充分あり、あたし自身サバイバル技能があるから野宿も問題なし。なのだが・

「退屈だ〜」

歩けど歩けど道しかない。道の両脇にはやけに背の高い雑草が生えている。

近頃は賊が出易いそうなのでやっぱこう、長距離の旅は控えている人が多いのかな。道中での出会いにこそ旅の面白みがあるんだろ？それが城や集落を出ると人っ子一人出会いやしない。あ〜、賑わいが欲しい。こう、キャラバンとかそういうのと出会って、色々な地方の話を聴いてとか期待してただけだな〜。

「・・・喋るバイクが存在して良いんなら、喋る驢馬がいても良いんじゃないかと思うんだがどうかね？」

驢馬に話しかけてみた。取り敢えず何の反応も返してくれなかった。寂しくなぐ。もういつそ賊でも襲ってこないかなぐ。十人くらいなら相手するよぐ。

「盗賊やぐい。おいでなさぐい」

その声をあげてみる。やっぱり反応はなし。ふと地平線辺りから土煙が上がっているのが見えたのはその時だった。

「様子を見て見ようか？」

驢馬にもう一度話しかけるが、やっぱり反応してくれなかった。

視点変更

「ひゃあああああ！姉ちゃんが雇った護衛全然駄目じゃん！ほとんど逃げちゃったぞ！」

「うっさい！私に言うな！どうしようもないじゃんそんなの！」

匪賊の攻撃を受け、混戦になっている商隊周辺の情景を私は親友の依湖と抱き合いながら馬車の中で震えていた。

幽州で商人をしていた私たちは、匪賊蔓延るこの時世は上手くすれば通常以上の大儲けが出来ると考えた。そして世の中、軍による匪賊相手の戦が増えていくだろうから値が高騰しないうちに駿馬を買おうということになった。

その資金を作るために今まで商っていた調度品とかを多少損が出ても良いから青洲の商人仲間に売り払いに向かう途中に匪賊に襲われた。一応そういうことも織り込み済みだったから護衛も雇っていたけど匪賊に襲われたらすぐに逃げ出してしまった。

今は十人くらいしか残っていない。敵は三十人以上いてこっちが押されていた。今は白い装束の女の武人が何とか支えているけど、私たちの居る馬車を守るためにここに釘付けになっている。一応荷物も守って貰わないと困るけどその為に私たち自身の安全を捨てるわけには行かないし。

「張世平殿、さすがにこの数の差では積荷を守り抜くのは些か
厳しいものがありますぞ」

馬車を守りながら馬上で槍を振るいながら女の武人は言ってきた。

「いつそのこと荷馬車は捨てて逃げたほうがよいのでは？」

そう言う女武人の表情にはまだまだ余裕があつたが恐らく私たちの安全と残りの護衛の人たちの事のための発言なんだろう。

「そ、そんな！積荷を守るのも契約の内でだろ！？何とかしろよ！」

「そうは言ってもこの数の差では貴女方と積荷の両方を守るのは無理ですな。蘇双殿、やはり命あつての物種なのでは？」

「う~~~~！」

女武人の言葉に依湖は涙目になってしまふ。女武人の言ってることも確かだけど、私たちにとつてこの商隊の積荷は私たちのほぼ全財産に当たる。これらを失ったら、故郷にある僅かな蓄えでは私

たちはいずれ路頭に迷うかもしれない。少なくとも今回の積荷分丸々失った場合、樂觀的に見ても私たちの代で今の状態までの富は取り戻せないと思う。

「どうにもならないの？もう」

「ふむ、せめてもう一人。ここを任せられるだけの者が居れば、私が敵の頭の首を取って追い払えますが。如何せん、そのような者はいないようで」

言いながら敵を一人突き殺す。確かに彼女なら敵の囲みを単身突き破って指揮している賊将を倒せるかもしれない。でもそれでは私と依湖を守ることが出来なくなる。でも・・・

「私たちのことはいいわ！敵を追い払って私たちの積荷を守って！」

決断するしかない。ここで全てを失うくらいなら！

「ちよっ！姉ちゃんに言ってんだよ！そんなことしたら・・・

！」

「ほう・・・」

私の言葉に依湖は驚きの声を上げ、女武人は感心したといったような視線を向けてくる。

「依湖、私たちは商人だよ。商いに命を掛ける人間なの。ここに持って来てる荷物はちよつとやさつとで取り戻せるものじゃないんだよ」

怖いけどここで積荷を失うことは許されない。元より博打の要素が強い今回の商売だけど、商談を始める前に負けていいのは、商談の前に死んだ時だけだと思っから。

「・・・分つたよ、姉ちゃん。じゃあ、あんた！早く連中追いかつて僕たちの積荷を守って！」

震えながらだけど、依湖も最後は賛成してくれた。

「ふむ、商人と言うのも存外に気骨があるものですね。ならばこちらも私もそれに応えないといけませんな」

そう言つて女武人は槍を払い、賊たちとの間合いを開ける。

「聞け！賊徒共よ！常山の昇り竜、趙子龍が槍捌き・・・む？」

趙子龍と名乗った女武人が向上を途中で止めてしまった。不思議に思い依湖と一緒に彼女の見ている先に眼を向ける。その先では商隊を襲っていた賊たちが後退していた。

視点返還

さて、驢馬を草むらに隠して自分も草むらの中に隠れながら進んでいく。気分は年老いた蛇さんです。若いけど。

近づいて見るとどうやらキャラバンに盗賊が群がっているようだった。見た感じではキャラバン側が劣勢かな？なんか結構戦闘要員の数に差があるようだ。お、白い服の女の人っえ。なんかすげー強いのが一人いる。でもなんか全力を出せていない感じかな？

盗賊の様子を見るに黄巾賊ではなさそうだ。黄色い布ないし。

さて、どうするかね。キャラバンを助けに入るのもいいけど、ただあたしが乱入して行ってもな。下手したらキャラバンの人たちまで混乱するかもしれないしな。どうしたもんか。

「頭を押さえるのがやっぱ一番かな」

草むらから頭だけ出して周囲を見回す。そして一人だけ馬に跨り、戦闘に参加せずに命令をとばしている男を見つけた。多分あれだろう。

音をたてないようにゆっくりと、動作を小さくして動いてゆく。

そして男のすぐ傍まで近づく。まだ気付かれていない。距離もあたしの脚力なら一瞬で詰められる距離だ。袖に隠した暗器から、今回チヨイスするのは峨媚刺。

日本の寸鉄の原型とも言われる暗器で20cm前後の金属棒の両端を尖らせ、中央に中指で固定するための輪がついている物である。物が小さく、扱いも簡単なので光が反射する可能性のある刃物類より隠密性が高い。

願わくはこの男に、盗賊たちに対して人望がありますように、と。

「とりゃー！」

軽く掛け声と共に跳躍。男が跨っている馬の背に着地する。つまりは男の背後でもある訳で。

「な、なんだてめえ！」

突然現れたあたしに驚きながらも、同じく驚いて騒ぎ出した馬を制御するために武器を取ることが出来ない。その隙にあたしは後ろから男の首を左腕で抱え込むように固定し、右手に持った峨媚刺を喉元に突きつける。

「動くなよ。でないと、言わんでも分るだろ？」

男の動きを封じ、軽いパニックから馬が回復するのを待つ。そこまで着地で衝撃が伝わらないようにしてたから馬のもすぐに落ち着きを取り戻した。

「お前、こいつらの親玉？」

「てめえ、俺にこんなことして・・・!!」

こっちの質問を無視して喚きだそうとする男の喉に突きつけている峨媚刺を少し食い込ませる。

「質問してんのはこっち。答える」

出来る限り感情の籠らない声をつくる。相手が怯えてくれれば有利に交渉できる。父上に学んだ尋問術の応用である。

「うっ、そ、そっだ。俺がこいつらの頭だ」

「そうか。じゃ、自分に人望がある事を祈っとけ」

そう言っつて男に当身を入れて眠ってもらっつ。そして深呼吸一つ。交渉の真似事を始める。

「賊徒共！貴様らの頭目は既に我が手の内にある！」

声を高らかに宣言する。すると手の空いてる盗賊たちがこちらを向く。その表情は一様に驚愕と緊張に染まっつていく。

「ここから去っつていけば貴様らの頭目は解放しよう。さもなければここで貴様らの頭目の喉を掻き切り貴様らも同様にこの手で引導を渡す！」

明らかに連中は動揺していた。互いに顔を見やり、どうすれば良いか分らないといった感じた。正直この男に人望がなかった場合、つかあつた場合でも数に任せてこの男ごとあたしを殺そうとする可能性のほうが高い。

一応この人数ならあたし一人でも追い払える自信はある。だが、その場合半数以上の敵を殺すことになる。あたしにとっては特に意味のある戦いで、人を殺すのは可能なら避けたかった。殺すのは得意ではあるけど好きではないので。

「お、俺たちが帰ったらお前がお頭を殺さない保障があるのか」

連中の中の一人がそんな事を口にした。まあ、ここら辺は当然か。

「そうだ！それにお頭を殺して、この人数相手にどうにかできるとでも思ってるのか！」

まあ、自信はあるよ。一応渤海でも何回か盗賊退治に借り出されてるし。その経験の上でこいつら程度なら大丈夫だと思う。

「貴様らのことは恐れる理由があたしにやないんでね！貴様らの頭目に関してもだ！退けば助かるかもしれないが、このままじゃ確実に死ぬことになるぞ！」

そう言って男の喉元にさつき仕舞った峨媚刺の代わりに取り出した匕首を首に当てる。それを見て盗賊たちは慌てた表情になる。

「わ、分った。だからお頭には手を出すな」

盗賊たちの中でも年長そうな男がそう口にする、他の盗賊たちもあたしを刺激しないようにするためか、一歩下がる。

「おい！お前ら！引き上げるぞ！積荷は捨て置け！」

年長の盗賊の声と共に、他の連中も続々と撤退していく。何者だ？本当に。並みの慕われ具合じゃないぞ。ひよつとすると大物かこいつ？

盗賊たちが引く際、キャラバン側が追撃しなかったのも良かった。正確には精も根も尽き果てて動けなかったみたいだが。追撃かけられてたら流石に敵も応戦せざるを得ないからな。

それにしても本当に成功するとはな。こいつもすごい人望だな。何事もやって見るもんだわ。

正直自分でも予想外だったが、結果は上々か。ここまでは良かったが・・・これからどうしようか。介入した後どう始末つけるか考えてなかった。

そんな部分で悩んでいたあたしに、さっき一人突出した強さを見せた白い服の女と小柄な少女二人がこっちにやってきた。

「えと、賊徒たちが退いて行ったのは、あなたのおかげ・・・
でいいのでしょうか？」

小柄な娘の片方がそう聞いてくる。ちなみにあたしはまだ馬に乗って盗賊たちの頭目を拘束しているからあたしが三人を見下ろす形になっている。

「あゝ、なんか危なさそうだったんで勝手に手を出しちゃいまして。お節介でしたかね？」

流石に上から見下ろし続けるのはアレなので馬から下りようと、先にこの男を拘束することにした。袖から流星鎚を取り出す。これは縄の先に鈍器を括りつけた物でこれで男を縛り上げる。

「いえ、決してそのような。寧ろ助かりました」

声をかけてきた女の子が恐縮したように頭を下げる。あたしは男の両手を縛り、更に馬の首に括り付ける。そんでもってこいつが起きて暴れだしても押さえられるように馬の手綱を握っておく。

「それは良かった。そんじゃあたしはこれで」

そう言つて驢馬を隠した場所に馬を引つ張つて行くとする。
自分の驢馬も気になるし、時間を見てこの男も開放せにやらんし。

「あ、ちよつと待つてください」

呼び止められた。そのまま行くわけにも行かず、取り敢えず話を聞くことにする。

彼女の名は張世平と言ひ、このキャラバンの責任者との事。横にいる少女は彼女の商売仲間の蘇双というらしい。彼女らの言うには彼女たちは青洲の北海に向かつてるので、あたしに護衛に入つて欲しいとのことらしい。

ふむ、海に向かうと丁度北海の方向に向かうんだよな。そこから辺に不都合はない。報酬も出すと言われたがそつちに関しては困つていない。けどやつて見ようかという思いがある。理由はこの二人の横にいる白服の女だ。

さつきの戦いを見てこの女、相当強い。多分あたしと真つ当にやりあつたら、こつちに分が悪い。正直彼女に興味が湧いたし、可能ならこちらの陣営に引き込みたい。そう考えてあたしは、盗賊の頭の男の処遇をあたしに任せる事を条件に彼女らに同行する事を承諾した。

そして出発してからおおよそ五分くらいたつた後、

「あ！あたしの驢馬と荷物！」

大事な事を思い出したのだった。

第七回 華蝶の交わり

「のう、儂又。お主、将になるのを諦めんか？」

「へあ？」

元皓様の言葉の意味を把握しきれずに、思わず変な声を出してしまった。

「えと、あたしなんか至らない部分があつたでしょうか？」

最近の仕事ぶりを思い返すが、特に失敗した記憶はない。盗賊相手の討伐にも何回か参加してるがちゃんと戦果も挙げているし、訓練の方も最低限人並みには出来ている筈だ。自分が優秀だと思っている訳ではないが、辞めさせられるほどでもない筈なんだが。

「あゝ、そうではない。お主に何かしらの非がある訳ではない。まあ、よくやってくれてはいるよ」

「ならば何故？」

元皓様の意図が理解できない。何かを言い辛そうにしている。

「あゝ、そうじゃ、今回の屯田な。あれに他の文官たちがえらく感銘を受けての、是非に郡の政に参加して欲しいと言われている。いつその事文官に鞍替えせんかね？と思つての」

「元皓様。それ思いつきり今考え出しままませんでしたか？」

「そ、そんなことないぞ」

なんかすつげえどもつたよね。

「あの、元皓様？何か隠してませんか？」

訝しく思つたあたしは元皓様に問いかけた。対して元皓様は黙りこくってしまう。

しばらく、何か悩んだ顔をしていたがやがて口を開いた。

「隠しているというのとは違つが……。のう、僞又よ。おぬしは何のために袁家の臣でいる。何のために戦っている」

出てきたのはそんな言葉だった。

「へあ？あ、いや、まあ、袁家には恩がありますし、麗羽様たちもいますから……」

突然言われた内容にどう答えていいのか分らず、ついしどろもどろな回答を返してしまふ。

「ふむ。まあ、お主に模範的な回答を期待しては居らんよ。なるほど、袁家に対する恩義と本初様への友誼か。これはまあ本当であるう。疑いはせん。じゃがな僞又……」

真剣な表情で元皓様は続ける。

「お主自身にとっての戦う意義は何処にある？」

「や、ですから袁家の恩と……」

「それはお主が袁家に対するものだ。わしが問うておるのはお

主自身に対するものじゃ」

「あたし自身、にですか？」

元皓様の伝えたいことがいまいち理解できないでいるあたしに元皓様は続ける。

元皓様が仰るには、あたしが麗羽様たちに向ける感情を疑うようなことはしてないと言う。問題はあたしの戦う理由がそれだけで埋められていることらしい。自身に志、例えば俗な欲望でもいいから己のための理由がない人間は戦場で死に易いと言う。

元皓様の実体験からのお言葉らしいので大人しく聴いているがいまいちピンと来ない。

元皓様の若い頃、何度か山賊などの討伐に従軍していた頃。当時の友人には袁家に何かしらの恩義を受け、その恩返しのために戦に参加した者も多かった。そしてそういう者ほど、危険に陥った時に諦めてしまうのだそうだ。そして、元皓様はあたしもその類の人間なのと言う。そして、そんなあたしが戦場に出て早くに死んでいくのを見たくないと言ってくれた。

けどそんなこと言われてもな〜。

「お言葉ですが、元皓様。あたしも死ぬのが怖い人間です。そうそう諦めたりするつもりはないですよ」

永らくこの時代に生きて来て、この時代に染まってきているのは否定しない。だが、流石に「この命尽きるとも！」とかそういう考えはない。他人の死に対して大分ドライになったのは自覚できるが、根っこの部分では相変わらず21世紀日本人のものであるつもりだ。

「そういう意味とは少々違うのう。生きることには意地汚くなれるか、というべきかの？上手い言葉が見つからん」

「どうやら元皓様も悩んでいるようだ。ふむ、危険から離れることには有り難いのだが、それでこっちの戦闘要員が減ることになるしな。猪々子と斗詩の二人の能力は疑いない。知っている歴史通りならば。だが、層の厚さでは完敗してるし、この二人だけでは関渡で詰むことになる。」

「仕方ない。僞又よ」

しばらく悩んで、考えが纏まったのか元皓様が声をかけてきた。あたしは黙って聴くことにした。

「しばらく俗世に塗れて来るのじゃ。思えばお主はわしの元に来てから勉学の日々であったし、その前は鍛錬ばかりであったと聞く。一度俗世を回って見れば、何かしらの変化があるかも知れん」

元皓様のこの言葉であたしは旅に出させられることに決まった。余程のことがない限り、最低一年は戻ってくるなと付け加えられて

「と言う感じで屋敷を追い出されてな」

馬車に揺られながら、一時の縁で出会った旅人同士の会話。これが本当の旅つてもんだらう。

商人二人の乗る馬車の後ろの荷馬車の荷物の上で、寝転がりながら臨時の同僚と語りをする。相手は白衣の女槍使い。趙雲さんでした。びつくらこいたべさ。まあ、字の子龍さんで呼ばせて貰ってますが。時に子龍さんの槍は某ロンギヌスにしか見えないから困る。

キャラバンと合流してから数日、一緒に酒を飲みながら互いに身の上話とかをする程度には仲良くなっていった。ちなみに酒はあたしが自腹で飲む都度、張世平さんから買っている。壺入りのやつを瓢箪に幾つかの瓢箪に入れて保存している。

「ふむ、雋父殿の師は中々に思慮深い方のような。だが、以前言ったあの姉妹はどうしたのだ？間違っても無関心ではないと

思っのだが」

「まあ、当然泣かれたな」

あの後事情を説明したら先ずは「捨てないで」とばかりにあたしに縋り付きながら泣き叫び、何とかあやして落ち着きを取り戻したら今度は元皓様暗殺計画を相談し始めた。何とか止めることは出来たが、アレは本気の眼だった・・・

「ほほう、随分と愛されているではないか」

あたしのお話を聞き、口元をいやらしく歪める子龍さん。ここ数日の付き合いで知ったのはこの人は他人をからかうのが大好きなどエスだ。下手な事を話すと、とことん弄り倒されることになりかねない。だからそれ以降旅立つまで毎日同じ床で寝たことも、旅立つ前日の晩に二人に襲われて頂かれてしまったことも絶対に話すものか。

「あたしはまあ、こんな感じだけど子龍さんはどうしてこんな事を？」

「ふむ、まあかくかくしかじかだな」

「ふむ、まるまるうまつまと言っわけか・・・って分かんねえですよ！」

子龍さんの話によると、以前は知人二人と共に見聞を広めるための旅をしていたらしい。その後この荒れた世を憂い、世を正すために己を活かせる主を求めて別れたそうだ。その後、仕えるに値する主君に巡り会えないでいるうちに路銀がなくなってきたのでこの仕事に着いてきたと言っ。

「主ねえ。まあ、あたしゃ仕える相手が決まってるからな。できれば子龍さんにはこっちについて欲しいんだけどな」

これは正直な気持ちである。歴史に名高い趙子龍の槍捌きなんぞこの身で味わいたくない。逆に味方でいてくれたらどれだけ心強いかな・・・弄り倒されさえしなけりや。

「ふむ、袁紹殿か。悪い噂は聞かぬが、さてどうしたものかな」

そう呟く子龍さんの表情はどこか楽しげであった。

合流してからの数日か、一度盗賊の襲撃を受けたがそれ以外は特にこともなくたびは順調である。

その際はあたしが飛び道具で広範囲を牽制し、子龍さんが単騎駆けで敵の偉そうな奴らの首飛ばして終わりだった。

最初の盗賊の男は合流した次の日に解放した。約束は守らんな。その時にされた自己紹介では飛燕と名乗っていた。こいつ黒山賊の張燕だったのか。なるほど、マイナーだが大物には違いない。つつか最近ここの男女逆転は知名度が関係してるのではないかという気がしてきた。

それはそうとこの旅も後半日で終わりである。北海の町はもうじき見えてくる頃らしい。

「そんで子龍さんは今回のことを終えたらどうする気？」

「ふむ、取り敢えず北について見ようかと思っている」

北と言ったらやっぱ公孫贛くらいか、要注意人物は。

「そか。まあ子龍さんは敵に回したくないな」

強いから。

「私は雋义殿と刃を交えて見るのも悪くないと思うのだが」

なんか子龍さんは乗り気である。勘弁だぜ。

「それで、雋父殿はどうするつもりなのだ？」

子龍さんが酒を呷りながら訊いてくる。

「どうも何も、当初の予定道理海を見に行こうかと。北海も丁度いい方向だし」

そう、どちらにしても方向的には北海は通る予定だった。

「そうか、では北海でお別れだな」

「そうだな」

馬車……もうちょっとゆっくり動いてもいいんじゃないかな……？

その後、無事北海城に入り、報酬を手渡されることになった。金銭的には余裕があったから貰わないでも問題はないのだが、二十年近い前世での庶民感覚はまだ根付いていたようで、貰えるものは貰うことにした。

あたしと子龍さんを含めた、傭兵連中を一箇所に集め、張世平さんが一人一人に直接銭を手渡ししていく。そして皆が報酬を受け取り、各々解散しようとした時、張世平さんが皆を呼び止めた。

「今回の旅路、逃げ出すものが多くでたにも拘らずあなた方はここまで私たちを良く守ってくれました。御礼というわけではないですが、小物類の馬車から皆様に一つづつご自由に持って行って下さい」

歓声が沸き、言われた馬車に傭兵たちが群がる。残ったのは商人二人と子龍さん、そして傭兵たちの勢いにあっけに取られたあたしの四人だった。

「あゝ、いいんですか？こんなこと。売りもんでしょう？」

さすがに商いの損害になりそうで声をかけてみた。

「良くはないけど、姉ちゃんが決めちゃったしね。まあ、あんたらがいなけりゃ今頃死んでただろうし」

そう答えたのは張世平さんの妹分らしい商人仲間、蘇双さんだった。

「姉ちゃんはあるとあの白服の槍使いにお礼をしようとしてね。ただいくらあなたたち二人がことさらすごい働きをしたからって、他の連中には何もなしって訳にも行かなくてさ」

まあ、そこら辺金貰ってやっただけというのがあたしの認識だからちよつと申し訳ない気がする。そういつて辞退しようと思ったが意外にも子龍さんから受け取るように催促された。

「人の好意は素直に受け取るものだ。余り遠慮しすぎるのはかえって失礼だろう」

「そういふもんかね」

「そういふものだ」

ぼやくあたしに子龍さんが返す。その後張世平さんにも似たような事を言われ、他の傭兵たちも物色し終わったため、子龍さんと共に馬車に上がって小物を物色し始めた。

何となく目眼についた小箱を開けてみる。閉じる。中身が人の顔のパーツを無規則に配置した赤い卵のようなものが入っていたのはあたしの気のせいだ。多分自分の自覚している以上に疲れが溜まっていたんだ。

「おお！これは！」

子龍さんがなんか発見したようだ。こつちからじゃ見えないがまあいい。流石にあの赤いのはいらないので他のを探そう。

そこで次に手にした小箱を開けてみる。

「これは！」

思わず声に出してしまった。小箱に入っていたもの。それは21世紀にも同様の物を見たことがある。装飾品と言うよりは娯楽品の一つとして認識されてそうなのは、一時大きなブームメントを創ったある意味伝説の一品だ。

「な・・・なぜこれが・・・」

自分の声が震えていることに気付く。

なんだ！？止まらぬこの震えは！

感動か！

恐れか！

あるいは憎悪か！

・・・あゝ、ちょっと混乱したようだ。なんかちょっと未来の別の人の電波を受信してしまった気がするが、精神衛生上の理由でスルーする。

それはともかく何故これがこの時代にあるかだ。少なくともこの国にあるのはおかしいだろ・・・

そう考えながらも手が勝手にソレへと伸ばされる。

高貴な雰囲気醸し出す紫。輪郭を構成する艶やかな曲線・・・

ふと、視線を上げると子龍さんの手にあるものはあたしが今手にしているものと同じ形、同じ意匠が施されていた。唯一の違いは色か。そして子龍さんの表情・・・あたしと同じ心情なのだろう。

ふとあたしと子龍さんの視線が交わる。そして同時に頷きあう。

「「でゅわー！」「

その後起こった事は思い出したくはない。自分でも何故あんな事をしてしまったのか分らない。ただ確かなのはこの日、あたしと

子龍さんは真名を呼び合う間柄になり、数日の内に北海の悪党は根絶されたことである。

ちなみにあたしはこれらの事には一切関わっていない！いない
ったらいないんだ！

第八回 各走其路

「いや、それにしても今日も爽快だったな。華蝶仮面、実に良い響だ」

「言つな」

「何を言つ。黒羽も楽しそうにしていたではないか」

「言わんで下さい！お願いします！」

なんだかんだで星、即ち趙雲と北海に留まって数日。旅籠で昼食をとりながら会話を楽しんでいた。主に星があたしで楽しんでいる感じが。

北海に着いた日に別れる予定だったが、全てはキャラバンで見つけたパピヨンマスクのせいだ。あれは呪いのアイテムに違いない。あたしの体に乗っ取ってしまったに違いないんだ。

「まあ黒羽を弄るのはまた後にして、だ。そつちは見つかったか？」

「こつちは全然。そう訊くところを見ると星の方でも駄目だったか」

午前中手分けして探していたのは武器を造れる鍛冶屋である。匪賊が増えてきたこの時期、武器の造れる鍛冶師は殆どが官に囲われてしまい、民間人に武器を造ってくれる職人が大分減ってしまっている。

ここ数日のことであたしは飛び道具を大分消費してしまい、補充がしたい。対して星は槍が結構傷付いてきたから鍛え直したいのだそうだ。

まあ、あたしの場合麗羽様の部下と言う身分を使えば鍛冶師を貸してもらえらるだろうが、政治的な意味でよろしくない。現北海太守は孔子の二十代目、孔融。この人、麗羽様と仲が悪い。と言うか袁家と仲が悪い。理由は傍から見れば、少なくとも21世紀的一般市民からすれば下らないことこの上ないものだ。

後漢王朝に於いて、漢王朝再建に大功ある名家である袁家。春秋戦国時代に興り、儒家の宗家たる孔子の末裔。まあぶっちゃけ俺の方が偉いんじゃない！と言うものである。どうでもええねん。

更に言えば麗羽様個人としても仲が悪く、以前貰った手紙にも、

「いつもネチネチネチネチ小言をうるさく言ってくれますのよ！？孔子がどう言ったとか儒家の思想はどうか・・・政では全然役に立たないくせに！私よりも仕事が遅いくせに！きくくくくくく！」

！！

B Y麗羽様

と言った具合である。まあ多分に麗羽様の主観が入った人物像なんだろうが、関わらんほうが無難だろう。

「そう言えば張世平さんたちがまだこっちに残ったままだったか？いざとなったらあの人たちに聞くか？」

「ふむ、それも手か。だが午後も聞き込みは続けるのだろうか？」

まあ、あの商人さんたちには世話になったから余り迷惑はかけたくないからな。もうちつと情報収集を続けることにする。

「時に黒羽、最近良く耳にする噂があるのだが知っているか？」

「噂？」

星が口にしたのは「天の御使い」なる存在だった。はて、この時期に大陸に流れて来たのは仏教であってユダヤ教ではないはずだが？ちなみにキリスト教は成立してたっけ？まあいいか。

「またえらく胡散臭いのが出て来たな」

正直他の感想が出てこない。む？これはあれか？もしかしてこれから張角が天の御使いを称して太平道を興すという流れなのか？

「だが、このような話が出てきたと言うことは無視できんぞ」

星の言葉に頷く。噂の出所はともかく、この救世主降臨的な噂が広がるということはそれだけ国の臣民が疲弊していると言うことに他ならない。そして絶対君主国家である漢に於いてその責任は支配者である皇帝と、それを支えるべき官僚にある。

今は休業中とは言え、あたしも官僚になるんだよな、一応。

結局その日はいい情報を得られず、次の日に張世平さんたちに聞いたところ、北海周辺の事情に詳しい商人仲間を紹介された。そこで星と一緒にその人の下に赴き、孔融の手が回っていない鍛冶師の情報を貰った。・・・ただではなかったがな、情報。え？金？もちろんあたしの全額負担でしたよ？

そこで教えてもらった鍛冶師に会いに北海管理下のある村に向かう。

話によると、その鍛冶師はつい最近まで幽州で修行していて、納得いく作品が作れたから実家の北海に戻って来たということらしい。まだ戻ってきたばかりのためか、まだ孔融の下に入っていない。

ちなみに孔融は職人に自ら会う事はしない。職人は孔子が定めた下賤な職の一つだかららしい。そういう部分で実際交流のある人たちに嫌われることが多いと言う。他の人が有能な人物を重用しようとして、それが「儒家基準の下賤な身分」出身だとその名声（虚名とも言つ）を嵩に妨害してきたりするそう。これも麗羽様からの情報だが。

で、件の村に到着し、村人に道を聞いて目的の鍛冶屋まで着いたわけだが・・・

「いないな」

「おらんな」

はい、誰もいません。教えられた工房は戸も閉められておらず、中に人つ子一人いないのが見て取れる。とは言え、小奇麗にしてあるから使われていないと言うことではないようだが。

仕方ないので近くの通行人を呼び止めて聞いてみると、なんかこの主は腕は良いらしいが、天気がいいときは仕事をサボることが多いらしい。いまいち理屈は分らないが、日を改めてきたほうが良いといわれてしまう。仕方なくその日は旅籠に戻ることにした。

その後、幸いにもすぐに天気の崩れた日が巡ってきた。その日、星と共に件の鍛冶屋にいくと中から炉に点された火の盛る音と煙が出ていた。人の気配もあつたので声をかけてみた。

「すみませ〜ん」

「は〜い？」

返ってきたのはハスキーな女の声だった。そして続いて出て来た人物に思わず声が出てしまった。

「でかつ!？」

出て来たのは男でもそうそうはいない様な大柄な肉体を持った女性だった。あたしよりゆうに頭一つ分以上高く、眼を合わせると見上げる形になってしまう。体も女性にしては筋肉がついており、女性のボディビルダー一歩手前といった感じである。見た目だけで判断するならあたしや星の十倍は強そうだ。さらには筋肉量からすれば、かなり胸もあるのであらゆる意味ででかいのだ。

ただその顔はやる気なさそうな、眠気すら感じさせるもので、この人に任せて大丈夫かな?と不安を感じてしまう。見た目に頼着しないのか、服はだらしなく着崩しているし、髪も適当に後ろにまとめた程度である。顔自体は悪くはなさそうだからちよつともったいない気がしなくもない。主に胸のサイズの意味で。

「で？注文は？」

唐突にそう切り出され、ちよつと返答できなかつた。

「うむ、私はこの槍を鍛え直してもらいたくてな。黒羽？」

そう言つて星は軽くあたしの背を叩く。そこで我に返つたあたしは自分の注文を告げる。

「それにしてもよく仕事の以来だと分りましたね」

唐突に注文なんか聞かれて驚いたよ。

「仕事の注文があるから来る場所だろ？ここ」

「……まあ、正論である。でも前置きつてもんがあつても良いと思うのよ。あたしも注文を伝えると彼女は頷いた。

「ふむ、注文をした後でなんだが貴女がここの主で良いのかな？」

「ああ、鍛冶師の湯だ。名は・・・色々あって訊かないでくれるとありがたい」

何かしら理由があるのか湯と名乗った女はそう言ってきた。まあ、この時勢、身分が低いながらも、その技術で名を知られるに至る職人は半ば強制的に官僚の管理下におかれることがある。それを嫌い、敢えてフルネームを名乗らない人物は偶にいる。

ただ、湯さんは槍を受け取っても工房に戻らず、顔を上げて空を見ている。

「何を見ている？」

あたしと同様に不思議に思っただらしい星が尋ねる。

「雨を待ってる」

湯さんが言うには、彼女にとっては雨が降っていたほうがやり易いのだそうだ。日本の刀鍛冶とかもどここの水じゃないと駄目みたいなものがあるけどそんなもんかな。でもだから晴れの日は休むのな。つつかそれで商売成り立つのかな？明らかに休みのほうが多いぞ、ここらの気候じゃ。

そう思っている内に空がゴロゴロ鳴り始める。

「うおっしやー！キタキタキター！あたしの時間が来たぜー！」

さっきまでのポーっとした雰囲気から一転してむっちゃハイテンションになった湯さん。その湯さんが唐突にこっちに視線を向けてくる。ちよっ、眼が怖い！

「ほらあんた！あんたの得物もだしな！素手で殴ってる訳じゃないだろ！」

そう言っであたしの体をまさぐりだす。訂正、あたしの服を、である。だがやられているあたし自身にとっては大差ない。

「ちよっ、あっ、やめっ……っつか見てないで助けるよ！星」

くそっ！にやるめ、こっち見てニタニタ笑ってやがる！そんなこんなしている内に湯さんがあたしの両袖から穿山甲を探し出した。

「んじゃ、これも鍛え直してやるからな！」

「ちょ、ま、何でそんなの使ってるって気が・・・付いた？」

ちよっと息が苦しいが何とか訊いて見る。

「相手の動きや体格から、そいつの扱う武器が分らなくて武器職人が務まるか！」

すっげえ迫力でそう答えられた。武器職人すげえ・・・

そのまま湯さんは工房に籠ってしまふ。中で行われているであろう作業にちよっと興味があつたが、火や作業の音に混じって危ない笑い声が混じっているので止めた。

その後、作業が終わるまであたしらは暇になった。丁度どうするか考えている時に雨が降り出したこともあり、あたしたちは村の中で小さな飯屋を見つけて酒を飲むことにした。

適当な席に座り、地酒とつまみを注文する。

「で、何故助けんかった、この性悪青髪娘」

「おや？私には随分楽しそうに見えたのだがな。助けが必要であつたか？」

さっきのことで恨みのあるあたしは星に絡んで見たが、どうせあたしが一方的に弄られそうなのでやめた。

「で、そろそろ潮時だと思うんだが、どうよ？」

星と北海に留まってもう十日近く、そろそろお互い自分の目的のために動き出すべきだろう。

「そうだな。これ以上ずるずる引きずるわけにはいかないか」

キャラバンと合流し、星と知り合ってから時間は僅か十日ほど。麗羽様たちと共に過ごした日々と似たような心地良さを感じていた。気の置けない友人、と言うのはこういう関係を言うのだろうか。

それは星も多分同様に感じてくれているだろう。一応とは言え、互いに目的がある身だ。潰せる時間が多くある訳ではない。

「正直あたしとしちゃ、このままウチんとこに就職しない？星の腕なら結構な待遇出ると思うよ。あたしも職場に、その、さ。親友が増えるのは嬉しいし」

正直なところ、やっぱり友人と殺し合うことにもなり得るこの時世である。可能なら同じ陣営に属することで、その可能性を潰し

てしまいたい。

「それも悪くはない。悪くはないな。だが、自分の命を捧げる相手だ。やはり自分の眼で見定めねばならないだろう」

真面目なこつて。でもまあ、そう言うもんかね。

「なあ、星。参考までに聞きたいんだがさ。お前の戦う理由ってなんだ？」

あたしの旅の本来の目的、戦う理由の獲得。では、あたしのよ
うな半ば成り行きで戦おうとしているのとは違う、自ら決めた者は
どういう目的を持っているのだろうか。

「黒羽の師より与えられた『己の為の理由』という課題か。そ
うだな、私の場合は己の存在を何かに、どこかに刻み付けたいのだ
ろうな」

「刻む……か」

「そうだ、刻み込む。この時に、この場所に、趙子竜と言う人
間が生きた証を遺したい。無為に生きるでなく、私と言う人間だか
ら出来る何かを為し、私と言う人間だからこそ掴める何かを掴みた

いのだ」

そう語る星の顔はいつもの澄ましたものでも、あたしを弄る時のようなチエシヤ猫顔でもない。今まで見たことがないほど穏やかなものだった。

「それがお前の『欲』か」

人が戦うための、大儀や恩義とは違う、自分のための理由。

「そうだな。志といって貰いたい、寧ろ欲のほうが近いのだろっな」

そう言つて星は酒を一杯呷る。

「幸い、私は武芸の才に恵まれた。それを磨きに磨き、百凡の兵など恐れるに値しない強さを手に入れた。私を突き動かしているものは、子供が玩具を見せびらかしたがつているのと大差ないのかも知れない」

随分卑下して言う。尤もそれらの言葉がどのような心情で吐き出されたのか分らないあたしはただ聞き続ける。

「だから私はせめてこれを、世にとって良い方向に使いたいと思う。私の力で、力ない者達を守るために使いたいのだ」

そう言い切った表情を、だがあたしは目をそらして直視しなかった。自分でも正体が掴めない感情。主体のない自分に対する羞恥か、自己の主張を持った星への嫉妬か。

「そっか・・・やっぱすごいな、お前。ちゃんとさ、指標になる想いを持っているんだから、さ」

あたしに足りないと言われたもの。人はどうしても自分がないものを持つ人間を羨ましく思うように出来ているのだろうか。

「そうか？ 私にはそうは思わないがな。それに、黒羽は・・・いや、私が言うべきではないか」

そういつて再び酒を呷る。星が言いかけたことは気になるが、答えをねだる様なことはしない。こいつが言わないことにしたら、あたしじゃ訊き出せないのは分っている。

それからしばらく、お互い何を話すでもなく、黙々と酒を呷った。

雨が止み、雲が散り始め、その隙間から南に向かう太陽が時折顔を覗かせるようになっていた。

「もう、武器の直し、終わったかね？」

とうに酒などなくなっていた壺にも垂れながら空色を見ていたあたしは問うわけでもなくそう言った。

「そうだな。もう終わっているかも知れないな」

星は追加で頼んだ酒を壺から杯に注ぎながら答えた。

「じゃあ、あたしは武器が出来たらそのまま戻るわ」

そういつてあたしは立ち上がる。酒で火照った頬に風が気持ち良い。

振り向くと星がヒラヒラ手を振っている。あたしは軽く手を振った。

「星、じゃあな」

「ああ、達者でな」

その後、鍛冶屋で勝手に持ってかれた穿山甲と注文していた暗器類を受け取り、そのまま旅籠に戻る。そしてその日の内に北海を出た。

趙雲視点

行ったか。恐らく得物を受け取ったらそのまま自分の旅に戻るのだろう。思えば多くの時間を浪費してしまったものだ。私も彼女も。いや、浪費ではないな。浪費ではない。だが、私も彼女も本来の目的に対して長い時間足踏みを続けてしまっていた。

酒を一杯、呷る。ふむ、風と凜の二人と別れた時と同じだな。一人になっただけで酒の味まで違って感じてしまう。

あの二人との別れの時も感じたが、これでもう暫くは再会できないだろう。そして、再会しない方が良いだろう。また、この心地良いぬるま湯に溺れそうになりかねない。

また呷る。やはり美味くない。

次に会う時はお互いどうなっているのだろうか？風、凜、黒羽、我が友たちよ。何れまた会える事を信じ、私も己が道を進もう。

第九回 虎の真似事をやってみるか

両手を広げて、思いっきり息を吸う。肺まで拡がるかのような潮の香り。そう、あたしの目の前に広がる光景。それは、

「ウーイーミーイー、ダーイーイー！」

漸く着いたぜ目的の海だー！つつかさぶ！

北海より東へと、一月近く使って漸く辿り着いた海。で、着いた頃には秋になっていた訳で。別に泳ぐ為に来た訳ではないからその辺はいいとして、海辺だから実際の気温より大分寒く感じる。地理的には日本で言う東北辺りの温度くらいのことになる。

取り敢えず一応の目的地に着いたことと、周囲に人がいなかったからお約束を実行して見たわけだが、意外と気持ちいいなこれ。

とまあ、ここまで来たのはいいがこれからどうしよう？海を見たことがなかったのはあくまでこの時代に生まれ変わってからであり、海を目指したのも究極的には他に目的がないからという消極的極まらない理由だ。よって、海を見たからといってこれと言つほどの感動もなければ、感慨もなかった。

まあ、悩んでてもしょうがない。取り敢えず今日の寢床を探そ

う。あたしは荷物を載せた旅仲間の驢馬を引いて、海岸線に向かつて右側に歩を進める。この海岸は中国大陸の東側にあるので、ここでの右側は即ち南に進路をとることになる。そうすればやがて黄河に行き着くことになる。そこを次の目的地にしよう。・・・あれ？渤海から直ぐに黄河目指してから船で下ったほうが圧倒的に早かった・・・？いやいや、それじゃ星に会えなかったんだ。結果的にはこれで正解なんだ。そういうことにしよう。

空が赤らみ始めた頃、海岸付近に漁村らしき影を見つけた。そろそろ、今日も野宿かと思っていたのでまともな寝床にありつけるかも知れないということが嬉しくて、歩調が早まっているのが自覚できる。この辺りが辺境すぎ、且つ港町が近くにならないのか、客棧きやくかんが全然ないんだよな。

ちなみに客棧とは古代中国に於ける宿泊施設の一種で、通常街中にある旅籠などとは違い、城と城の間を結ぶ大きな交通経路周辺に造られるホテルである。まあ、路以外には荒野しかない場所とかにポツンとあったりする場合もあり、自分たちの安全を守る意味で傭兵とかが常駐してる場所もある。まあ、有名なのは水滸伝で人肉饅頭を出しているのが、覚えてる範囲で二つほどあった筈だ。

それはさて置き村に近づくにつれておかしなことに気が付く。妙に村の明かりが多いことに気が付く。かといって火事でもなさそうだ。火事にしては村全体に広がっているし、それほど火事だったらもつと火が大きいだろうし。一応警戒すべきかね？

「あゝまさか海賊の村だったとはな。やゝ、危なかったわ」

何時ぞやのように驢馬を隠し、スニークン気分分で村に近づいたら、どうやら周りの灯りは篝火で、周辺を武装した男たちが見張っていた。この時点で盗賊か、場所的には寧ろ海賊のアジトなのだろう。警戒していて正解だった。

「な、聞いてる？少年」

そう言っただけはあたしはあたしの足元で尻餅を突いている十四、五歳ほどの少年を足で小突く。中々豪華な鎧と剣を身に着けていることからそれなりの身分の人間らしいが。盗品の可能性を考えなければな。

「小突くな！お前俺が誰だか知ってるのか！？」

「知らんよ」

巡回にでも出てたのか、それとも立ちションに来たのに見つかったのか、二人の賊徒に捕まりそうになっていたこの少年を助けた方がいいが、態度悪いなこいつ。

けどこんな身なりのやつが何で一人で？ちなみに賊徒はあたしのヒヨウを首に受けてそこらに転がっている。

「とにかく女、丁度いい。あの海賊どもに連れて行かれた人たちを助きたい。俺に手を貸せ」

つか何様だこのガキ、命の恩人だぞ？こつちゃ一応。

「で、君は誰よ、結局」

「あ、うん。俺の名は公孫淵、字は子懿だ」

・・・また大物ですよ？なんか。あれ？でも、

「それって遼東太守の公孫康の御曹子ってことだろ？何でこんなところに？」

そう、公孫淵と言えば幽州の東隅つこから更に東に領土を拡大し、燕と言う漢王朝から事実上独立した一大勢力を築き上げた傑物だ。ただ、一時的には魏王朝から見ても無視できない勢力を築き上げ訳だが、惜しむらくは他三ヶ国の争いに殆ど参加しなかったことだ。おかげで三国志を四国志に出来ただけの勢力を誇ったにも拘ら

ず、その知名度の低さは計り知れない。

ちなみにこの燕国の領土は最盛期では朝鮮半島を平らげ、倭の国にすら及んでいたと言う。

まあ、それはさて置き、件の子懿は、

「この海賊たちが海を渡ってうちの領民から略奪していったんだよ。それどころか結構な人数の領民が拉致されてんだよ。だったら太守の息子の俺が何とかすんのは当たり前だろ」

「・・・いやそこは違うだろ」

ちよつと感心して、肝心な事を忘れるとこだった。ここはまだ地理的に北海に属する筈、孔融の管轄の筈だ。何故幽州遼東郡太守の息子がここにいることか理由になっていない。こつ、距離的にも政治的にも。

「しょうがねえだろ。真つ当な方法じゃ手が出せねえんだよ」

子懿が言うには、この海賊は数ヶ月前から幽州の沿岸部の集落を襲うようになった。そして公孫康たちも長い時間をかけてこの場所を特定し、孔融に連絡をした。だが、未だ官軍はこの海賊にちよつかいを出していない。

纏めるとこんな感じだ。

遼東郡に被害 敵拠点発見 管轄外⇨手出し不能

よって北海郡の孔融に通達を出すのが精一杯らしい。で、北海郡の対応は、

北海郡に海賊拠点 海賊拠点通達到着 管轄内に直接の被害なし
優先順位低

と言う事らしい。まあ、自分らの領内だけならね、それでいいのかも知れんが。一応あそこも他の場所と同じで盗賊が増えてきている。自分らに直接的な被害がなけりゃ、他のからどうにかするのは間違いではない。よそ様の事を考えなけりゃね。

しょうがないので領内で海賊の標的になり易そうな村々に兵を駐屯させることになった。だが、海辺にある村の数が結構多いこと、近年賊徒増加などに見られる国内の治安低下につけ込んできたと思われる烏丸の動きが重なり、村一つに派遣できた兵力はかなり少なかったそうだ。それこそ海賊たちに負けてしまうほどに。

それにしても頭いいなこの海賊。

「で、領主の息子が一人で来たと。バカか君は」

やろつとしていることは、まあ立派と言えなくもないがその結果を考えていない。

この時期、一部の例外を除き、ほぼ全ての領主は軍事力を高めて治安維持に努めている。それが民を想う善良な人物だろうが、自己の利権を守らんとす俗物であろうが、である。

もしここでこいつが死ねばどうなるか。こいつの父親の人となり次第では遼東の兵が北海に向けられることになりかねない。仮に生き残っても、この事が知られば越権行為がどうかと、今度は政治問題に発展しかねない。

嫌な言い方であるのを覚悟で言うなら、少なくとも今この時点では（あたしが伝えられた情報で判断する限りでは）静観するのが一番正解に近いのだろう。心情的なものを無視すれば、そして人の上に立つからにはそうすべき、なのだろう。

尤も、それを口に出して説教を垂れる立場でもないという自覚はあるから、思うだけにしておくが。

「とにかく！俺一人じゃ駄目なんだ。手を貸してくれりゃ、遼東に戻った後にちゃんと褒美を出すからさ！」

「断る」

表情や口振りから結構必死なのは伝わってきている。本気で海賊に捕らわれた人たちを助けたいのだろう。その心意気はまあいいとして、あたしにこいつ助ける理由も義理もない。欲しいとも思わない褒美に命はかけたくないし。

つかこいつ直情過ぎ。

「おい！そりやねえだろ！お前旅の俠者か何かだろ？弱者を助けるのが俠者だろ！」

や、あたし俠者じゃないから。

とにかく、前回のキャラバンの時は旅のついでという理由があった。こっちはなあ……

「なんだ？好きな奴でも捕まってるのか？」

いい加減うるさく感じてきて、苛立ち混じりにそんな言葉を吐いてしまった。だが、返ってきた反応は意外なものだった。

「う、うるせえ！それが悪いかよ！」

あれま、本当に想い人でもとっ捕まってたんか。まあ、これで理由は納得できた。さりとて手を貸すつもりはないが。

「とにかく頼む。あいつ、もうすぐ許婚と結婚するんだよ」

おや？

「その許婚ってお前だよな？」

なんか言い方が間違ってた？

「……んや、あいつ他に許婚がいるんだ……」

……色々複雑そうだな。む。

「で、かつこよくそいつを助けて自分に気持ちを向けさせたい」と

「そんなんじゃないよ。ただ、惚れた相手くらい自分で……」

ふむ、恋愛感情ってのはそういうものかね？あたしや、前世じゃ恋愛なんかしたことがないからな。こころの感情と言っものはどうにも分らん。……まあ、参考までに聞いてみるか。

「お前がここまでやるうとする理由は何だ？好きな人のためには命を掛けられるものなのか？」

星の時もそうだったが、自分の探しているもののヒントになるかも知れないし。

「多分ちげえよ。どうせ助けても一緒になれやしねえんだ。それでも、そいつの為に何か出来たって・・・自己満足なんだと思う」

今までの勢いと変わり、辛うじて聞こえる程度のか細い声になる。

「自己満足の為に賭けるのか？大事な命を。そんな価値があるのか？」

「多分・・・ある。自分に、嘘を吐かなくて済むから。自分に誇れるから。だから、ある！」

そっか。なんだ。こいつの言葉で気付いた。あるじゃん。あたしにも、自分に対する理由が。あたしの理由はさ。多分あたしが好きな友達に・・・

「そっか、ならしょうがない。お姉さんが手伝ってやりますか」

癩だがこいつの言葉でこんな遠くまで来た理由が見つかったんだ。これはまあ、恩返し、とは違うがいいだろう。

唐突に協力すると言ったあたしに、子懿はポカンとする。

「手伝ってやるって言ってんの。まあ、条件はあるけど」

あたしの条件はまず、捕まった連中の救出作戦はあたしの指示に従ってもらうこと。

一応潜入工作も出来くないが、元々それを専門で学んだわけではない。基本が同じとは言え暗殺術の応用でしかないから多少心もとない。更に言えば、海賊の拠点の規模と掛かり火の数とかをざっと見た感じ、百は下らないと思う。そんな数の中に潜入した経験はないからな。間違っても正面突破なんて出来やしなないし。

そんで二つ目だが・・・

「お前の想い人・・・助けられるとは限らなねえぞ」

これだけははっきりさせとかなければいけない。人を生かしたまま捕まえたと言うことは大体が売り物として、である。仮にあの村にとつ捕まっていたとしてもまだいるか分らない。そもそも生きているのか、生きていたとしてここにいるのか、そしてここにいるとして・・・

「・・・分ってるよ。それでも・・・」

俯きながらも子懿はそう答えた。そんじゃ先ずは・・・

「よし、その鎧とか、全部脱げ」

「へ？」

どうやらあたしが言った事を理解できていないと言った表情を返してきた。

子懿に作戦を告げ、あたしは一旦驢馬のところに戻って装備を整える。

この作戦の一番の問題はこの時代に通信機器がないことだ。おかげで作戦のタイミングは完全に事前に決めた通りに行わなければならない。時間は四半刻（30分）ほど、それも時計のような正確に時間を計る手段もない。為にあたしは子懿が動き出す前に捕まっている連中の居場所を探し出し、作戦の準備をしなければならぬ。

落ち着いていけよ、あたし。あんまり気負うな。なぐに、上手く行くに決まってるんだ。あたしがやるんだぜ？今までだって上手くやって来たんだ。ちよっとくらい敵との数の差なんて問題になりやしないって。さぐて、ちよっとした綱渡りを楽しみましょうか！

軽くストレッチをして、あたしは海賊たちの村に向かった。

第十回 スニークンゲミッション Lv.イージー

人の目は夜の闇の中でもものを見るのに適した構造を持っていない。故に光の満ちた昼に行動し、光のない夜に休息をとる。

人が夜に行動するためには目が周りの光景を認識するだけの光が必要になる。文明が進み、電気と言うエネルギーと、電球などの道具が生まれた。だが、この時代では火による灯りしかない。そしてその数も少ない。結果として人の営みの周辺も多くの闇が残っている。

そんなこの時代、この環境は潜入の難易度を大きく下げてくれる。流石に21世紀並みに灯りが多い場所に潜入なんざ出来やすい。こんな状態でも蛇さん並みの装備とサポートが欲しい気分だ。光学迷彩なんて贅沢は言わん。でもオクトカムくらい欲しい。百人は敵がいるかも知れない場所で仕事するんだからな。

闇に紛れて村に近づいて見ると、幸いなことに見張りは少なく、見つからずに村に侵入すること自体は難しいことではなかった。今までこいつらに手を出した連中がいなかったのだろう。ある程度以上の集団を見つけられれば良いといった感じの配置で、こうやって少数の人間が侵入して内部工作をする可能性が全く考えられていない。

「さして、まずは情報だよな」

まずはこの海賊連中から一人とつ捕まえて、捕まった遼東の兵たちがどこにいるのか聞き出さなければ話が始まらない。次いで武器と油を保管している場所だ。子懿の話では三十人近く捕まったらしいから、一戦も交えずに逃げるのは無理だろうしな。

進入して見ると、やはり元々普通の村をそのまま使っているようである。元々は割りと裕福な村だったのか、そこそこ大きな木造家屋が並んでいる。まあ、海辺の村なら魚介類だけでなく塩も取れるから、内陸の村よりは裕福な場所が多い。

こそこそと物陰を移動し、村の中心に向かっていく。建物が多い一角に身を潜める。恐らく商店街みたいな場所だったのだろうことが、見た感じで分る。ここなら人を引っぱりこめる死角が多い。時間は惜しいが、建物の陰に身を隠し、人が通りかかるのを待つ。一応ここに来るまでに巡回らしい連中とかが歩いていたらここも人が来るだろう。

時間が惜しい時は焦れて仕方ない。物陰に隠れて暫く、漸く人の気配が近づいてきた。チラッと顔を出してそれを確認すると幸いに一人だけだった時間もなしこいつから情報を貰うか。

廃屋らしい小屋の陰に移動し、相手が通りかかるのを待つ。そしてその相手が通り過ぎる。近くに他の人間の気配がない事を確認後ろから忍び寄って当身を入れる。そして廃屋に連れ込む。その時に地面に引き摺った跡で怪しまれる可能性があるので担いでいく。

廃屋の中で、事前に用意していた火種（火縄に点火した物を竹筒の入れ物に入れた物。火は数刻もつと言われる）で小さな灯りを

起こす。この時初めて相手の顔が見える。小柄な男で、衣服とかに黄巾賊らしい部分は見当たらない。やっぱりただの海賊のようだ。

そして両方の袖から流星鎚を取り出して両手両足を縛り、動きを封じる。なんか最近流星鎚大活躍な気がする。主に拘束的な意味で。ついでに男の服の袖を破ってそいつの口に詰め込む。これでこいつがパニックを起こしてもある程度声を抑えられる。

ここまで準備を整え、質問タイムに入る。転がっている男を軽く蹴る。一回では起きなかつたので何回か蹴っているとやがて目を瞬かせ始める。そしてあたしは両靴に仕込んである匕首の片方を抜き出して男の首に当てる。同時に男の胸板に肩膝を乗せ、軽く体重をかける。

「むじ！？」

眼を覚ますや、自分が訳の分らない状態になっているせいだろう、男はパニックを起こして暴れたそうとする。だが事前に四肢を拘束している為、制圧は楽だ。空いている手で相手の髪を掴み、地面に押し付ける。同時に胸に押し当てた膝に掛けている体重を増やす。適度に痛みを与え、動きを更に拘束する事でその注意を引き付ける。

「静かにしろ。死にたくなけりゃ、こっちの質問に答えろ」

僅かな間、あたしの言動に呆けた反応を示した男は、しかし自

分の首に刃物が当てられていることに気が回ると再びパニックに陥りそうになる。それを再び頭を地面に叩き付けることで黙らせる。その後は脅しや話術、拷問術の応用で軽く痛めつけたりで捕まった兵士たちの居場所と武器の保管場所、次いで油も保存されているであろう食料庫の場所を聞き出す。

その後、男の口をもう一度塞いで首の骨をへし折る。刃物を使わないのは、万が一でも血の臭いで気付かれないようする為である。人の血は意外と臭いが強いからな。男の死骸はそのまま小屋の隅に転がしておく。

「そんじゃ、本格的に綱渡りの始まりかね」

小屋の屋根の上に立ち、周囲を見回す。同時に、緊張で高鳴る胸の逸りを誤魔化すように軽口が洩れた。

四方から人の気配は感じられない。高所に立つと、海からの風が全ての匂いも、音もかき消してしまうから。故に人の配置と言う情報は手に入らない。だが欲しいのはそれではない。

篝火の位置。それが密集している位置にこの村の村長の使っていた屋敷に今の海賊の頭領が住んでいる。当然そこに近づくほど警備は厳重になる。そして厳重にするために自然と篝火を増やしていく必要がある。この油断に塗れた海賊もその例に洩れず篝火が集中している区画があった。まあ、身内の裏切りを警戒したもので、あたしのような侵入者を想定してのものじゃないだろうけど。

それはさて置き、殺した男から得た情報と、村長の屋敷の位置

関係で今回の作戦で把握する必要のあるポイントを、脳内で照らし合わせていく。大まかな位置を推測し終わってからまずは武器庫に向かう。

近くに人がいない事を確認してから小屋の屋根から下りる。そして海の近くの方に向かう。海賊稼業をしている為であろう、武器庫は船乗り場の近くに造られていた。実際それらしい建物を見つけた。見張りは二人、近くに他の人間は見当たらなかった。

見張りの二人は建物の扉の前で一緒に酒を飲んでた。それだけこの村は安全だったと言うことか。こんな家業をしているにも拘らず、すっかり平和ボケしていることに、あたしは呆れると同時に心の中でガツポーズをした。あそこまでボケてるところににとっては完全なプラスだ。時間は多くない。拙速で行くことにする。

一度両腕を、広い袖の中に戻す。中に仕込んであった『穿山甲』を装着。次いで軽く袖を振るう。手元に滑り落ちてきたのは絶手ヒョウ。通常のヒョウを二回り以上大きくしたそれは、射程と取り扱いやすさと引き換えにより大きな殺傷能力を持っている。あたしがこれを使うタイミングは二つ。相手を絶対に殺したい時、そして絶対に二発目が無い時である。そして今は後者、仕留め損なって増援を呼ばれる訳にはいかない。

両手に一つづつ絶手ヒョウを握り、ヒョウを放とうとする。その時、突然がやがやとした声が近づいてきた。声はあたしが隠れている建物の横から来ている。避けるように移動しようとする武器庫の正面に身を晒してしまう。先にこっちに向かつてくる連中を始末するか？無理だ。何人いるかも分らないんだからな。上手く行くか・・・

やって来たのは男が三人。彼らはあたしの潜んでいた通りを通り越し、横に曲がっていく。武器庫の正面に出て、見張りの二人と何か話を始める。

そしてさっきまであいつらが通り過ぎた場所にいたあたしはと言えば、

「危なかつたわ、マジで」

隠れていた建物に宙ぶらりんになって、連中をやり過ごしていた。連中が来る直前、あたしは咄嗟に飛爪と言う、縄を結んだ鉤爪を建物の屋根に投げて引つ掛けてそれを登った。完全に屋根の上に逃げた方が安全だったんだろうが、そんな時間もなく、結局連中が来てしまった為、これ以上音を出さない為に上半身だけ屋根の上と言う中途半端な姿勢で空中に体を固定する羽目になった。腰にクるな、この姿勢。

この時代にまともな照明があったらあたしはこの間抜けな姿を晒していたことになるのか。

そして数分ほど見張りのやつらと何かを楽しそうに話した後、連中は来た時と同じようにがやがやとどこかへ向かって行った。あたしは音を出さないように着地すると、気を取り直してもう一度絶手ヒョウを準備する。

目標は見張り二人の喉。声を上げられないようにそこを貫く。両肩から指先までの全ての関節を動員。可能な限りのスナップを利かせて投擲したそれは寸分も違わずその喉に命中、武器庫の壁に二

人を縫い付けた。

すぐさまあたしは武器庫に近づくと、扉を開けて中に入る。扉には錠がしてあったが、鍵は見張りが持っていた。取り敢えず鞘に入った剣を十本ほど流星鎚で一纏めにして背負う。欲を言えば捕まってる連中の人数分持つて行きたいが、んな事をすりゃあたしがまともに動けなくなる。十本でも充分重いが、この程度なら気で軽くブーストを掛ければ問題ない。

次はこの武器を背負って捕まってる遼東兵のいる場所に向かう。最初に始末した引き摺り出した情報に拠ればここから遠くない場所にある、食料を保存する倉庫のだった場所に詰め込まれているそうだ。元々奴隷として売るつもりだったらしく、一応生かされていると聞いた。

奴隷ね。まあ、兵士をやった連中だ。能力的にはいいものだろうさ。体に対して最小限のダメージで心だけをへし折る方法は、まああたし自体が習っているからな。

兎に角次の目的地に向かう。食料庫にいた見張りも、武器庫の連中と同様に処理する。扉はやはりと言うべきか、外から錠が掛けられていた。例に洩れずこの鍵も見張りが持っていたのでそれを使って錠を開ける。そして扉を開けようとした時、

「とうりゃあああ！」

あたしが扉に触れるより先に扉が開き、中から一人の女が飛び出して来て跳び蹴りをかまして来た。

罨！？気付かれていたのか！？跳んで来た蹴りを避け、扉から出てきた女と距離を置く。

「ちっ、賊の癖にいい勘してるじゃないか」

舌打ちしながらそう言ってきた女は良く見ると両手を後ろに回している。そして彼女がボロボロの衣服ながら兵士の鎧の下に纏う衣服であること、扉の後ろに何人もの、同様の格好をした男たちが立っていることに気が付いた。

「ちよ、ちよつと待った！なんかあたしたちは誤解してるっばい！先に聴かせてもらうが、あんたら公孫子懿殿とこの兵士か？」

あたしの言葉に、相手連中もキョトンとしている。

「えと、あんた海賊で私たちに奴隷の烙印を押しに来たんじゃないのか？」

あゝ、取り敢えずあたしは子懿に頼まれた事を伝え、同時に彼女も自分らがとっ捕まった遼東の兵たちである事を伝えてきた。先ほどの攻撃は、自分たちを奴隷として売るような事を話していたのを前々から聞いていたので、烙印を押される前に破れかぶれの反撃に出た、と言うことだそうだ。

まあ、焼き鑊で烙印を押されたらその時点で社会的な身分はどうしようもなくなるからな。その焼き鑊も基本的に国の所有物なんだが、偽造したのか、なんかの伝で手に入れたのか。

「で、あんたらの中で一番偉いのは誰？」

こいつらの拘束を解きながら尋ねる。返答したのは先ほど跳び蹴りかまして来た女だった。

「この隊は元々私が預かっていた。君に我らの救助を頼んだ公孫淵の叔母の公孫恭だ」

叔母と言う単語に驚き、思わず手を止めてしまつと公孫恭が苦笑いを浮かべる。

「兄と歳が離れていてな、淵とは三つしか違わん」

なるほど、見た目あたしと同じくらいにしか見えんかったからな。でもあれ？

「恭殿、他はみな男ですか？」

あたしが拘束を解き終わったやつらが、そのまま他のやつらの拘束を解いていくので作業は直ぐ終わったが、公孫恭以外に女を見ていないことに気付く。

「？ああ、私の部下は皆男だ」

あゝ・・・子懿には申し訳ないが・・・想い人のことは駄目そ
うだ。

「捕まっていたのは貴方たちだけ？」

「ああ、私たち以前にもいたかも知れないが、他は知らない」

還つてからのこと考えると嫌になるな。ここの連中も何人逃
がせられるかも分らんのに。鬱だわ。

あれ？子懿の想い人が叔母さんって可能性は？あたし的にはあ
りだと思つが（エロゲー的な意味で）聴き辛いな。

兎に角公孫恭たちに剣を渡しながら作戦を伝える。彼女たちに
この辺りにもらい、あたしは分かれて食料庫に向かう。

目算道理の場所にそれらしい大きな蔵を見つける。ここに見張
りがいないのはやはり攻撃されたことがないという安心からか。

そろそろ時間がやばそうだから一目は気に出来ないか。それに、タイミングさえ会えば派手にやった方がいいだろう。気で身体能力を強化し錠のかかった扉を蹴り破る。食料の入った麻袋なんぞが堆く積み上げられたその中に、瓶や壺のおかれている一角があった。取り敢えずそれらの封を片っ端から開けていく。それで匂いで中身を判断、でかい瓶のを中心に油や酒のを叩き割り、手ごろなサイズの壺のは食料の麻袋にかけていく。そして小さめの壺を二つ抱えると地面に滴った油とアルコールの混じった液体に火を点ける。火は瞬く間に蔵全体に広がり、あたしは急いで蔵を出る。

「おい！火事だぞ！どうなってんだ！？」

多少遠くから悲鳴や怒号が聞こえてくる。人にとって命綱である食料を焼かれ、連中の注意はそっちに向くだろう。あたしは武器庫に向かい、あたしが火を点けたら武器庫に移動するよう伝えた公孫恭たちと合流しに向かう。

「やっ、どうやらみんなご無事なようで」

あたしが武器庫に着いたときには既に、公孫恭たちが武器庫の中身で、慌しくも武装を整えているところだった。と言っても何時もこの海賊連中が来るか分からないからちゃんと戦に充分なほど整えるような悠長なことはしていないが。

周辺に数人死体が転がっているから見つけられたと考えていい

だろう。そのうちここに敵が集中してきそつだ。

「ああ、貴女の陽動で私たちは動きやすかったよ」

あたしの言葉に、公孫恭は軽く笑みを浮かべて返してきた。へく、笑顔の気持ちいい、良い女じゃん。今はあたしも女なのが惜しくなるね。

「もうじき子懿殿に陽動を頼んでんで、そんな時に一気に逃げますよ?」

「何だかね?。助けに来て貰っというアレだけどき、うちの甥っ子の無謀さはどうにもな」

公孫恭は作戦の確認に頷きながらも呆れを含んだ溜め息を吐いた。内心で同意しつつもそれを口に出すのはやめておいた。や、こんなことに参加、と言うか計画及び実行までやってるあたしが言えた事じゃあないんだが。

暫くして、食料庫の方に集中していた海賊連中が混乱から立ち直ってきたのか、幾つかの集団に分かれて周囲に散る連中が出てきた。

「おい!もう倉庫の中のものは無視しろ!敵が来る前に逃げる

ぞ！」

あたしの声に皆が頷き、武器庫から離れる。

「おい！官軍が攻めてきたってよ！」

「嘘だろ！？今まで何もして来なかったのに！？」

子懿の陽動が成功したらしい。こつちに向かって来ているらしい怒号にそんな会話を見つけた。武器庫の上に立って見れば村の西の方角にある林に篝火が見える。あの小僧上手くやってるようだ。

こつちも持ってきた壺を武器庫に叩き付ける。それに火を点し、ここを使えなくする。もつとも、持ってこれた油の量のせいで消火されてしまいかも知れないが、こつちが逃げるまで相手の気を逸らせればそれで良い。

「そんじゃ逃げますかっ！」

彼の名作脱走映画と比べればお粗末に過ぎる計画だったが、外から介入できたせいも、これと言った抵抗に遭わずに村を脱出できた。偶に見つかってもこつちは武装した一団で、敵の武器は倉庫で燃えている。唯一まともな武装をしていた村の見張りも人数的に敵じゃなかったし。

結局大した損害もなく（相手にも大した人的被害はないが）無事に子懿との合流ポイントに指定した、村の近くの林を越えた先の平原に辿り着く。

「意外にみんな無事に逃げきれちゃったか・・・嘘だろ」

正直想定外に良い結果にそんな事を呟いてしまう。半分くらい逃げられれば万々歳って考えてたから死者ゼロってのは驚きだ。敵が思った以上に優秀だったのが返ってこっちに有利に働いた感じだった。

「ああ、正直皆生きて逃げ出す事を諦めていたからな。君には感謝の言葉もない」

「それは甥っ子さんに言うべきでは？」

「将来人の上に立つべき者がこんな無謀を行うのを褒めると？」

公孫恭が子懿の行動に憤慨していたので何となくフォローしてみつつもりだったが、どうやら藪蛇だったらしい。公孫恭の言うてることのほうが正論だからこれ以上何も言えん。

「で、我が無謀な甥っ子は？」

「ん〜、へま仕出かさなけりやそろそろこつちに着く頃だと思
うんだがね」

まさかなんかあったのかね？もしへまこいて捕まったりしてて
も、これ以上面倒は見れないぞ。頼まれたのはあくまでここにいる
奴らの救助だからな。

「お〜い、みんな無事かー！」

そろそろ諦める頃合かな、と思っていた頃漸く子懿が林のほう
から走ってきた。お〜お〜、無事だったか。

走って来た子懿は初め着ていた豪華な鎧でなく、あたしが殺し
た海賊の襤褸を着ている。子懿にはあたしが兵士の救助の間林に篝
火を用意して貰い偽兵とし、その後村に紛れ込んで官軍が来たとき
聴するよう言っていた。結果は大成と言ったところか。

「無事だったかじゃねー！」

あたしが声を返すより早く、公孫恭の跳び蹴りが子懿の顎を捉
えた。

「何考えてんだあなた！自分の立場も分らんほど餓鬼じゃないだろ！」

蹴り飛ばされ、ぶっ倒れた子懿の襟を掴んで無理矢理立たせる公孫恭。怖いわ。他の兵士たちは止めるのかなと目を向けて見れば、あたしの視線に気が付いた兵士たちはサッと目を逸らした。

「惚れた相手を守ろうとして何が悪いんだよ……！立場なんざ欲しくてなつたわけじゃねえんだよ！」

子懿は声押し殺してそう返す。その声もあたしの位置からはぎりぎり聞こえると聞いたものだ。

「あなた……まだ諦めが……」

公孫恭の顔に苦みばしつたものが混ざる。そう言えばこいつの想い人らしい相手はいなかった。多分公孫恭でもないのだろう。さて、どう説明したものか……頭が痛くなる。

二人から目を離し、そんな事を考えていたら開放されたらしい子懿があたしの前を駆けて兵士たちのところに向かっていく。そしてその中の一人に泣きながら抱きついた。

「……へあ？」

見ると、抱きついてる子懿の顔は赤らみ、なんつうか……友情とかに起因するアレとかには見えないんだが……

「驚いたか？」

唐突に肩に手が置かれる。公孫恭だった。特に気配を隠してもない相手に気付かないとは。

「えと……子懿殿そいう趣味？」

「残念ながらな。初めての恋からずっとだ。私たちも頭を痛めている」

やるせない表情であたしの言葉に頷く公孫恭。なんか、子懿とのやり取りでこんな危険を冒したが、なんか一気に後悔してきた。差別する気はないが、だからって手を貸したいと思えるほど理解がある訳じゃない。そしてそれ以上にこう、あたしの苦悩を返せ！と言うか……

ただまあ、本人の顔が余りに幸せそうで、この状況で何か言うのも空気がな……

ちなみに好意を向けられている相手はそれに気付いていないと言う。こっちじゃ女同士はともかく男同士はかなりのマイノリティらしい。だからこそ、そっち方面を疑ったりしないのかね？

「そう言えば、貴女の名を聴いていなかったな。アレがあの子だから私が変わりに聴いて良いかな？それに、良かったらうちで働かないか？貴女の実力なら待遇は保障するよ」

子懿の懸想にも気付かず、いつの間にか胸上げが始まってる男連中を眺めていたら公孫恭がそう言ってきた。そう言えば名乗る時間もなかったな。子懿にもあたしの名は伝えてなかったっけ。

「あたしは張？、字は雋又だ。今は故あって流浪してるけど、本来は渤海太守、袁本初の配下だ」

この時、あたしは遼東とのパイプを手に入れた。これが今後、あたしが予想だにしない出来事の一因となるとは思ひもなかった。

第十一回　　そう言えばこいつら将来宿敵なんだよな、むしろ

北海にて遼東の公孫淵に協力して、彼の部下たちを助けると言う騒動から早半年近く経っていた。

あの後、あたしは黄河に向かい、初めて見るその広大さに胸打たれる。一応旅の目的を、期せずとも見つけてしまったあたしは、されど一年は帰って来るなど言われているのだ。ならば残りの時間をを楽しもうと、黄河を遡りながら取り敢えず涼州に向かってみることにした。

将来、あたしの知る歴史道理行けば、袁紹軍は何れ董卓、公孫贇と言った鬼のような戦闘力を持った騎馬軍を相手にすることになる。その時の為に今の内から騎馬の本場で、騎馬の事を学んで見ようと思った。ただ地元に近い并州や幽州は現在、下火になってきたとは言えまだ烏丸等が南下して官軍と小競り合いを続けているらしい。猪々子と斗詩もその戦いに従軍している筈だが、今はどうしているだろうか？

まあ、兎に角北方は戦時下に近い状態なのでわざわざ遠方の涼州に向かい、羌族のソレを見ることにした訳である。基本は商船に金を払って便乗させて貰って河を上っていった。船は多くの場合、人の足より早いのだが、あたしの場合流れに逆らっていることと、あたしが船酔い起こして長い船旅が出来ないせいで思ったより大分

時間をかけることになってしまった。

で、結果だけ言えばあたしは涼州には入らなかった。実際に羌族と交流のある西域に辿り着くことはなかったのだ。涼州直前の司隸にある、漢帝国の嘗ての都であった長安に着いた辺りでさすがに聞き捨てならない情報を耳にすることになったのである。黄巾賊の蜂起である。

幽州、并州、涼州、益州のような辺境を除き、僅かな時間で漢土のほぼ全域に及んだこの民衆蜂起は当然の如く渤海郡の属する冀州にも跳び火したと聞いた。流石にこれは旅なんかしている場合でないと判断し、帰郷の途についたわけである。

そんな訳で船の都合で、一回冀州の大都市、？に入る。帰りは河が下りだったからかなりの速さで移動できた。そこから陸路で渤海を目指す予定だったが、ある意味予想できた展開によりここに足止めを食らってしまった。？が黄巾に包囲されてしまったのである。

仕方なく旅籠に数日間滞在していたが、どうやら戦況は膠着しているようで、昼間は城壁、つまり四方から戦の怒号やらが飛び交っている。旅籠で聞き及んだ噂だと、？を囲っている賊軍は数が多いので五万、少ないので三万。対して？の守備隊は殆どの噂で一万余である。本来は五万ほど動員できるほどの大都市のだが、間の悪いことに主力は朝廷から黄巾党討伐に派遣された蘆植の軍に編入されてしまってここにいない。そして残った一万余では、指揮しているのが戦に疎い、冀州刺史の韓馥では耐え忍ぶのが精一杯ということらしい。まあ、あくまで噂の中で信じられそうなのを纏めただけなのでそこまで精度は期待出来ないが。

蘆植の軍勢は？より北の広宗の地で五万の兵を持って十万と言われる黄巾の軍勢と対峙しているらしく、援軍も無理だろう。とは言え、現状一応あたしはただの民間人だ。これと言って出来ることもないしな。いっそのこと麗羽様の部下と言う身分を使うべきか？幸い旅に出る際、必要になるかも知れないと元皓様から身分を証明するための手形を貰っている。一応取り次いでもらう事ぐらいはできると思うが。

「本当に困ったね、朱里ちゃん」

「そうだね、雛里ちゃん」

宿の食堂で食事しながら今後の行動を考えていたら、隣の席からえらく幼い声が聞こえてきた。振り向いて見ると、声相応に外見が幼い少女が二人、向かい合って座っていた。

片方は萌黄色の髪を短くそろえ、リボンの付いたベレー帽を被っている。もう一人は薄い紫の長髪をツインテールにして、御伽話の魔女が被るようなとんがり帽子を被った少女である。二人の着ている服が同じようなデザイン、いやただ着こなしの違いか？兎に角殆ど変わらないこともあり学校の制服のような趣がある。

宿で食事を取っているということは、地元の人間の可能性は低い。でも保護者もなしに旅が出来るような風にも見えない。それともどっかの良いとこのお嬢様とかで護衛がいる・・・様でもないな。ソレっばい気配もないし。

「せっかくもう直ぐで幽州なのに、このままじゃ街から出られないね」

「そうだね。でも早くしないと劉備さんたちの義勇軍が他のところに行っちゃうかも知れないし」

気になる名前が出たな、今。確かに黄巾が暴れているこの時期、早ければ耳に上るようになっていく名前だろう。あたしはずっと旅をしていたからちょっとした噂程度の情報しか聞かなかつたし、？に入ってから外の情報遮断されてしまっている。そして街の人たちは壁向こうの戦で他のことに気を向ける余裕もない。

・・・何か聴けるかもな。声掛けてみるか。そう思い、あたしは席を立った。

「お嬢ちゃんたち、ちょっといいかな」

取り敢えず二人を見た目相応な歳と判断して、できるだけ優しく声をかける。以前裏禍と裏亞にぎこちないと言われたが今回は上手くできていると思いたい。

「え、えと・・・」

急に声をかけたあたしを不審に思っているのだろう、二人はこちらに戸惑いの視線を向けてくる。

「失礼。旅の者で張儁又と言う者で。二人の会話に気になる名前が出てきたからつい声をかけちゃったんだ」

小さな子が見知らぬ人物を訝しがるのはよくある。だからできる限り声も意識して優しくする。

「……………あ、ああ、あの……………！」

二人は少しの間、あたふたしながらもアイコンタクトで何かのやり取りをして、やがて意を決したようにベレー帽の女の子がこっちに向き直る。

「ん、何かな？」

「えと、もしかして田元皓さんのお弟子さんの張？さんでしゅか……………はわわ、かんじゃった」

「しゅ、朱里ちゃん、頑張つて……………」

・・・なんだろう、この微笑ましさは。こう、保護欲を書き立てられるというかなんと言つか。

まあ、それはさて置き、この子らあたしの事を知っている？

「ああ、うん。一応元皓様の下で色々教わってたし、確かにあたしの名前は？だけど・・・」

あたしの答えを聞いて二人は椅子から立つとこっちに向き直った。

「え、えと、初めまして。水鏡塾で噂はお聞きしていました。元皓さんのお弟子さんで、新しい屯田制度を創った方ですよね!？」

「その、あの、おあ、お会いできて光栄でふ・・・あわわ、かんじゃない・・・」

そう言っつて興奮気味に捲くし立てる二人。

それにしても、あゝ、可愛いな〜コンチクショウ。

「えと、あたしのこと知ってるようだけど・・・水鏡塾ってことは司馬徳操先生のお弟子さん？」

たしか元皓様のご友人の私塾がそんな名前だった筈だ。

「は、はい！水鏡先生の前で学んでいました、諸葛孔明と申しましゅ！・・・またやつちやった・・・」

「そ、その、一緒に勉強していた鳳土元と申します。・・・上手く言えた・・・」

わゝお・・・もうなんか言葉が見つかんねゝよ。三国志名軍師トツプレベルの内二人とこんな所で遇うとは。

「あ、ああ、はじめまして。袁本初様配下で田元皓様の不肖の弟子、張儁又だ」

なんとか動揺を隠して二人に挨拶する。そこから二人の席に失礼し、ちよつとした会話に入る。

初めは二人がやたらとあたしが考えた（実際のところはともかく、そういうことになっているらしい）屯田制のすごさをしきりに褒めちぎられ、稀代の軍師二人にそう言われていると思うと口端が釣り上がるのを自覚した。

そこからあたしの旅の経緯になり、次いで二人のことになった。

「ふうん、劉玄徳の所に天の御使いねえ……」

水鏡塾で勉学に励んでいた二人は、世の乱れにより苦しむ人たちに対して何か出来ることはないかと考えるようになっていたそうだ。そこに劉備が天の御使いと共に幽州の公孫賛の客将として領民を助けて回っているらしい。評判も良いそうで、二人は自分たちの力を活かす為の主として、その人となりを実際に見て、場合によってその陣営に入れてもらおうと考えていると言う。

河北を離れて半年ほどでそんなことがあったのか。

正直あたしは劉備と言う人物に余り良い印象がない。こつちで本人に出会ったことがないから、完全に前世で読んだ歴史による先入観なんだが。

演義でも正史でも人生をかけて戦乱を広げ、人を裏切り続けたようにしか見えんからな。個人的には。ある意味呂布より質が悪いと思えてならない。

そして演義に限れば袁家を曹操にけしかけ、袁家滅亡の遠因になっている。まあ、上手く扱えれば対曹操戦で良い牽制になるかも知れんがな。

そしてそこに「天の御使い様」か……張角じゃなかったのか。

「まあ、その劉玄徳殿たちの元へ行く途中、こんな事態に巻き

込まれたと」

「はい、劉備さんや御使い様がもしかしたらこの期に独立して公孫贇さんの場所から離れたら、探すのが大変そうなので・・・」

まあ、足止め食らってんのはあたしも同じだ。焦る気持ちは分らなくもない。・・・この出会いもいい機会かもしれないな。そう思い、あたしは二人に提案することにした。

「なあ、二人とも軍略に強いつて聞いてたんだけど、もしこの軍を君らに預けたら、どうにか出来そう？」

「え、ええ!?!」

あたしの言葉に慌てたらしい二人は、傍からは面白いようにあたふたする。その様が余りにも微笑ましくてわざとそのまま放置する。やがて落ち着きを取り戻し、先に口を開いたのはやはり孔明だった。

「えと、?の正規軍に関しても、外の黄巾賊に関しても情報が足りないから正直なんとも言えません」

「そ、それに、私たちはただの民間人です」

たどたどしいが、なるほど正論を言っている。確かにあたしを含めたここにいるメンバーで、両陣営も信頼できる情報を持っている人間はいない。これでは策の考えようもない。自らを過信するか、敵を侮るかしなければ妥当な回答だ。

それに、仮にあたしと彼女らに？の現状をどうにか出来る能力があってもただの民間人であるあたしらはソレを実行するだけの権限がない。所詮は何の実績もコネもない子供でしかない。

頃合かも知れない。この出会いは使える。

「じゃ、ちょっと軍人やってみない？臨時雇いで」

驚きで二人が大声を挙げる。いちいち反応が可愛いなあ。周りが何事かとこっち見てるぜ？

あ、回りに気付いて、赤くなって縮こまった。

「どつでしよう？なんかかなりそうですかねえ？」

あたしらの横で怯えを含んだ声を出しているのは、冀州刺史の韓馥殿。細身で、小柄な三十代そこらの男性だった。

その後、あたしは二人を連れて刺史府に赴き、手形を見せて謁見した。一応同じ州で武将やっていたこともあり、と言うか袁家の屯田制の発起人として知られていたようだ。

そんなこともあり、あたしは？に対して漢王朝の将として（正確には麗羽様の部下なので漢にとっては陪臣になる）？の防衛に協力を申し出た。？を守るべき兵も将も黄巾討伐に駆出されて兵だけでなく、兵を指揮できる人材も足りない有様だった。

とは言え文官出身の韓馥殿はともかく、ぽつと現れたあたしらに対する他の軍人たちの視線は余り友好的ではない。まあ、当然と言えば当然だが。韓馥殿との会話から察するにあたしはどちらかと言えば文官よりの人間と認識されているらしい。そしてあたしに付いて来た天才軍師二人は今現在は全くの無名なのだから。一部に縋るような視線も混じっているが、外様に頼ろうと言う軍人がいると言うのがこの城の現状を示している。

そして今、あたしらは韓馥殿に案内されて、城門の上で実際に城外に敷かれた陣営の配置を見ていた。一州の刺史が自らこんな事をしているのは、出来る限り早く安心できる言葉が聞きたいからだろうか。当然か。賊の討伐と言った規模の小さいものだけだったとは言え、実戦を経験したことのあるあたしだって戦の空気で心臓が煩く鳴り、胃が持ち上がる感じになる。

もう夕方、城壁から十余里か。城を囲むように野営の陣地が幾つもの球形を造って、それら一定の間隔を隔てながら城を包囲している。いや、二つほど他よりでかい陣地があるな、指揮官とかそう

いつのか？

野営地から幾つも煙が上がっている。飯時なのだろう。その煙の量に偽装が混じっていないとした場合、

「孔明、土元、敵の数、どれくらいだと思っ？」

将来敵になるかも知れない天才軍師に聞いてみる。

「え、えと、偽装がなかった場合、恐らく二万八千ほどかと・

」

応えたのは意外にも土元だった。あたしの見立てより細かいなおおよそ三万、があたしの見立てだったから。

さてどうするか。正攻法の野戦は無理。こっちの兵は一万二千。指揮官も不足して、疲れも見える。燃やすか？周りに余り草が生えていない。今に限れば風もない。さて、できれば実際周りを歩いて地形を確かめたいが、地図で我慢するしかなさそうだな。

「……援軍があれば……」

ふと、そんな声が聞こえた。振り返る。声の場所には土元がいた。

「援軍がどうした？」

援軍、確かに欲しいが、今はどこもそんな余裕があるのだろうか？いや、ありそうな場所には心当たりがある。袁家の管轄下にある南皮と渤海。あそこには元皓様がいて、裏禍と裏亞がいる。この情勢だ、猪々子や斗詩、場合によっては麗羽様も戻っているかも知れない。希望的観測ではあるが、他の場所よりよっぽど可能性がある。

「この城に援軍が十分な食料があれば・・・勝てなくても絶対に負けない策があります」

土元の口にした負けない策という言葉。ソレが意味する言葉があたしの思うとおりの言葉なら、ソレは即ちあたしらにとって「勝てる策」と言うことなのではないだろうか。

今のあたしらにはソレで充分だ。相手は元農民とかが集まった軍勢だ。こつちが負けなければ、援軍と言つのが嘘でもいい、そういう希望さえあれば負けることはない。そうすれば何れ敵は瓦解する。もっともその為には幾つかの条件を満たさなければならぬが。

「それって、あたしは何をすればいい？」

土元の表情はあまり良くなかった。その意味は・・・彼女は実践を経験したことがないんだっけ。つい「軍師・鳳土元」として見てしまって、彼女が軍人でない事を忘れていたようだ。逸っているのかな、あたしも。何しろ万と言う単位での戦いはあたしも未経験だ。それでも確実に生き残りたいのなら彼女らに働いて貰わなければならない。あたしじゃ、確実に保障できない。

「緊張すんな、あんたらがどんな作戦立てようがね、多分正攻法でやるより死人は減ると思うよ。駄目だったらはつきりあたしが駄目出しするぞ。気負い過ぎるなよ」

そう言っただけであたしは土元の小さな肩を叩いた。こっちを見上げる土元は相変わらず顔色が悪い。せめて責任はあたしが背負う。心の負担は減らせんでもこれくらいはやらにゃな。

「えと、雛里ちゃん、私も一緒に頑張るから」

「うん、ありがとう、朱里ちゃん」

土元の両手を握って彼女を励ます孔明。ソレを見ていいコンビだなと思った。

「ま、いざとなったらあたしが敵の大將を暗殺してやるよ。そういうのは得意だからさ」

そんな二人にやはり気休めでも声を掛けずにはいられなかった。

ふと、裏禍と裏亞に会いたくなくなった。

第十二回 用間

黄巾党で一軍を任されるようになってから俺も随分羽振りが良くなつてきやがった。元々食うに困つてたからこんな奇妙な集団に入ったがこの結果は予想外だぜ。飯も酒もそこの村からいくらでも奪えるし、女にも不自由しねえ。そんでついには蜂起して天下の朝廷をひっくり返そうつて話になった。

俺は御輿に担いでいる三人姉妹がいる本隊のための陽動としてそこら中で暴れまわるように言われた。

随分楽な仕事だと感じたぜ。何しろそこら中から略奪のし放題だ。楽しくてしょうがねえ。

この蜂起だつて成功すりやお偉いさんになれるわけだし、負け込んだらとつと色々持つて逃げだしや良いんだからよ。

そんで、丁度ここらで一番でっけえ？の街が手薄だつて言うから手勢引き連れて困んだつて訳だ。もうちつと早く終わるもんだと思つてたが意外と粘っている。まあいい。どっちにしろ数はこっちが上だし、敵は戦下手だ。俺は城を落としてからの事を考えりゃいい。そう思つて本陣の天幕の中で城攻めの様子を聞いて過ごしていた。

そしてそんな時だった。部下が奇妙な報告をしてきやがったのは。

「女が一人だと？本当に忍び込んでたんじゃなく、正面から乗り込んできたのか？」

「へ、へへ。俺も疑ったんですが、他の連中もそう言うもんで・・・」

報告してきたやつも戸惑っているようだ。俺は傍に控えているここに寄せ集まったほかの軍勢の頭目に声をかける。

「程遠志、孫忠、どう思う？」

俺の両脇に立っている二人の部隊長は一応俺の言う事を聞いているがちゃんとした意味での部下じゃない。俺より預かっている兵が少ないから俺の言うことに逆らえねえんだ。

「あゝ、なんとも言えないね。目的分らんですし」

「まあ、判断材料もないですし」

まあ、当然だな。この質問も二人の面目を立てるためのものではない。

「そういうのって本人に聞いたほうが早いと思うよ？」

そんな声と共に天幕に入ってくる影があった。それは髪の毛の末端だけ白くなっている奇妙な黒髪の女だった。やけに袖のでかい黒い外套を纏い、妙に楽天的で、それでいて挑発的な笑みを浮かべていた。女は皮袋の荷物を持っていたが、他に見える範囲では武器を持つてはいなかった。

「何だてめえ……」

思わず腰の剣に手を掛ける。他の二人も同じだ。得体の知れない相手を前に、いつでも得物を構えられるようにする。

「外の連中はどうした？」

外で武器を持った兵士に見張らせていた筈だ。

「やゝ、ちよつとここの偉い人に用があつてさ。邪魔して来るし人の胸見るし、取り敢えずのした」

そう言つて女は外套の前を腕で抱えるようにして胸を強調する。色香のある表情に思わず生唾を飲んじまう。だがそれも次の瞬間には元の気楽なものに変わる。

「そんでき、この軍の中で一番偉いのは誰？」

「今は俺が一番だ」

女の言葉にそう返す。いざと言つ時に振るえるように剣をしっかりと握る。他の二人も同様に直ぐに斬りかかれる体勢にする。だが女は微塵も警戒した様子はない。気楽に笑みを浮かべているだけだった。

「そうかい。じゃあ、取引の話をしに来たんだ」

「取引だと？」

「こそ、取引取引」

女の笑みがより深いものになる。いよいよ持って胡散臭い。

「何の取引だ？悪いがこっちは忙しいんだ」

「まあ、そう言わんでよ。絶対悪い話じゃないからさ」

この女、人を苛立たせるな。だが、話は聞いておくべきか。ただその前に、

「程遠志、剣を」

俺の言葉に頷き、程遠志が剣を抜き女の喉元に突きつける。

「話は聞いてやる。だが妙な事したら殺すぞ」

「……わ……女一人にこんなことします？」

女の頬が引きつる。少し溜飲が下がった。

「ここまで一人で乗り込んだ奴が何言つてやがる。これぐらい当然だ」

「え、いい年したおっさんが尻の穴の小さい。まあ、いいけ

どね」

んなっ、この女あ。

「いいから何の用で来た。人をおちよくりに来たんならただで済むと思うなよ」

「やぐ、流石にそんなことしませんよ。あぐ、あたし、？の無頼の徒を束ねている張春と言いましてね。よかったら城の門を内側から開けてやるうかとね？」

この女の言葉に俺だけでなく他の連中も驚きを隠せなかった。

「そんな助けが必要だと思っつか？」

「まあ、城を落とすだけなら必要ないだろね。でもあんまり時間かけると増援とか送られてきて略奪の分け前とか減るんじゃない？」

思わず舌打ちする。この女が言ったのはついさっき他の二人と話し合っていたことだ。

「・・・それで、お前はどんな得をするんだ？」

確かにこつちにとって願ってもない話ではある。だからこそ畏かどつが見定める必要がある。そう思いこいつらがする得は何なのか知る必要がある。

「や、もちろんお願いとかありますよ？こつちもあたしに付いて来てくれる兄弟たちのことを考えにやらんしね」

待つてたとばかりに笑みを深める。

張春と名乗った女の語った条件は次の通りだった。

第一に張春の手下どもの安全だった。家の上に目印をつけとくからその家は見逃せと言う。なるほど、確かに手下の面倒を見るのは簡単じゃねえ。少なくとも身内での厄介事は減らせるか。

第二に略奪時の殺しを可能な限り自重。ブン盗って終わりの俺たちと違ってこいつらは将来的にも？の堅気の衆を飯の種にしている。あんまり人が死ぬとこいつらも困るのは確かだ。

そして？の蔵から盗る金銭やらの分け前を寄越せと言うものだった。理由としてはこつちの略奪の後暫く城の住民からみか締めやら取れないから、その間に使う金が必要と言うことだった。

なるほどな。こいつが無頼と名乗ったがその通りだな。武侠が重んじる義より、まるで商人のように利を求めている。だがまあ、

要求に特に怪しい部分はねえな。けど何か腑に落ちん。

それが純粹にこの女の人を喰ったような態度のせいか、それとも何かを見落としてるのか。だが、こいつの提案が魅力的なのは確かだ。？は規模がでかくて人口が多い。それに金持ちも多いから取れるものが多い。

実入りが多いのは確かだが、やはりこう、現れた時期の都合が良すぎる気がした。

「やっぱり信用できねえな。悪いがその話は蹴らせて貰う」

「ちょっとちょっと、そうすぐに結論出さないでよ」

俺の言葉に反応して程遠志の、剣を握る手に力が入るのに気付いた女は慌てて捲くし立てるように話す。

「こっちもさ、そう簡単に信じてもらえらって思ってたからさ、ちゃんと手土産代わりの情報とか有るんで、せめてそれ聴いてから判断してくれない？」

そう言って女が語った情報は、？の官軍が三日後、本陣に夜襲をかけるというものだった。

「どうやってそんなこと知ったんだ」

「兄弟たちに官軍に徴用されたやつらもいてね。城門を開けるのだから、そいつらが門の当直になった日を予定してんだ」

「で、それが本当だったってどう証明するんだ？」

「こればつかは信じてもらわないとね、話が進まないんだよ。ま、あたしから言わせて貰えばあんたらが生きてるのが証明かね」

唐突に、女の態度が変わった。それはまるで年上の人間が出来る悪い子供に言っただけで聞かせる、といった雰囲気だった。

「いい加減作り笑いも面倒だから言わせて貰うけどさ。こつちも命懸けでここに来てんだ。頼み込んでんのはこつちだからな、下手にも出たけどさ。いい加減今の状況も込みで判断できないかな？ あんたら騙すにしちゃ無理あるだろ」

言っただけで聞かせるという雰囲気だというのに、殺気にも近い威圧感を発している。戦場にいたことがあるのか、それとも裏稼業をやった結果なのか、こりゃ十や二十どころじゃない数の人間を殺しているな。半端じゃない凄味がある。人の上に立っている立場と言うのもあながち嘘ではなさそうだ。だが、

「俺たちを騙すにしては怪しすぎる。だからあんたは俺たちを騙そうとしている訳じゃない。騙すならもつと信じられやすそうな奴を使うから。そう言うことか？」

唐突に声を出したのは静かに事の成り行きを見ていた孫忠だった。

「そう言うの、本人に確認取るのは悪趣味だよ。まあ、交渉事の得意な兄弟たちもいるから、そいつらに任せても良かったけど、こつ言うのは先ず上の人間が出て誠意を見せないとだろ。こつちは誠意見せたんだからそつちにも見せてもらいたいね」

孫忠の言葉に頷きながら女はこつちに挑発的な笑顔を向ける。もつともさつきと違って目が笑っていないが。

「へえ、見せなかったらどうすんだ？」

「組むほどの価値がねえんならその首へし折るだけさ」

「出来るのか？そんなことがこの状況で」

「出来ないとでも？そんなことがこの状況で」

この女、大した肝だ。帰る事は考えていないようだが、だとしても本気でこの三人を相手できると思っているのか？

「なら聞くが、俺ら三人を殺せばこの軍は頭を失う。そうすればお前らは俺たちに頭を下げずに自分らの縄張りを守れるんじゃないか？」

「頭がなくなった蝗がどう動くか分からないからかえって怖いわ」

そう言つて女はげんなりした顔になる。そうなった場合の事を想像してみた、と言ふことだろうか。だがこれまでのやり取りでこいつをどうするか決まった。

俺は孫忠に雑兵に鎖を持ってこさせる。意図を悟ったのか、女は始めてここに来た時のような楽天的で挑発的な笑みに戻る。

兵が鎖を持ってくると、女は自分からその兵の前に両腕を突き出す。袖から出てきた両手の全ての指に豪華な指輪が嵌められていた。

「悪趣味だな。その両手」

「交渉事の身嗜みだよ。剣よりこっちのほうが言つこと聞く奴もいるからね」

ま、確かに金のほうが動かし易い人種ってのはいんだがな。こ
っちの厭味にはのってこねえか。

「拘束しとけ。お前を信じるか、三日後だ」

女の顔は妙に自信に満ちていた。

そして三日後。新月の暗闇に紛れて攻め入った来た部隊を待ち
伏せで返り討ちにした。この日だけ、包囲に使っていた頭数をこっ
ちに回させたのだ。

結果、暗闇で敵の具体的な数は分らなかったが、それなりの被
害を与えられたようだった。あの女から得た情報は確かなものだっ
たと言うことだ。敵がかなりの勢いを見せたことだけが意外だった
が、それだけ敵はこの奇襲に期待していたと言うことなのだろう。

「で、どうよ。そろそろ信じてくれる気になった？」

そして次の日、天幕でその女と対面していた。女は満面の笑み

で縛られた両腕を差し出してきている。その態度が気に入らなかつたが、一応こいつを解放してやることにした。

部下に命令して女の拘束を解かせると、何を思ったのか親指につけていた指輪を投げて寄越してきた。

「何のつもりだ？こりゃ」

「ま、契約の証、みたいに思っといってくれ。こつちが多めに代償を払ってれば、アレだ、裏切られた時に容赦なく相手を殺しに掛かれる」

良い笑顔で物騒な事を言う。

離里視点

今夜の夜襲は予定道理失敗した。待ち伏せを予測して大目の戦力で、兵士の皆さんたちに上手く連携して損害をある程度減らすように指示しましたが、それでも五百近い死傷者を出しました。黄巾党に潜入した張？さんの援護のために、わざと敵に知られた上で兵を出したのです。これが自分が考え出せる最良の策だとしても。

「雛里ちゃん、大丈夫？」

帰還した兵士の人たちの様子を見て立ち尽くしていた私に朱里ちゃんが声をかけてきた。

「張？さんだつて言つてたよ。それが一番良いつて思うんだつたら、最後までやった方がいいつて」

そう言えば黄巾に出向く時に張？さんがそんなこと言つてたな。この策を提案したのに実行にためらつて私にこう言つた。

『どつちにしる戦になりや人が死ぬ。結果としてそれが減るんだつたら躊躇う理由はないよ。だから、この策で出る死人に対して君が申し訳なく思わなきやいけないことは何もないさ。そいつらを無駄死ににしないことの方が大事なんだよ。特に今回はこの兵士にとつちや故郷を守る戦いだ。家族も思いでもここにある。待つて逃げることも出来ないからさ。だからそれを守るために皆の命を使ふんだよ。皆が命を危険に晒してまで守りたいと思つているものを』

その言葉に勇気を貰えた様な気がした。この策が通つたのも張？さんと、偶然さっきの言葉を聞いていた兵士の人たちが、他の人たちが説得したから。結局誰かに助けて貰わないと、私たちは何も

出来ない。だから、もっと私は、ううん、私たちは頑張らなきゃいけないんだ。

「そうだね、朱里ちゃん。それに救援要請も出せたしね」

作戦のもう一つとして、本陣に黄巾の戦力が集中した隙を突いて救援要請の書状を持った早馬を送り出すことにも成功した。送り先は周辺の郡の内の幾つかだけであんまり期待していない。他の所も他所に援軍を出せる余裕がないと思うから。本命は渤海だけ。あそこには直ぐに動かせる私兵があるから。それに渤海への書状は張？さんに書いてもらったものだし。

それに、一番大事なのは兵士の皆さんに希望を持ってもらうことで士気を維持することだから。

「皆頑張ってるんだもの。私たちも頑張らないとね」

「うん、早く戦を終わらせようね」

うん、張？さんが言ったように、死んでしまった人たちを無駄死ににしないためにも頑張ろう。きつと、私の策で死んでしまった人たちに対して、どうしても後悔をなくせないと思う。でも、そう言った私に張？さんがかけてくれた言葉を思い出す。

『やらない後悔より、やった後悔の方が多分、まだ気持ちが楽なんじゃないかって思うよ』

その言葉がホントかどうかは知らないけど、でも思い出してみたらやってみよって言う気持ちが湧いてくる気がした。

第十三回 煽風点火

「で？あの二人は何時切るの？」

夜襲を凌いで三日経った。この黄巾の軍の頭領である波才の信頼を得て、今では彼の天幕で酒を飲む仲になっていた。そんな酔った勢いで色々この中の事情を聞きだすことに成功した。

そして今、話していたのは波才を除く二人の頭目に関してだった。

他の二人、程遠志と孫忠は波才の部下という訳ではない。軍閥政治にあるたくさん戦力ある方が偉い、と言うそれに近い。その為、軍事的威圧で従わせている状態なので、信用性に問題があるのだ。ま、付け入る隙は多いに越したことはないけどね。

「何で切るって話になるんだ？」

波才は無表情で返してきた。

「だって、あいつらいると分け前減るじゃん。かっぱらったもんを仲良く山分けって感じじゃないだろ、あんた。寧ろこつ、『全部俺様のもんじゃー』とかそんな感じだろ？だから結果的に消すんだろ？問題は時期と理由ぐらいかな？」

大方そんなもんだろ。こいつが漢王朝の腐敗がどうか、義憤に駆られたとかそういう輩ではなく、純粹に蓄財目的の人間だつてことは、ここ数日の付き合いで理解したつもりだ。と言うか、他の二人も同様。ために表向きはともかく、裏では結構ギスギスした関係になっている。全くもつてちよつかいの掛けがある。今現在でもちよつと火点けると途端に炎上しそうである。それにもつと薪と油を用意して消火不能な大火事に持つていくのがあたしの今回の仕事な訳だ。

ついでに言えばこれらは全部土元の予測通り。黄巾の野営地の陣形と現場の兵士の証言からここまで推測できたもんだ。二十一世紀だつたら間違いなく美少女探偵として有名になってたと思う。見た目子供で本当は高校生なエッセ少年探偵とは違うぜ。

「だが、あいつらも簡単にどうにかできる勢力じゃねえぞ」

そりゃね、いくらこいつが最大勢力でも、向こうの二人が足並みを揃えれば力関係は逆転する。下手に突けば手を噛まれるじゃ済まない。

「の割には結構酷使してるよね。結構不満溜まってるみたいだぜ？」

それ程あからさまではないが、孫忠が意外と頭が良かった。波才が意図的に二人の部隊に損害が集中しやすいように作戦を組み立

てていることに気が付いている。既に程遠志と密会しているのを確認している。内容まで把握できはしなかったが、波才にとって愉快な内容であることはないだろう。

「せめて形だけでも労ってやったらどうだ？良い酒の一壺に礼の言葉でも添えてさ」

「今更だろ」

そう言っただけで波才は何を無駄な事を、と言う表情を浮かべている。だからあたしは得意満面の表情を作る。

「や、目下に対する時間稼ぎには持って来いだよ？これあたしの経験則。そういう気遣いされるとね、こつ、良心にちよつと来るもんが出てきたりするのよ。それでちよつとの間は敵対することに戸惑いが出てくるのさ。その内にズバツと解決しちやえばいいのよ。偶に効かない相手もいるけど」

最後にオチをつけて冗談半分というように見せる。露骨過ぎると誘導に気付かれかねないし。

「お前の態度はどうにも素直に信じるのが癪に思えるよな」

「そこは自分を偽らないあたしの素直ささ」

自分で言ってるてなんだが、傍から見ればこれも自虐ネタになるのかな？血の繋がらない妹二人に言われたようにあたしは演技が上手くないようだ。だから素の自分を誇張して嘘を吐く。あたしはどこまでこの時代に順応したのかな。

「兎に角やって見て損はないと思うよ？なんならあたしが連中の酌をしてやってもいいぜ？」

兎に角相手に、こっちにとって都合のいい案件を提示する。何れ実行するように、そつと促すわけだが、こうして耳に入れとくだけで一人の時にふと考えてしまうものだ。その方がいざという時背中を押し易いのだ。

取り敢えずこの日はこれぐらいでいいだろう。いくら冗談っぽく言っても、度が過ぎれば疑われやすくなる。

一言二言喋って自分にあてがわれた天幕に戻ることにした。

自分の天幕で待機している間も戦は続いている。偶に天幕を出て攻められる？の様子を見たりもするが、心臓によろしい光景は見られないので直ぐに引っ込むことも一度や二度ではない。

一応あたしの仲間が後七日後に城門を内側から開けた時に決着を着けることになっている。今行われている攻撃はその意図を隠すためのものであり、その為自身の被害を減らすため今までの攻撃より手を抜いている。これで孔明や土元たちも策の準備に回す時間が稼げるだろう。

それから更に二日後、波才に呼ばれた。要件は以前あたしが提案した酒を送るというやつだった。やっぱ自分の立場が不安なのかね、打てる手は取り敢えず打っておこうと言っことらしい。ついでにあたしにそれとなく連中の考えを聞き出すようにも言われた。

そしてあたしは食料関係の物資を纏めた区画にやってきた。その中でも酒がある場所にまっすぐ向かう。

「あ、張春さん、まゝた酒くすねに来たんですか？」

酒や油といった、液体の物資を集めた天幕の一つを前にし、一人の見張りの兵が声をかけてきた。十五、六歳ほどの少年で何度か酒やおつまみやらくすねている内に顔馴染みになった訳だが、そろそろ使い時かね。

「やゝ、違っつて。波才のおっさんに言われてな？程遠志のおやっさんと孫忠のあんちゃんに酒の一壺も差し入れてやれって」

あたしはそいつに酒を小振りな鼎に一つづつ準備させる。同時に酒器もそれぞれ一通りづつ。ただ、片方には他の人を使っいい

という許可を貰ったからこの顔見知りにお使いを頼む。

「え、程遠志様の分ですか？あの人が怖いんですよ」

青年は溜め息混じりに情けない声で呟く。まあ、言いたい事は分らんでもない。こう、なんと言うか北斗的な強面なんだよな、こゝろ「ヒヤッハー、汚物は消毒だぜー！」的な台詞が似合いそうな顔してんだよね。髪型がモヒカンじゃないのが惜しまれる。

「まあそう言うなって。ちゃーんとお駄賃も用意してるって」

と、あたしは袖に用意した瓢箪に入れた酒を差し出す。

「さつきちよつとちよつぱつて来た。後でこつそり呑め」

「さつすが張春さんは太っ腹。うちの対大将とは違うね」

そいつと軽く談笑しながらさり気なく程遠志に送られる鼎に近づく。そして自分の体で隠しながら右手の人差し指の指輪を弄る。指輪の先端がずれて、中の液体が酒に入る。それを鼎に供えられていた杓子で掻き混ぜる。

中身は遅効性の毒である。大人一人、飲んでから大よそ半刻ほ

どで死に至る。酒で薄まり、口に入る割合が下がる事を考えても、助かることは少ないだろう、経験則で判断して。

「ちょっと、人に届ける酒をくすねようとししないでくださいよ」

「いいじゃん、別に。その瓢箪の分で充分だろ？あんたの分は」

半ばじゃれあうように見せながらお互い酒を送る相手の元に向かう。他人に見られても怪しまれにくいように自然を装って。

「……と、言う訳で、謀反とか起こす気はないか訊いて来いと言われた訳ですよ。どうする？」

「成る程、流石に自分の立場を危ぶむだけの頭はあるか」

と、言う訳で今のあたしは波才派と反波才派の間を飛び回る蝙蝠さんである。双方に情報を貰い、双方に情報売るわけである。無論渡す情報はあたしが吟味したり、場合によっては改竄したりする。

波才と比べると孫忠のあんちゃんは結構頭を動かすから情報操作がやり辛いんだよな。

もつともあたしがこんな立ち位置に収まった理由はあたしからの働きかけではない。夜襲の情報により、波才との間に一応の信頼関係が出来た後、向こうから声を掛けられたのだ。

雛里に言われていたのもあるが、もう直ぐ戦いの決着が付くだろうこの時期を置いて、相手側を切るタイミングはない。博打に出る人間がいるならば、やはりこの時期だろう。ただ、三人の中で一番慎重そうなあんちゃんが博打に出るとは思わなかった。いや、程遠志のおっさんにそういうこと考える脳みそがありそうにも見えな

いが。
・・・消去法であたしが付け入る相手も孫忠のあんちゃん一択だったか。

「で、どうする？あたしとしてはあんたが理由つけて軍隊連れて他所に向かうのをお勧めしたいが」

「ふむ？その場合、契約の代金は払えないぞ」

そう、当然あたしは波才を裏切るのに条件を出した。夜襲の件の後、協力の条件の一つ、？の蔵からの分け前はこちらが二割ということで話がついた。そして孫忠はそれを自分がこの軍のトップになった暁には三割に引き上げてくれることになっている。だが、あたしは敢えてここで乗り気でない風を装う。

そして、情報を引き出す口実に使つたために波才に運ばされた酒を一杯呷る。次いその杯に注ぎ、孫忠に手渡す。孫忠がそれを口にする。こいつさつきあたしが別の杯に注いだのには口をつけていない。取り敢えず孫忠がそれを飲んだ事を確認してから言葉を続ける。

「元々前の条件でこっちは充分だからね。多く貰えるんなら貰うけど、万が一あんたらが共倒れって結果になったら目も当てられないからね。正直このまま事を進めていいのか迷つてる」

この言葉に嘘はない。少なくともこっちの予定より早く退場されるとマジで困る。

「だから下手を打つよりは波才の旦那に？を占領させた方が安全なんだよ。博打は勝てばいいが、今回は負けたときに支払うものが価値分よりでかい気がする」

「負けんさ。波才にこっちの計画を見抜ける頭があるとは思えん」

同感。でもそれはあたしがどうにかするしね。

ふと、眩暈がした。時間か。あたしは席から立ち上がる。

「まあ、いいけどさ。約束通り情報はくれてやる。でもくれくれも……」

言葉を言い終える前に足から力が抜けて座り込んでしまう。

「おい、どうした？」

孫忠がこちらに声をかけてくるがそれに返す余裕はなかった。花かなが液体が流れる感触がし、地面に赤い液体が垂れる。

「波才の野郎、あたしごとかよ」

視線を挙げれば歪んだ視界にあたし同様に崩れ落ちる人影が見える。波才が毒の入った酒を持って他の頭目の殺害、兵力の吸収を目論んだ。そういう筋書きなのだ。だが、その毒は二人とも殺すには至らず、黄巾への禍根をより深く育てることになるだろう。

朱里視点

張？さんが黄巾党の軍に潜入してからもう六日になる。？のお

城は今日もその攻撃に晒されている。それでも夜襲を失敗したその日から、前ほどの苛烈さはなくなっていた。

それでも敵のこの僅かな弛緩が策の準備に必要な貴重な時間を作ってくれている。

「それにしても韓馥さん、出てこないね」

決行の日、開ける予定の東門の裏での作業を一緒に監督している雛里ちゃんが呟いた。張？さんが黄巾の軍勢に潜入してから韓馥さんは刺史府から余り出てきていない。と言うより、私たちが来る前から余り督戦に來たりすることは少ないと、他の將兵の人たちが溢していた。韓馥さんは文官だから戦場は向かないし、下手に流れ矢とかに当たるよりはいいって言う人もいれば、一州の刺史様なんだからせめて皆の前で味方を鼓舞するべきだって言う人もいた。

でも私たちのやることに変わりはない。外の攻撃が弛んでからは城壁の守りを工作に回しているから決行まで余裕が出来るぞう。

「大丈夫だよ。作業も予定通り進んでるし、張？さんもきつと上手くやってるから」

作戦の都合上、あれ以降張？さんとの連絡はつかない。変化に弱く、臨機応変な対応が取れないのが今回の策の弱点。だから私たちは張？さんを信じて自分たちのできる事をやるしかない。

「お嬢ちゃんたち、油はここに置けばいいのかい？」

兵士の人たちが荷車をおしてたくさんのお壺を運んで来た。

「あ、はい、仕込みは夜になってから行いますから向こうの小屋をお願いします」

「あいよっ」

仕掛けに使う油を事前に用意して貰った小屋に運んで貰う。

雛里ちゃんの考えたこの策で、予定調和とは言え沢山の人が犠牲になった。多分そのせいだと思うけど、最近雛里ちゃんの顔色が良くない。

「おいっ！軍医こっちにつれて来い！怪我人運ぶの間にあわねえぞ！」

「無茶言っな！軍医の人員だって多くないんだぞ！あいつらまで怪我したらどうすんだ！」

ふと、近くを担架を担いだ兵隊の人たちが通り過ぎて行った。

担架の上では腿に矢を受けた兵士の人が苦しんでいる。私の横で雛里ちゃんの肩が震えだした。だから雛里ちゃんの手を握った。

「きつと大丈夫だよ。皆頑張ってるし、全部上手く行ってるから。だからそういう顔しちゃ駄目だよ。皆不安がっちゃうよ。」

今回の戦に限れば雛里ちゃんのが多分最良だと思う。だから私は全力で雛里ちゃんを支える。それがきつと、命懸けで戦ってる皆さんと、今はここにいない張？さんに私が出来る精一杯のことだから。

「で、なんであたしが波才を殺しちゃいけないんだ？」

自分で用意した、致死性のない毒で孫忠と一緒に倒れてから半日、眼を覚ましたのは孫忠陣営内のある天幕の床の上だった。

眼を覚ました際、松明の灯りで天幕に映った影で外に人がいる事を確認、ついでに横に設置された床に孫忠が寝ている（息の質からしてもう起きていようだ）のを確認した。

そして、あたしは床を下りる。足元がふらつく。ま、当然か。致死性のもんじゃないのは確かだが、決して弱い毒を使った訳じゃ

ないからな。

「どこに行く気だ」

ふらつく足取りで外に向かうあたしに、孫忠が声をかけてきた。

「取り敢えず、欲しいものが出来たから取ってくる」

「波才の首か？行動が稚拙だぞ」

それを無視して外に出ようとする。

「誰か、張春を取り押さえろ」

孫忠の言葉に呼応して、外に立っていた衛兵が二人入ってきて、あたしはそれに取り押さえられてしまう。

「そんな状態でどうするんだ？流石にそんな有様で首が取れるほど波才も弱くはないぞ」

「上手いやり方があるさ。けどそれをやる手勢がないんでな」

下っ端に取り押さえられながらもそう返す。くそ、マジで振り払えんぞ。

あたしの言葉を聞いた孫忠は自分の顎に手を置き、何か考えるそぶりを見せる。

「有るのか？良案が」

あたしは訝しげな表情を作る。

「良いのかよ？蝙蝠の言葉を信じて」

「程遠志が毒殺された。俺たちは飲んだ量が少なかったせいか助かったけどな。向こうがこつも直接的な手段に打ってきたんじゃもう猶予はないからな。藁でも縊りたいのさ」

孫忠の顔に悔しさが滲む。絵に描いたような冷静沈着キャラのこいつにしちゃ珍しい。

「ま、信じてくれんなら手はある。幸いあたしの立場は未だ蝙蝠だ。上手く機を作って見せるぜ」

「立場が危ないのはお前もだろ。お前ごとこつちを消しにきたんだからな。お前も日和見できる状況じゃないだろ」

まあ、一見して、孫忠と程遠志、そしてあたしに対して波才が生かしておくべきでない、もしくは消さないと不味いと判断したように見えるはずだ。この時点であたしと孫忠が手を組んでもなんら不自然はない訳である。

さて、こつちでも一応の信頼を手に入れた。そして、上手く波才のおっさんを誤魔化し、更に不安を煽る報告をしてやればいい。そして土元の行った策の通りに動くよう進言すれば良い。それでこの戦はあたしらのもんだ。

さて、黄巾の皆さん、舞台は整えてやるからよ、楽しく踊ってくれよ。

第十四回 彼女たちの策略

「で、結局程遠志のおっさんのこともはっきりさせられないまま、作戦決行の日ですか」

思いっきり溜め息と共に、横にいる男に蔑みの視線を送る。

「孫忠が動いたってことは確かなんだろ？なら後はお前の策の通りにやるだけだ」

はいはい、ご信頼ありがたいこつて。けどそれに応える気はない。あたしたちの関係も今日この日限りだ。

あの日、あたしと孫忠が倒れたことは幸いにして波才には届いていなかった。逸早く眼を覚ました孫忠が緘口令を布いたそうだが。尤も噂として流れるのを防ぐことは無理だったが。

「酒で酔わせて口を滑らせるのは良く使う手段だろ。ついでに体も使う破目になったけどさ。まあ、その価値はあったけど。つつか、そんなことより何で程遠志を始末した？逸ったことしやがって」

そうやって『お前何先走ったことしてくれてんだ』と相手を疑う振りをする。無論波才がやった訳ではないことは百も承知だ。やったのあたしだし。

波才の側からすればあたしがやったと疑うだろう。だから先にこつちが相手を疑うことで疑いを逸らすのだ。どこぞの、ロリの精神に寄生してた皇妃もやってたし。

まあ、結局は孫忠の謀りという結論になった。何故なら程遠志の死が結果として孫忠の利になっているからである。

まず、波才と他の二人の頭目の仲が決して良いものではないことは、一般の兵士たちも薄々感ずいている。それだけで波才にはこの二人を殺す動機がある。多くの兵が波才を不信の目で見ることになるだろう。

そして、死んだ程遠志の兵だが、六割が孫忠に預けられた。もし、波才が兵の全てを吸収したら確実に反乱が起こるだろう。それに、全部の兵を孫忠の引き継がせればパワーバランスが逆転する。この比率は兵たちに、波才が程遠志を殺した訳でないと示すための苦肉の策と言っわけである。尤もこれは、兵たちにとって、確信が持てないだろう、という程度の効果しか見込めないが。

結果として、波才は戸外の連中以外の信頼を失い、孫忠は兵力差を縮めることに成功したことになるのである。

と、一方的に孫忠が得をしている現状、波才の疑いを孫忠に逸らすことは意外なほど簡単だった。

今回の戦は、簡単に言うത്？を落とす、城を利用して孫忠の軍を迎撃すると言うものである。その為に、陽動ということで、孫忠の軍には中から開けさせる東門の反対側、西門を攻めて貰うことになっている。そして波才軍だけで逸早く城内の防衛に主だったものと、防衛に向く施設を制圧して、絶対的な優位を作り出すというものだ。

ここで孫忠を倒せば、残った兵たちは波才の下に付かざるを得なくなる、と言う訳だ。ま、実際んところはもつと面倒な細かい部分とか色々あるが、それが実行されることはないので割愛する。

それはそうと、本格的な戦ということであたしはいつもの服装の上に鎧を身に纏っている。尤も鎧と言うよりプロテクターと言っべき軽装のもので、肩と肘、足と、あたしにとっては寧ろ武器の範疇にあつたりする。剣とか槍の穂先を流石に素足で蹴ったりできんし。

と言うわけであたしは波才の隣で戦況を見守っている。こつちの正面に建つ東門の正反対、西門が孫忠の軍に攻められている。それを示すように、向こうから怒号やらの戦場の音が響いてくる。こつちが動かないため、？の軍隊は多くの兵を正門に回すことになる。無論こつちにも備えに兵を置いているが、その数は正門に置かれた兵力には劣る。そして日が沈み始め、一日が黄昏時に移り始めた頃だった。門が開いた。

「よし！先鋒隊突撃！本隊も直ぐに続くぞ！」

波才の声が全軍に伝わり、大芝居が始まる。あたしは先鋒部隊とともに駆け出した。

離れ視点

「配置、言われた通りに終わりましたよ。いつでもいけますよ？」

私は城壁の上の楼閣で指揮を執ることになっていた。朱里ちゃんには西門の指揮を執っているからここにいない。だから私は、少なくとも作戦が進んで西門の戦力がこっちに車では一人で指揮をこなさなくちゃいけない。

「わ、分かりました。もうすぐ門を開きます。その、その時はよろしく願います」

緊張に声がどもってしまふ。

「了解だ。緊張すんな、嬢ちゃんたちの策は袁家の將軍様の太鼓判もらったんだろ？なら問題ないって」

そんな私の様子に苦笑いを浮かべながら、伝令の人は励ましの言葉を置いて、私と部隊長さんたちが詰めている部屋を出て行った。

今頃指定した位置では兵士の皆さんが戦いの始まりを待っているんだろうな。

「それでは、戦を始めます。敵は張？さんの工作で私たちの策の通りに動くはずです。後は手筈の通りに動けば私たちの負けはありません。皆さんのお力でこの城を守ってください」

ここにいる皆さんに頭を下げる。だって私は直接戦うことが出来ないから。自分の力じゃ何も出来なくて、他の誰かに命をかけるせてるから。

皆さんは掛け声でそれに応えてくれた。皆さんが部屋を出てそれぞれ所定の位置に向かう。私も指揮し易いように外に出る。丁度城壁の外郭から反対側、城壁に囲まれた街を向く。門の内側、城壁と町をつなぐ階段は瓦礫で封鎖されていて、守城用の長槍を持った兵士の人たちが陣取っている。その後ろの階段には弓を持った兵士

の人たちが大勢待機している。

そして門が開けられた。

後ろから怒声と轟音が巻き起こって、それが近づいてくる。

そして、攻めてきた黄巾党の人たちが門に雪崩れ込んでくる。
本来真つ先に占拠するべき、攻撃目標

の城壁への階段が塞がれているのを見ると、殆どが略奪をするためか市街地のほうに向かう。そしてその人たちは門と市街を遮断するように掘った落とし穴に落ちていった。深く掘って貰ったから普通に落ちただけでも十分な効果が望めると思う。更に、前の方の人が落とし穴に気付いても、後ろからの人たちに押されてどんどん落ちていく。そしてその上に落ちてきた人に潰されていく。

そんな中、死体らしいものを盾にしながら一つの黒い影が階段に近づいていく。その影は見覚えあるものだった。

「張?さん!」

私は思わず声に出していた。けど戦場の喧騒で私の声は届かなかったのだろう。黒羽さんは死体を放ると、袖から爪の付いた縄のようなものが飛び出し、それが瓦礫の端のほうに引っかける。そこを軸に半円を描く軌道で落とし穴を飛び越えていく。他の兵士の人たちも事前にこの段取りは伝えてあるからそれを邪魔したりはしなかった。

これから張?さんは朱里ちゃんたちのいる東門のほうに向かう

ことになってる。私たちは、後はここを死守すればいい。私たちがここを守りきらなければ、この策全てが失敗になるから。

「頃合です、火を放ってください！」

私の言葉が伝わり、少しの時間差の後、油の入った皮袋と火矢が放たれる。その油に着いた火が、更に事前に仕込んでいた、落とし穴の底の油に移って大きな炎が高く立ち上がる。そして私たちは、炎に勢いを削がれた敵をここで押し止めるための戦いを始める。

落とし穴に火が点けられたのを確認して、あたしは事前に馬が用意されてある筈の場所に向かう。東門側の城壁沿いに北に向かう。少し走った先に縄に繋がれた馬を見つけ、その縄を解いてそいつに飛び乗る。目指すは孔明たちが守る西門だ。

波才に対しては、城内であたしが、自前の部下で呼応するためにと行って先に入城した。だが孫忠には城に火の手がおこったら次の行動に入るように伝えてある。

そしてこつちも次の一手を打つ為に人気のない路地を駆けける。今回の戦いは敵を（落とし穴で隔てているとは言え）城内に敵を誘

き寄せざる為、万が一の事を考えてこの日は出歩かないように布告されている筈である。本来は人波で賑わっている筈の市場が閑散としているし、城門の近くの住民には退避命令も出ているだろう。時折建物から不安げな視線を感じる。

体感時間で十五分ほどとばしただろうか。西門の階段の近くで馬から飛び降りる。

「張？様ですね？お待ちしました！」

事前に待っていたらしい兵士が、将兵用の鎧兜一式を持ってこつちに走ってくる。

「状況はどうなってる？」

歩を止めず、兵士が持ってきた装備を受け取りながら、あたしは状況を尋ねた。

聴くに、孫忠の軍は予定通り西門を離れて北側を通って東門に向かったそうだ。これは孫忠に城内で火が拳がったら波才の軍を後ろから急襲するように言っていたからである。あたしが城内の手勢を集め、街に火を放って波才の軍を足止めすると説明してある。今んとこ全て予定通りか。

足早に城郭に一室宛がって貰う。道中、周りの人たちになにやら指示を出している孔明と会った。一秒でも惜しい状況だったから

声は掛けなかったが、目が合った時に拳を握り、親指を立てて見せる。孔明はほっとしたような笑顔を見せるとこっちに頷き返した。

宛がわれた部屋に入り、将兵が着る、あまり目立たない普通の鎧に着替える。正直あたしの服装は独特のものだから、黄巾の連中に覚えていいるやつらが少なからずいるだろう。これからの作戦行動を考えるに、あたしが？に組している事をばらす訳にいかないのだ。武器も、服に仕込んでいた分が使えなくなるので代わりに剣をふた振り用意して貰う。得意と言えるほどではないが、一応ある程度は剣術も仕込まれた。

着替えを終えて部屋を出ると、既に孔明が部屋の外で待っていた。

「え、えと、本題だけ言います。予定通り、し、志願者だけの騎兵隊、何とか七百を集めました。城内の狭い範囲ですがちゃんと走らせて選考した人たちでしゅ。充分な錬度はあると思います」

緊張からか、途中で嘔んだことにすら気付いていないらしい孔明の様子に、不謹慎ながらも奇妙な安心感を感じた。

「ん、じゃあ行くか」

孔明の報告を聞き、外に向かう。門の前に着くと、そこには既に出撃の準備を終えた騎馬隊が並んでいた。志願兵だけを集めたと言うだけあって、成る程士気は高そうだ。皆表情が引き締まってい

る。

「一声かけてください。士気はあっても十倍では済まない敵と一戦するんですから」

あたしの横についてきていた孔明がそう促してくる。演説の類は得意ではないが、そうも言ってもらえないか。何せこれからあたしが命令して死なせて行く兵士たちだ。

あたしは用意された馬に跨り、整列している騎兵隊の前に移動する。線を越える目線が一斉にあたしに向く。あまり心地がいいものではないが、賊の討伐の仕事とかでいい加減慣れてきてもいた。

「この戦で貴兄らの命を預かることになった張雋又だ！」

以前よりこういつた檄を発する機会は何度かあった。だからこういう場でよく通る声を発することも上手くなってきている自信がある。

「あたしは以前、都、洛陽に住んでいたことがある！あそこは大きかった！天子様のお膝元、あらゆる財が集まり、あらゆる栄華が集まった。正にこの巨大な漢王朝の都に恥じぬ威容があった！あの場所こそこの地上で尤も尊い場所であると思った！」

あたしの言葉に、あたしへの視線に疑問の感情が混じる。当然だ。一見してこの状況と全く関係のない事を話しているのだから。

「だが、貴兄らの住まうこの？を見たが、どうだ！？天子様のお膝元であると言う笠はなく！自ずと集まる財も栄華もなく！されど都にも劣らぬ巨大な城壁があり！そして街がある！

この地に住まう方たちが！ただの民草である貴兄らの親が！先祖が！ただ己らの多くの汗と永き辛酸をもつてこの、洛陽にも劣らぬ大都市を築きあげた！これらは如何なる偉業か！天子様の偉業にも迫る偉業を貴兄らの先祖は成し遂げているのである！」

兵士たちの表情に強い誇りが浮かび上がるのが見て取れる。

？と言う都市についてはあたしの正直な想いだ。本当に洛陽と同程度の都市を、殆ど住民の力だけで築いたのだから。

「その偉業が今！蝗の如き匪賊の脅威に見舞われている！もしこの偉業が匪賊如き手に渡つては、この偉業を築き上げた貴兄らの先祖に申し訳が立つか！これよりこの偉業を広げていく貴兄らの子孫に申し訳が立つか！」

立ち並ぶ兵士たち周囲の空間が歪むような錯覚を感じた。そういうものに敏くないあたしが、彼らに点けた火に、逆に燃やされるような感覚だった。

「立つ筈がない！ならばどうすればいいか！貴兄らの手でこの偉業を守り抜く他ない！貴兄らの命をあたしに預けて欲しい！必ずこの？を守ってみせる！貴兄らの力があればそれが為せる！この偉業を守らんとする者達よ！奮い立て！我が背に付き従い匪賊らにこの地を侵した罪に見合う地獄を見せてやれ！」

あたしの言葉に、轟音のような雄たけびが返ってくる。体が声によって震わされる。背中を何かが這い上がるような感触に、あたしは自身の高揚を抑え込むのに苦労していた。こっちまでテンションが引き摺られる。

「よし！開門！」

馬首を返し城門を向く。そして顔がばれにくいように、兜を深く被りなおす。そして目の前で城門が開いていく。

「皆！付いて来い！」

馬の腹を蹴り、駆け出させる。その後ろに七百の騎兵が続く。踏み鳴らされる馬蹄の音が一つの轟音となる。この戦、万が一にも失敗する光景を思い浮かべることすら出来なかった。

離里視点

私たちの守る東門側の戦況は大きく様変わりしていた。

ついさっきまで炎と瓦礫の壁を盾に辛うじて膠着を保っている状況だった。でも、私たちが点けた火を合図と認識したもう一隊の黄巾の軍が城を攻めていた軍勢を攻撃、最初の軍勢が大いに混乱したからこっちの対応は大分楽なものになった。

でもそのせいであまりに一方的に最初の軍勢が数を減らして言っている。片方だけが一方的に数を減らすのは、却って不味いから少し焦ってしまふ。そんな中、再び戦の流れが変わる。小規模な騎馬隊が現れて二つ目の軍勢の後方を攻撃し出した。張？さんが率いているはずの部隊だった。だったら、先頭を駆けているのがそうなのかな。

数のこととかもあってか、あまり深く攻め込まず、普通騎馬隊が良くやるような切り込んで陣形を裂くといった戦いじゃなく、外のほうをどんどん削っていくような戦い方をしていた。その為二つ目の部隊に対する直接的な被害は少なかったけど、騎馬隊のほうも殆ど被害を受けていないようにも見える。そして二つ身の部隊も、自分たちの後方を脅かされていると言うことにより、後ろの混乱を沈めるためにも後方に兵力を回せざるを得ずに、結果として最初の軍勢が体勢を立て直すことに成功した。何とか盛り返し始めた。

そうなると今度は二つ目の軍勢の損害が増えてくる。

「もう良さそうですね。狼煙を上げてください」

城門の上で狼煙の合図を上げて張？さんたちに退却して貰う。

最終的に日が暮れてきたことと、兵の疲労で限界が近づいてくる頃合になったせいでしょう、二つ目の軍勢が後退して、次に最初の軍勢も城門から離れて行った。

それぞれが距離を置いて野営を始めた。こうして黄巾の軍勢が真っ二つに別れ、ここに三つ巴の戦況が出来上がった。

第十五回 老相識

土元主導で行われた策が成功し、奇妙な三つ巴状態になって五日たった。その間、あたしらも連中も殆ど動くことはなかった。正確には動けなかったが正しいか。

一度だけ、戦力に勝る波才の軍が孫忠の軍に仕掛けたが、あたしら、？の守備隊が波才の軍を攪乱し、双方の被害に左程差がでないように干渉する。その結果、波才の軍は痛い目見て大人しくなり、孫忠も同じ轍を踏むつもりはないようでこっちも自分から動かない。

一方、あたしたちの方はというと、連中よりは被害が小さいとは言え、元の数が少ない。それにあたしらが参加する以前から今までの戦闘で、疲弊が大きい部隊が多く、すぐさま動かせ、且つ使える部隊は多くない。波才と孫忠、それぞれの軍に同時に二勢力を相手取る力がないという事実は、こっちにも当て嵌まるのだ。

結局、どっちも主動的に動くことは出来ず、時間が過ぎていった。

ところでこの時、戦いが三つ巴と言う形になったため、黄巾の二つの軍は互いの戦力を一箇所に集めて、？の城を入れると文字通り三角形を描く形で布陣していた。向こうの連中にとっては挟み撃ちを食らわないようにしている（こっちを挟み撃ちしようとしなのは、そういう作戦を取るための信頼も残っているわけもない筈だ）

だけなのだろうが、こつちにとっては包囲がなくなったので、上手く行けば早馬で外と連絡が付くようになった。尤も、足の遅い荷駄とかでの物資の輸送とかは流石に無理みただが。

「失礼します、麗h、・・・袁本初様から書簡が届いたと言うのは本当ですか!？」

その日、配置こそすれども結局兵を交えることなく日が落ち、夜襲でもない限りその日の軍事行動はもうないといえる時間、つまりは夕飯時の後だが、城外から袁家の使者が駆け込んできた、と言う連絡が部屋で休んでいたあたしに伝えられた。

その話を聞いたあたしはすぐさま使者が向かったと言う刺史府に向かった。

「おお、張將軍。これはこれは」

刺史府の謁見の間に通され、中央の大きな椅子に座った細身の男、冀州刺史韓馥殿が手に木簡を広げていた。椅子への道の両脇には数人の官僚が立っている。所々、立ち位置に空きがあるのはまだ出揃っていないと言うことだろう。まあ彼らにとっても急なことだったのだろう。

ついでに目線だけで周囲を見回してみたが、孔明と土元はまだ来ていなかった。まあ、時間を置けば来るだろう。

「先ほど渤海から使者が参りましてな。援軍が既に渤海を出てこちらに向かっているそうです」

片膝を付き、軍礼を取ったあたしに韓馥殿は嬉しそうに応えた。木簡には一万余の援軍を送った旨が書かれているらしい。これで漸く賊どもを追い払えると喜びを隠さない。

まあ、元々敵の兵糧切れか援軍の到来を待つ消極的な策だった訳だが、援軍が来るのなら勝ちが大分早くなる。

兵と一緒に兵糧も少くない量が蘆植の軍に持っていかれたが、そこは流石に河北最大の都市である。駐留している兵力が減ったのも幸いして、一部を城内の民に回しても結構保つ計算になる。

対して黄巾の軍はあたしが知る範囲では一度も補給が来ていない。まあ、頭数では官軍を圧倒するほどでありながら、まだ大きな拠点を得ていない彼らに十分な補給を維持できるとは考えにくい。

その後、連絡を受けて来た孔明と士元も交えて、今後の作戦行動に関する話し合いが行われた。優秀な武将などが軒並み蘆植の軍に参加している現状と、今までの戦の戦果から、あたしと孔明と士元に一時的に城の軍事全権が委譲されることになった。

まあ、本来の状態がどの程度のものかは知らんが、武の方面の人材不足は結構深刻だし仕様がなのだろうか。所詮盗賊団を大規模にしただけのもの、と言う侮りが有ったのかね？

最終的には増援に合わせて打って出る、詳細は状況を見て臨機

応変に、と言う要するに何も決まってるのとは大差ない結論で落ち着いた。ちゃんとした連絡が取れていない現状致し方あるまい。まあ、今は休んでもらってる、使者に來た兵士を呼んで援軍の詳しい情報を聞いて上手く連絡を取れないか尋ねてみることも必要か。

次の日、使者の兵も呼び出して再度の作戦会議が行われた。

使者の言によればこつちに向かってくる援軍を率いているのは袁家の二枚看板の片割れ、顔良將軍とのことだった。

そつか、斗詩が来るのか・・・そついやもう何年会ってないかっただか。

「あの、上手くこつちから援軍に連絡できないでしょうか？」

孔明が使者の兵士に問いかける。行軍の予定進路は把握しているので、その予定に狂いがなければ可能だと応えた。

そう言う訳で使者の兵士には一度増援の軍に戻ってもらい、増援が到着する日までにこつちも打って出る準備を整える。敵の片方を叩いてもらい、？の部隊でもう片方を足止め、最終的に挟撃に持って行くことで決定。早速出発してもらった。

その後使者に二回ほど往復してもらい、ある程度まで細かい段

取りを決めることが出来た。そして数日間、小競り合いと言う程度の戦闘を二回挟んで予定の日になった。

「そんじゃ、いい加減連中を追い返さなきゃな」

日が落ちた頃、あたしは馬を駆り準備を終えた軍勢を背に城門に向かう。今回は本格的な戦闘になるため、以前のような小規模な騎馬隊ではなく、十分な休息を与えた歩兵を含む八千の軍勢が用意された。

ちなみに、もう連中にあたしの事を隠しておく必要もないのでいつもの外套の上に軽装の鎧のスタイルに戻している。フル装備の鎧兜は動き辛くてかなわん。

「えと、張？さん、これで最後ですから、頑張ってください」

「ぜ、絶対返ってきてくださいね」

横にやってきた孔明、土元の順にそんな事を言われた。

「分ってるって。もう後一歩ってところだしな。ここで死んじや堪らんよ」

そう言つて手を振る。と言うかここで死んじまつちやすつげえ割に合わないつて。目の前にまで来ている筈の親友とだつて久しぶりに話したいこと、聞きたいことが山ほどあるからな。

「そんじゃ、今日で総仕上げだ。上手く行けば今日の晩は夜通し酒飲んで明日は昼まで眠れるぞ。そのためにもここで負けられん！ここで死ぬ馬鹿はいないぞ！」

返つてくる雄叫びに硬さが無い。この十日あまり、小競り合いだけとは言え、こちらの思惑通りに続いた戦は僅かな弛緩と共に確かな自信を兵士たちに与えていた。まあ弛緩と言つても、今までに得てきた自信がら来る士気の高さから見れば気にするほどのものではないだろう。

「張將軍！北から灯りが近づいています！」

城壁の上の見張りが叫ぶ。来たか。

「門を開け！出るぞ！」

あの子の展開は一方的だった。正直あつが驚くほどに。この数日、三つ巴の対峙に疲れ果てていたらしい黄巾の軍は、斗詩の率いてきた増援の登場でいとも簡単に瓦解した。互いに攻撃する軍勢を分けて攻撃したが、当然さしたる抵抗もなかった。敵を追い払い、こつちも損害らしい損害もなかった。唯一不足を言うなら、あまりに早く瓦解し、且つ夜の闇のせいで少くない敵の逃亡を許したとだろう。

だがそんなことは一ヶ月近く続いた戦を生き抜いた兵士たちにとってはどうでもいいことで。

「將軍様方！飲んでますか〜！」

「あ〜、飲んでますよ・・・はは・・・」

敵を追い散らし、援軍を迎え入れての祝宴が始まったわけだ。宴の主役になつてしまったあつや孔明、士元、そしてやつてきてくれた斗詩の回りには常に酔っ払った兵士が酒を勧めに来て大変だった。さっきまであつしの傍ではわわあわわしていた孔明も士元も酔っ払いの波に飲まれてどこかに消えてしまつていた。

ちゃんとした宴は後日に準備しているらしいが、今は兵舎の外で行われているどんちゃん騒ぎに参加していた。

そしてあたしは寄ってくる酔っ払いを何とかかわしながら人を探していた。そして見つけた黒いおかつぱ頭。

「斗詩！」

あたしは跳び上がって手を振った。それに気付いてくれた斗詩は、周りの人をよけながら小走りで近づいてくる。

「斗詩！久しぶり！」

「うん！黒羽ちゃん！」

あたしは半ば跳びつくように抱きついた。それを受け止めて微動だにしない斗詩。

「何年ぶりだ？もう！こんな大きくなっちゃって。相変わらずバカ力だしよ！」

「馬鹿力は言いすぎだよ。それに黒羽ちゃんも私と対して違うわないよ。それにお互いもう大人だよ？」

斗詩があたしを下ろすとあたしらは改めて抱きしめ合う。

「心配してたんだからね？任務で渤海にいけたのに、黒羽ちゃん旅に出たって言うし、こんな時期に」

「何泣いてんの。あたしがそうそうくたばるかよ」

「泣いてるのは黒羽ちゃんもじゃない。それに最後に会った時、黒羽ちゃん思いっきり大泣きしてたじゃない」

「なっ、ありやしょうがないだろ、時期が時期だったんだから」

湧き上がる感情でが抑えられず目元が熱い。

「ああ！もう！兎に角飲もう！もうなんか気分が可笑しくなってるから！」

もうテンションがハイになってる。自分でももう何をどうしたのか分らん！

「うおし！その酔っ払い共！その酒、瓶ごと寄越せ！」

「おお！将軍様が酒を所望だ野郎共！」

叫ぶと酔っ払い共がまるで祭りの神輿のように瓶を担いでくる。
えんやえんやと皆ノリがいい。

「ちょ、ちょっと黒羽ちゃん、そんなにお酒どっするの？」

「飲む！浴びるように飲む！」

やつべ、さっきまでに飲んだ酒が今頃効いたかな、すっげえ
楽しい！

「おお！将軍様の言葉を野郎共聞いたか！」

ノリのいい一人が叫ぶ。その後には威勢のいい歓声がそれに応え
る。そして瓶の酒が丸ごとあたしらにぶっ掛けられる。

「ぎゃあっ！」

「おう！？」

文字通り酒を浴びたあたしら。斗詩は目をぱちくりさせて呆然としてゐる。

「おめえら、やってくれたな・・・」

それを見て心の底から湧き上がる衝動・・・

「上等じゃあ！酒全部ぶっ掛けて来い！一滴残らず飲み乾しちやらあー！」

「ちよっ、黒羽ちゃああん！」

後から振り返ると恥ずかしいほどに暴走していた。

「いっつて。頭マジいっつて」

翌日、目が覚めたら見知らぬ床の上だった。それにしてもアツタマいっつて。

「あ、黒羽ちゃんやつと起きた」

「んあ、斗詩？」

寝起きではつきりしない意識を起こそうと頭を振ってみたが、逆に頭の痛みが酷くなって思わず床に転がった。

「もう、飲み過ぎだよ。黒羽ちゃんが潰れた後大変だったんだよ？はい、黒羽ちゃんの部屋聞いて服持ってきたから」

斗詩は寝ているあたしの横に服を置く。あたしがそれに着替えている間、斗詩はもう用意が出来ていたのだろう、部屋の机に朝食の点心を並べていく。頭がくらくらするあたしはちよつと外に出て顔を洗ってくる。

「で、取り敢えず斗詩たちの予定ってどうなってるんだ？」

斗詩と一緒に朝食をとりながら、斗詩に今後の予定を聞く。一応フリーマンのあたしと違って斗詩たちは正規に派遣された援軍だからな。そこら辺どうするんだろ？渤海や、司馬姉妹らのことも気になるが、後回しにすべきかな。

「えとね、援軍の半数はこっちに残して黒羽ちゃん連れて返れ
って、姫様に言われてるんだ」

斗詩が言うに、流石に今回の動乱の規模が凄まじいものになっ
ているので、麗羽様と猪々子も一時渤海に帰還しているそうだ。久
しぶりの再開に心躍らせて着いてみれば、あたしは旅に出ていた訳
で。連絡とろうにも携帯電話のような通信機器のないこの時代に、
どう動くかも分らない相手に連絡を入れるのは至難な訳だから色々
心配かけてたらしい。

「やゝ、悪いね、心配かけて」

「仕様がないう。元皓さんの指示でしょ？でも早く戻らないと
元皓さんも姫様のお小言でちよつと参ってるみたいだったから」

兎に角、斗詩たちが韓馥殿たちと色々話を済ませた後、斗詩た
ちと一緒に渤海へ戻ることになりそうだ。

「そか。じゃあ、あの二人をどうするかな」

渤海に帰ること自体に異論はないので、孔明と士元が問題にな
る。誘ってこっちに来てくれると有り難い。あたしが旅に出ている
間に有力な新人でも入っていたのならともかく、司馬姉妹が発展途

上な今現在では戦場での最高知力があたしと言う惨劇に見舞われかねない。

自分より頭がいい奴がチームとかにいと頼もしく感じるしさ。それに司馬姉妹にはいい刺激になるんじゃないかな？いい競争相手が出来て。あたしもサポートすれば劇的な進歩が望めるかも知れない。

「あの二人って・・・ああ、一緒に協力してもらってたって言う二人？」

そう言えば斗詩には詳しい説明はしてなかったな。と言うか戦場で合流して、城に戻る道中では喋る機会が見つからず、帰還して直ぐに韓馥殿との面会で、結局例の宴会まで真っ当に話せなかったからな。この機にあたしは今までの経緯を説明する。

「うーん、私からは何とも言えないかな」

「あれ？何で？」

孔明と土元を勧誘する事を提案したら、斗詩からそんな返答が返って来た。てっきり賛成してくれると思ったんだが。

「うーん、これ以上問題を抱えたくないと言うか、あの二人を

刺激したくないと言うか、ただでさえ文ちゃんと・・・」

取り敢えず理由を尋ねてみたら、小さい声で何か呟いたが、よく聞こえなかった。

まあ、取り敢えず消極的な反対と言ったところか。それならやつぱり手放すには惜しいな、あの二人。これから韓馥殿たちに会いに行かなきゃならんのはあたしも孔明たちも一緒だし、後で勧誘してみよう。

その後、刺史府にて？の今後の防備に関しての話になった。大まかに述べると次のような感じで決まった。

？の今後の防備は今回援軍にきた部隊の半数と、指揮官として通用する将を数人残しておくことになった。

次にあたしだが、当然とも言わなければならない。一緒に麗羽様がいる渤海に帰還することになった。同時に、本来ただの旅人である孔明、土元も自分たちの旅に戻るようになった。

そしてあたしも孔明たちも自分たちの荷物を纏めるくらいしかやることなくなった頃、まだ引き継ぎとかの仕事がある斗詩と分かれて孔明たちと食事に出かけた。ちょっとした談笑交じりの食事の後、あたしは本題を切り出した。

「袁紹さんのところに、ですか・・・」

「ああ、君らが良ければね。あたしとしては君らの力が惜しいんだよ」

皇帝筋を名乗って皇帝を僭称した野郎（男が分らんが）と天の御使い（イエス的な何かか？）なんぞと名乗る怪しげなやつ（の元）には行って欲しくない、と言うのがあたしの心情だ。

「えと、お誘いは嬉しいですけど、私たち、ここまで来て・・・」

「そ、その、最初の目的を、と、途中で諦めたくないと言いますか・・・」

「あゝ、無理にいつつもりはないから。気が向かないなら仕方ないし、確かに最初の目的をほっぽり出すつても良くないか・・・」

もうちょっと押していくつもりだったが、二人の本当に申し訳ななさそうな表情を見せられてそれも出来なかった。

結局孔明たちの勧誘に失敗してその日は自分の部屋に戻った。
あたしは斗詩たちの準備が終わるまでこの城から動けないけど、あ
の二人どうするかな。

楽観的な予想を立てるなら、彼女らが劉備とのパイプになって、
今後何かしら役に立ってくれるかもしれない。だがもし劉備が天下
を狙うような野心を持っているなら、彼女らの頭脳は脅威以外の何
ものでもない。どっちにしても過程の話とは言え、正直後者は想像
したくもない。

この場合最も安全牌な選択肢は・・・殺すしか、ないのかねえ。
なんかすっぱえ気が重くなった気がした。

「おい、黒羽ちゃんいる？」

嫌な気分になったから床に寝転がっていたら、斗詩が部屋にや
ってきた。

「ん？どうした」

床から起き上がって聞いてみる。斗詩は普段着に着替えていた。

「今日はもう仕事がないから一緒に買い物行かない？姫様や文
ちゃんにお土産買いたいし」

「そっか、お土産か。考えてなかったわ。うしっ、付き合っわ」

あたしは嫌な思考を無理矢理かき消した。

第十六回 身内にとことん甘い親戚って偶にいない？

「なぐにやってんのかなぐ、あたし」

馬の首に凭れ掛かるようにして、黒羽ちゃんは呟いた。その表情は見えないけど、私の表情は多分苦笑いだと思う。

「その内慣れるよ」

私たちは？を離れ、渤海に戻る道中だった。黒羽ちゃんと一緒にいた二人の女の子と別れてから暫くして、黒羽ちゃんはずっとこんな調子だった。

その後ろには五千ちよつとの南皮からの援兵。その殆どが南皮で行われた民屯で自分の土地を手に入れた人たちの次男三男とかだった。そして南皮の屯田を取り仕切ってる司馬姉妹が、その発案者の黒羽ちゃんの事を積極的に喧伝してたから、なんと言うか憧れと尊敬の入り混じった視線が黒羽ちゃんに集まっている。

・・・あれが張？様か・・・

・・・俺らん家の土地ってあの人が・・・

・・・文官なのに黄巾の大軍と戦って・・・

・・・有り難や、有り難や・・・

妙にみんなの士気が高いと思ったけど、兵士の殆どが志願兵だからって訳だけじゃなかったみたいだね。あの姉妹が妙に色々吹き込んでたようだったし。

「いや、流石に土地公（中国の道祖神みたいなもの）みたく拝まれるのは慣れる気がしないし、慣れたら駄目な気がする。つうかそれはいいんだよ」

黒羽ちゃんは一旦起き上がってちらりと後ろの軍勢に目を向ける。溜め息を一つ吐くとまた馬の首に凭れ掛かる。馬が歩きにくそうだよ、黒羽ちゃん。

「でも、だったら何に悩んでるの？」

「何でだろくな？」

そう言っつて黒羽ちゃんはもう一つ、溜め息を吐いた。

将来的に敵味方どちらになるか分らないあの二人に対して自分が、何故殺さなかつたのだろうか。

あたしらが渤海に引き上げると、時を合わせて彼女らも？を出ることになった。そのときに別れの挨拶を交わすことになった。その際、あたしは女の子二人の旅はやはり危ないと、護衛の兵を貸す事を提案した。それに関して斗詩の了解も得ることが出来た。

「そんな、色々助けていただいたのにそこまで・・・」

「他人の好意は受けるよ。こっちだつて君らには助けられた立場だ」

無論、純粹な好意ではない。色々考えた結果、あたしは未来の禍根に育ちかねない芽を摘むことにした。よって、適当なところで二人を始末するように命令するつもりでいた。

そのため、護衛の隊長格の男に声をかけた丁度その時だった。

「え、えと、張？さん！」

「そ、そによ、お願いが……」

話をする前だったので、兵士に待ってもらって二人の話を聞くことにした。

「えと、ちょ、張？さんに、その、私たちの真名を預けたいんです」

そう言ったのは土元だった。その横で孔明も頷いている。ふむ？

「唐突だね。や、それだけ信頼されているってのは嬉しいけど、どうして？」

勧誘を受ける気が有るのなら分るが、それを断られたから、あ

たしらの関係は最早そこまで進行させるべきではないだろう。そういう理屈じゃないのだろうか？

「その、張？さんが居なければ、もしかしたらここを出れなかったかも知れません。私たちが無事にここに居られるのは、半分は張？さんのおかげだと思っんです」

「それに、一緒に戦って色々経験が詰めました。そして、教わったものもありました」

孔明の言葉に土元が続く。

「それに張？さんの勇氣には感服しました。もし張？さんが直接敵陣に乗り込んだりしなければ、今回の策、実行は難しかったでしょう。そして一緒に戦ってきて思ったんです。貴女に真名を預けたいと」

孔明と土元が深々と頭を下げる。えと、どうしよう？ちっちゃい子にこんなこと言われちゃったよ。取り敢えずどうすればいいのかわらなくなったので斗詩に目を向ける。斗詩はなんかこう、いいもん見た、的な顔になっていた。こういう勝手に感動モードに入った人間は当てにならない。早々に見切りをつけてどうするか考えなくてはい。

「二人とも顔を上げてくれ。その、な。あたしでいいなら二人の真名を貰わせてもらうから」

後から考えてみれば、テンパっていたとは言え、簡単に他人の真名を受け取るなどと判断したのは配慮の足りない行動だった。だがこの時点でそこまで思考が行き着くほどの冷静さはあたしにはなかった。

「あ、はい！ありがとうございます！……はわわ。噛んじやった」

「あ、ありがとうございます」

顔を上げた二人の顔に浮かぶ嬉しそうな表情にちょっと罪悪感が生まれる。

「では改めて名乗らせていただきます。諸葛亮、字は孔明、真名は朱里です」

「私の姓は鳳、名は統、字は士元、真名は雛里です」

再び深く頭を下げ、例を取る二人にこっちも合わせる。

「ならあたしも真名を還させてもらいます。張？、字は雋父、真名は黒羽と申します」

こうしてあたしらは互いの真名を交換するに至った。その後、さつき呼び止めた護衛の兵がさつきの話を聞きに来たが、殺せと命じようとした時、何故か裏亞と裏禍が脳裏を過ぎった。結局彼には絶対無事に劉備の元に送り届けるとしか言えなかった。それどころかわざわざ二人を呼び止めて、劉備への紹介状まで出してしまったのだから頭が痛い。

ホント何しちゃってんの？あたし。めっちゃ涙目ですよ。つか今まで散々殺しをやってきてなんでこんな大事な時にこうなっちゃうのかねえ。

「もう、黒羽ちゃん、何時までもそうしていると皆心配しちゃうよっ」

ぶうつと頬を脹らませる斗詩。さつきからの外れな慰めをかけてきてたけど、こいつが今の悩みを理解することはないんだろうな。ここ数日の付き合いで知ったが、ほんと以前と変わらず良い娘なんだよな。暗殺なんて考え、頭を掠めることもないんだろうな。って感じで。

だがまあ、過ぎた事をグダグダ悩むのもまあ確かに不毛だよな。頭の痛い問題は取り敢えず脳の奥の方に追いやって考えないことにした。

「ところでさ、斗詩。あたしが？に押し込まれてた間、外はど
うなってたんだ？いまいち今の情勢の情報が入ってこなかったから
さ」

兎に角頭を使う話題がいいだろうと思ひ、斗詩に訪ねる。

「ん？いいよ。何が知りたい？」

そう言つて聞くべきはまあ、将来的に色々大物になっている筈
の連中だろうな。

先ずはここ冀州。今回の黄巾討伐で、麗羽さまが自ら帰還して
指揮を執つたそう。尤も、陣頭に立っていたけど、実務はここ最
近体の調子が良いらしい沮授さんと、いつの間にか仕官していた審
配さん、都で拾つてきたらしい許攸に任せていたそうだが。まあ、
餅は餅屋だし、演義でのイメージはともかくこいつら実力はある面
々なんだよな。この参謀陣と、前線は斗詩と猪々子が暴れる。名前
を出すまでもない、というか史書にも個別の伝を立ててもらえない
ようなのに優秀な連中が多いんだよな、うち。まあ、魏が蜀と呉に
大きく差をつけた理由ってこういうレベルでの人材の層の差がも
大きかったらしい。

結局蘆植の軍のこともあり、分散していた黄巾軍を難なく撃破
したそう。まあ、正直この時期に人材の質と量で袁家と並べるの
は曹操でも無理だろ、時期的に。

で、その曹操のことだが、どうやら麗羽様の手紙に以前から出ていた華琳って人が曹操で正解だったらしい。この人は管轄である陳留周辺の黄巾賊を精力的に攻撃しているという。時の周辺の城の救援要請にも応えるなど、一軍で出せる程度の戦力で恐ろしいほどの戦果を挙げているらしい。

次に気になったのが劉備だが、斗詩が知った時点の情報だとまだ公孫贇の下についているらしい。それまでも結構戦功も立てているらしいし、世論も味方につけていると言う。まあ、自分らを守ってくれて、且つ今のところこれといって失策もない。後は個人的な好き嫌いしか嫌う理由はないな、今のところは。ついでに劉備もやっぱり女らしい。

で、ここで一番の問題は「天の御使い様」なんだが、これと言って目ぼしい情報はなかった。見たこともない奇妙な衣服を纏った男、と言うあまり役に立ちそうにない情報くらいだった。異民族かね？幽州に近くて、漢王朝と交流が少ない異民族及び国は・・・倭（日本）か？朝鮮系はそれなりに交流がある筈だし。

他のご近所さんは全体的に何とか踏みとどまっている、と言ったところか。例えば大した戦力がない城でも、近くにチート級戦闘力を持った連中がいるから割と助けて貰えるようだ。

ただこれといった大物がいない青州と、意外にも并州が苦戦していると言う。

青州は仕方がないとして、并州の苦戦の要因は割と納得のいくものだった。対烏丸で活躍していた当時并州刺史の丁原と、その部下たちである呂布と張遼が中央に転属し、人材的な空白が発生して

いると言つことだそうだ。成る程、あの面々の穴を埋められる人材がそうそういて堪るか。

と、まあご近所連中はこんなもんである。他にも色々気になる連中はいるが、斗詩が把握している情報はこのくらいだった。

「って、ことは暫くは付近の城の救援が主な仕事になるか」

「多分ね。でも黒羽ちゃんはどうなんだろう？ずっと田豊様の弟子っていうだけだから、黒羽ちゃんの立場って結構曖昧なんだよね」

あれ、そうだったの？てつきり元皓様が適当なポジションにつけてくれたのかと思つてたよ。

「だから殆どのお百姓さん、黒羽ちゃんのこと文官だつて思つてるみたい」

おいおい、一応賊退治とかやってたぞ？あたし。それでも武将認識されてないってどんだけ知名度低かったんだよあたし。そりゃ、お手伝い程度の仕事ばっかだったかもだけどさ。

「んで、私事だけどさ、みんなどうしてる？麗羽様たちとか、家の妹らとか」

「あ、黒羽ちゃんほんとにあの二人を妹にしたんだ」

「やっぱり会ってたのか。まあ、どっちも長らく会ってないからな」

どっちのことも気になると言うのが正直なところか。麗羽様や猪々子たちと最後に会ったのは父上の葬式の時の筈だが、色々精神的に参っていたのだろう、殆ど記憶がないのだ。だから時折手紙が届いていたとは言え、あたしの中の麗羽様は未だあの誇り高い少女であり、猪々子は気弱な少女のままなのだ。だから今の彼女たちと再会するのが楽しみであり、同時にある意味怖くもある。・・・斗詩は殆ど変わってなくて安心したが。

それに裏亞と裏禍の二人のこともある。今まで元皓様の屋敷ではあたし以外に心を開いてくれなかった二人である。あたしがいない間どうしているのか、何か有った時に助けてくれる人はいるのか、あの格好のせいで虐められていないか、双子であるのが原因でハブられたりとか・・・不安は尽きないのだ。

「ふ〜ん、みんなの事、知りたい？」

「そりゃな、あたしにとつちや大事な人たちだから」

そう、今のあたしにとって、きつと一番大切なもの。だからま

あ、気にならない訳がない。

「じゃ、教えてあげない」

「え、なんで？」

そこはお色々語りし出してくれるところじゃないの？

「私たちばかりやきもきしてたんじゃずるいじゃない。ちょっとは意地悪しても罰は当たらないと思うな」

そう言っつて斗詩は可愛らしく舌を出す。え、別にあたしが進んで心配かけるような行動とってた訳じゃないぞ。この旅だって元皓様の命令だし。

「ちょっと、斗詩、そりゃないって。あたしが何かした訳じゃないだろ？」

「それが余計に気に入らないの」

斗詩はそれだけ言っつて、結局渤海に着くまで皆の事を話してくれなかった。

「ですから！貴女のような、脳漿の代わりに筋肉が詰まっ
てい
そんな人間はお姉様の妹に相応しくない！と裏禍は考えます！」

「そもそもお姉様の傍に何年もいなかったような脳筋女がお姉
様の妹と認められる訳がない！と裏亞は続きます！」

「うっさい！そもそもアタイは十年以上も前からアネキをアネ
キって呼んでんだ！あんたたちみたいなぼつと出にとやかく言われ
る筋合いはないんだっての！」

黄巾賊の討伐のために太守を拜命している渤海に帰還してもう
二ヶ月近く過ぎています。久方ぶりにご無沙汰していた友人方に会
えると思っていたというのに、一番長く会っていない友人は旅に出
ていて未だ会えておりません。

やっと消息を掴んだのは一月ほど前、黒羽さん自身が書いた手
紙が届けられた時でしたわ。急いで救援を手配して斗詩さんに向か

つてもらいましたけど、今考えればあの人選は失敗だったかもしねませんわ。

抑える人がいないと暴走しやすい猪々子さんよりは指揮官に向くと思つての人事でしたが、結果この目の前で行われている、黒羽さんと言つ姉の争奪戦を仲裁する人がいなくなつてしまいましたわ。

それはそうと、斗詩さんと黒羽さんたちが既に帰路についているという連絡も着ていますので、もうそろそろ渤海についても良いと思うのですが。ついでにここ数日の姉争奪戦が寄り激しくなつておりますわね。猪々子は表向きは快活な女の子ですが本質は甘えたがりといつていいでしょう。だから黒羽さんが戻つてきた際に思いつ切り甘える為に決着をつけて置きたいのですしょう。

まあ、斗詩がそうなつたの昔の性格もあるでしょうが、半分くらいは甘えてくる相手を底無しに甘えさせる黒羽さんにも問題があると思います。本人にその自覚はないようでしょうけど。お陰で私も自重するのが大変でしたわ。

そして、顔を隠している司馬姉妹。そう言えば手紙で知っていましたが、斗詩さんや猪々子さんには伝えるのを忘れていましたわね。お陰で猪々子さんとあの姉妹の出会いはとんだものになつてしまいました。

私は彼女たちが名門司馬家のご息女であり、元皓さんのお弟子で黒羽さんの妹としか知りません。顔を隠す理由についても気にはなりますが、以前手紙でそこには触れないように頼まれていますから聞きませんが。

「二人ともいい加減になさい。折角のお菓子に埃がまっつてしま
いますわ。猪々子さんも年下にむきになるものではありませんわよ
？」

いい加減鬱陶しく感じ、三人に声をかけました。元皓さんが仰
るには、この姉妹を素直に従えられるのは黒羽さんだけらしいです
が、猪々子さんはまだ私の言うことに従ってくれますから。

「え、けど姫さま」

猪々子さんは不満を隠すこともせずはこちらを見つめてきます。
どうにも黒羽さんや斗詩さんのことになるのと我慢が効きませんのね。
そして同様に司馬のご姉妹も同様。自分たちと同様に黒羽さんを姉
と慕う猪々子さんに敵意を微塵も隠しません。

「三人とも、です。報告によればもういつ黒羽さんたちが帰還
してもいい頃なのですよ？その時貴女方がいがみ合っているのを見
たら黒羽さんは悲しみますわよ。身内には底無しに優しい方でした
から。仲良くしろとは言いませんが、せめて表立って争うのはよろ
しくなくてですわよ？」

私たちがまだ幼い時からまるで姉のように接して来ていたあの
人なら、身内が争うのを見たくない筈ですわ。そしてそれは三人も
一応は理解しているようで、澁々ながら其々の席に戻る。

猪々子さんは乱暴にお菓子を鷲掴んで口に入れ、仲達さんと伯達さんはお茶を口に運びます。

「それにしても美味しいですね、このちっちゃいお菓子」

そう言っつて猪々子さんは小皿の上のお菓子を一つつまんで眼前に持って行きます。

「それはお姉様が考え出したお菓子なのだから当然のことなのです、と裏禍は自慢げに応えます」

「そして裏亞たちは何年も昔からお姉さま自ら作ってくださいました物を食べていたのです、と裏亞も自慢します」

自分たちが優位に立ったのが分ったからか、お二人がない胸を張り、猪々子さんが本当に悔しそうに表情を歪めます。どうやら私一人ではこの場を収めることは無理のようですね。私は諦めの溜め息を吐くとお茶を一口啜りました。

だからこの時駆け込んできた正南（審配の字）さんが持ってきた言葉はある意味救いでしたわ。

「本初様、城門の見張りからお味方の軍が見えたとのこと」

なにせその声も終わらぬうちに三人ともこの場からいなくなっているのですから。

「やれやれ、ですわ。まあ彼女たちはよいでしょう。正南さん、私たちはちゃんとした出迎えの準備をしなければなりません。元皓さんたちと統軍府に伝言を送ってくださいな。それで何をするべきか伝わる筈ですわ」

「はいです〜」

どこか気の抜けた返答を反してすぐさままた駆け出しました。のんびりとした雰囲気似合わず、行動は素早いのですよね、あの方。

さて、私も着替えねばなりませんね。友人に会うのにしては些か堅苦しいとは思いますが、私も皆も立場と言うものがありますので。

結局私が供の方たちと出迎えの行列を従えて城門に着いた時には、例の三人に抱きつかれ地に伏し目を回す女性と、それを見てあたたたしている斗詩さんと、その後ろに呆然としながら居並ぶ軍勢でした。

流石に私でも軽く戸惑ってしまいました。目を回していた女性が三人を纏わりつかせたまま立ち上がりました。その容姿を見て私は、きつと猪々子さんもそうであったように、確信いたしました。

「お帰りなさいませ。お久しぶりですわね、黒羽さん」

この時初めて私に気が付いたらしい黒羽さんははにかんだような笑みを浮かべました。

「ええと、その、お久しぶりです、麗羽様。ただいま戻りました」

これが私と、どこか年齢以上に大人びた親友との再会でした。

第十七回 新しいものが認められ難いのは実績不足が一番大きいと思う

渤海に帰還してから数日、正式に麗羽様の将としての地位を授けられた。一応武官と正式に言うことになったので訓練とかの仕事も増えたが、メインはやはり屯田だった。

正直政務の方ではそれほど能力が有る訳ではないが、司馬姉妹が手伝つてくれるお陰で随分助かっている。気が付いたらなかああたしの直属の部下みたいな扱いになっていたが、本人たちが希望したのを元皓様が了承したらしい。個人的にはもったいない気がするが、あたし自身助かつてるし、彼女らが軍師として独り立ちできる頃まではこのままでもいいよと思う。

それはそうと麗羽様に自分の部隊を作るように言われた。通常軍は必要に応じてその時々で編成される訳だが、麗羽様個人として信頼できる相手に自由に動かせる部隊を作り、預けると言う事を始めていた。

これも私兵を雇ったときと同じで有事の際の即応性を重視してのものである。ただ、こういう恒常的に個人が率いる戦力は、いざと言う時に通常の指揮系統では制御できなくなるどころか裏切りの可能性も大きく引き上げる。基本的に行動の許可を事後承諾でとることが多いその性質のためもあり、本当に信頼できる相手を選ばなければならぬのだ。

この専属部隊を持つのは今のところ斗詩と猪々子の二人で、二人とも騎兵を五百ずつと言う編成である。金のかかる、且つ使い方が嵌れば同数の歩兵の二十、三十倍の戦力に相当する騎兵をこの数は実はかなりの大盤振る舞いだったりする。

北方で異民族相手に慣らした二人と違い、それほど騎馬の扱いはうまくない。乗ってる馬に殆ど負担が掛からないようにあんなのでかい武器を振り回せるってのは正直反則だと思う。まあ、そんな理由で普通に歩兵で申請したらいきなり二千の兵を割り当てられた。それでも騎兵五百より維持費が安いのがから馬にどれほどコストが掛かるか分るだろう。

「それにしても兵士さんたちに土木作業をやらせようと言うのは奇妙な発想ですね」

「そうかい？ 砦の建設や設営、罾の設置、結構機会は多いと思うけど」

城外でうちの隊の兵士が他の部隊から借りてきたベテラン兵士たちから素早い設営の指導を受けている中、あたしは渤海の兵器製造を担当している鍛冶屋の工房を進んでいた。多くの武器を造るだけあって大規模、且つ人も多い中を通りながら横を付いてくる長身のショートカットで糸目の女性の言葉に答える。

彼女の名は審配、あたしが旅に出ていた頃に麗羽様の参謀の一角に入っていた人物である。事守りの戦では参謀陣随一と言われ、

沮授の兄ちゃんをも上回るそう。時にあたしはこの人と、戻ってきた日に会った許攸、うちのプティスールたち、朱里と雛里を思い出して思った。この時代の女軍師連中は知力と乳が反比例するのだろうか、と。

ちなみにあたしの後ろには、黙っているが司馬姉妹がそつと付いて来ている。

「罨や設営はともかく、皆は人を雇ってやりますよ。それほど土木作業の技術は必要ないのでは？」

「ついでに治水とかもやって貰う予定で。人夫を雇うのに金も時間も掛かるから。それに戦場で攻城兵器の組み立てや、弩の扱いとか修理とかも覚えて貰わなきゃ」

「雋又さんは職人さんたちの仕事を奪う気ですか？」

言ってることの内容の割にはのほほんとした表情で首を傾げる審配。見た目、胸以外は成熟したお姉さんなのになんで動作や態度がこんなに幼いんだ？この人。

「こつちは緊急時の対策です。臣民の仕事奪ったら後が色々大変ですから」

メインはやっぱり戦争関連の土木作業だからな。この時代のメインに使うのが剣とかそういうのだから塹壕の出番はちょっと減るけど。

まあ、攻める場面での出番は少ないだろうが、そっちは斗詩と猪々子の突破力があるから、こっちは迎撃用の戦力を整えている。

それはともかくとして、目的の場所に着く。そこでは兵士たちを指導する職人たちとは別に、決まった形のパーツに別れている木材を組み立てている職人たちがいる。

「や、親方、様子はどう？」

この、規模の上では攻城と呼んでも差し支えないだろう工房のリーダー格の男に声をかける。

「おや、將軍様方。ええ、まあ、あまり良いとは言えませんな。何しろ私どもも作ったことのない代物ですから」

組み立てられているものは床子弩、弩を大型にした設置型兵器。分りやすく言うと中国版カタパルトと言ったところか。春秋戦国時代に考案され、この時代では槍サイズの矢による反則くさい射程と威力を持っているが、その製作コストと取り扱いの難しさから活躍の場に恵まれなかった兵器である。

「や、仕方ないでしょう。ただでさえあまり見ないものに手を加える訳ですから」

この兵器は基本が弩を大型化したものであるためその連射性に問題がある。まあ、これは弩がベースである限り改善は難しい。連弩の発明はもうちょっと先だった筈だし、あたしは作り方とか知らんし。

だが一番の問題はそこではない。最大の問題はこれが完全な据え置き式兵器だと言うことである。一度セッティングすれば方向を変えすることも難しいし、射角調整による着弾点調整も出来ない。という訳で歯車を組み合わせて回転&射角調整できるように・・・しようとしたけどコスト掛かりすぎそうだし部品の大量化とかで生産性や整備性が凄まじいことになりそうだったので断念。素直に改造した荷駄の二輪車に設置して引っ張っての移動と射角調整を可能にした。二輪車の前後に出っ張りを作り、そこに低い梯子方の部品に引っ掛けたり差し込んだりして角度を安定させようと言う訳である。

見た目ちよつと自走砲的になった訳だが、基本木材なので材料を運んで現地製作が基本になるだろう。極端な話、戦場によっては材料だつて現地調達できる。そういう意味では自動化が進む以前の自走砲と比べ、部隊の機動力に影響を与えにくいことになる。まあ、実物が未完成な現状では所詮理屈でしかないんだが。

「それにしてもよくこんなもん使おうって考えましたね。うちの若い連中なんてこんなものが存在していたことすら知らなかったのが多いってのに」

「まあ、一応軍人ですからね。そういう文献に触れる機会も多
いんですよ」

「でも張將軍、まだ軍務をやるようになったばかりでしょう？
勉強熱心ですな。うちの若いやつらにも見習って欲しいものです」

や、随分前から軍務には参加してましたよ？一年以上も前から。
そんなに存在感なかったですか？あたし。寧ろ渤海の居残り組みで
最強武將張ってましたよ？

まあ、兎に角残念ではあるがこの移動式床子弩は実戦投入どこ
ろか、テストもまだまだ先のことになりそうである。

「まあ、しょうがないですね。あまり急ぎではないのでじつく
りお願いします」

「おう、任せてくださいよ。時間は掛かっちゃまいそうですが、
きっちり仕事はこなしますぜ」

威勢のいい返事を受けてあたしらは工房を後にした。

「という訳で今日一日兵士たちに土いじりさせていたと。軍務を舐めてませんか？」

「いや、舐めてるとかそういうのではなくてですね・・・」

そんな訳で昼に食堂で食事を取ろうとしていたら説教される破目になりました。あいては黒髪のちびっ子眼鏡。うちの双子や朱里、雛里とどっこいの体格なんだが委員長気質なせいか、なんか苦手な感じがするんだよね。

「加奈ちゃん、雫さんも考えがあるようだから、もうちょっと様子を見てみましょうよ」

横から審配が援護してくれるが委員長にはこうかがないようだ・・・。尚審配の真名は八重やえ、あたしは呼ばないけど。

「どんな考えですか！兵士に土木作業の訓練なんて聞いたこともありません！兵士をそんなことに使う前提で訓練なんかしてたら何時まで経っても使い物になりませんよ！」

今あたしを説教しているのは許攸。加奈は許攸の真名だ。あた

しは、審配ともそうだが、それを呼び合う仲ではないが。

「全く、いくら武官としては素人同然とは言え、ここまでふざけた真似をするとは。小お嬢様が勢力つけてきているこの時期に。お嬢様もいくら幼馴染だからと言ってこんな人事を・・・」

許攸の言う小お嬢様とは麗羽様の妹様、袁術さま。字は公路。麗羽様が渤海太守に任じられた少し後、汝南太守に任じられた。その辺りから家臣団の一部の動きが変になってきたらしい。本格的な後継闘争が始まるのは時間の問題だろう。

まあ、渦中のお二人がどう考えているのか分からないから具体的な動きも出来ないが。

ただ、公路様があたしたちにとって危機感を覚えるような存在になっているのは事実だ。

公路様が赴任した汝南は、周陽様が政務の都合で南皮に本拠を移すまで袁家そのものの本拠である汝陽を傘下に置くため、袁家のシンパが未だに多く、それを味方につけることに成功すれば南荊州の広い範囲に影響力を持つことができる。

さらに聞き捨てならない情報。孫策が公路様の勢力化に入ったと言っことだ。

事が事だけに予期はしていた。けどここまでタイムスケジュールにずれがあるとは正直思っていなかった。朱里と雛里のこともあったから可能性として警戒できて然るべきだったのだろうか。

事を大まかに纏めると次の通りである。

あたしが旅に出るよりそれなりに前、涼州の金城で後漢一の反乱プロデューサー韓遂が近所の武威で太守をやっていた義姉妹の馬騰などを誘って反乱の初プロデューサーに挑戦。これを反乱に参加しなかった数少ない近所さん兼上司の涼州刺史董卓がこれを迎え撃つことになった。

序盤こそ馬超をはじめとする勇将を多く揃えている西涼連衝が押していたが、董卓の軍師である賈馱の知略策略と董卓軍、武の柱である華雄の奮闘で戦線が膠着した。事態を重く見た朝廷は、董卓軍の救援要請に対し、当時徐州に駐屯していた孫堅文台の軍勢を派遣する。

初めこそ共闘していた董卓軍と孫堅軍だったが、西涼人を主にする董卓軍と江東人を中心とする孫堅軍の間で何か確執でも起こったのか、この両軍が矛を交える事態になる。涼州連衝にとって絶好のチャンスとなった訳だが、何故かそのどさくさに紛れて馬騰軍が朝廷に投降を申し出る。

この馬騰軍の行動に動揺したのか、西涼連衝の各勢力が次々と降伏、最終的には韓遂軍の投降でこの騒乱は幕を閉じた。

詳細な情報が足りず、ことの因果関係が把握できないせいか、訳の分らないことが幾つもあるが、問題は孫堅が軍勢を率いて徐州に帰還する道中で亡くなったということである。死因については詳しく伝わっておらず憶測が流れているだけだが、兎に角その死がその勢力の崩壊の切欠になったのは間違いないだろう。あとを継ぐことになった孫策伯符にどのような不足があるのかは知らないが、結

果として彼女の勢力はほぼ離散。僅かに残った部下たちを引き連れて公路様の客将（と言っても家来同然の扱いらしい）に収まったそ
うだ。

奇しくもこの頃、荊州刺史劉表が病没。刺史の位が空位となっ
ているが、その座に公路様をつけようとする動きもあると言つ。

兎にも角にも公路様の勢いがえらいことになっているのである。
公路様本人もその気らしいし、麗羽様が態度を決めないからうちの
連中はやきもきしている訳だ。

「えつとですね・・・あたしも一応考えがない訳でなくてです
ね。ちゃんと理由が・・・」

「政務と軍務を一緒に考えないでください！軍略は基本的に根
本が変化しないもの、創造ではなく応用がものを言うのです！土木
を扱う軍勢が入り込む余地がどこにあるというのですか！」

正論である。一度確立された軍略とは基本的に変化しないもの。
軍略を変化させるのは基本的に兵器の進化か、それこそ天才と称さ
れるような人物が以前の軍略を徹底的に叩き潰す等の切欠が必要だ。
そしてこの時代の軍略に土木作業の得意な軍隊は存在しない。だか
らか許攸の言葉は間違っていない。彼女はこの時代の人間だから。
だから説得が難しい訳で。

「お言葉ですがお姉様の軍勢は袁紹様の正式な命令で発足した

ものです、と裏禍は忠告します」

「貴女にはこの件に直接干渉する権限がない事を忘れないで欲しい、と裏亞は続けます」

・・・妹たちよ、援護してくれるのは嬉しいがそこまでバツサリ言うのもどうかと思うよ。喧嘩になるって。

二人の言葉が効いたのか、許攸は言葉に詰まる。でもあたしを睨み付けるのはやめて欲しい。

「ここは食事をする場所じゃ。いい加減にせい」

この険悪な状況に割り込んできたのは老いたる英雄、元皓様だった。あたしじゃどうにもならないこの場の空気をどうにかして下さい。

「む、元皓老・・・ですが・・・」

「加奈ちゃん、もういいでしょ〜?」

「八重は黙っててください!」

それでもしつこく噛み付いてくるか。や、この時代基準ではあたしに非があるんだが。

「雋父の兵のことは儂も聞き及んでおる。まあ、そこまで気にするな。袁家の後継争いで苛立つのは分るが、本初殿が所見を述べてもおらなんだ。急いでも仕方あるまい」

元皓様の言葉に、渋々ながらも頷く許攸。それを見てホッとするしぐさを見せる審配。こういう、場を纏められる人はすごいと思う。

「・・・分りました、慎みます。私はここで失礼させていただきます。八重、行くよ!」

「え、加奈ちゃん、私まだご飯・・・あ、待って、引つ張らないで、」
「ご飯」

やっぱり納得いかないようで、怒りを隠せずに審配を引つ張って出て行ってしまった。

「あゝ、悪いことしちゃいましたかね」

正論を権勢で押し潰した形になっちゃった訳だし。

「致し方有るまい。儂もお主のやっておる事に疑問がない訳ではないのだ。お主を知らぬあの者ではの」

元皓様は髭を擦りながら二人が出て行った出入り口に目をやる。

「だつたら何故ですか？」

疑問に思い、その意図を問う。あたしに味方してくれた理由が分らない。

「まあ、おぬしの人となりは分つておる。半ば儂が育て上げたようなものじゃからの。それにお主の事じゃ、本初様の想いを裏切らんように努力はしておるじゃろ」

その言葉は、一応は認めてもらえていると言つことなのだろうか？

田豊視点

全く、お家の後継争いというのは嫌な時期じゃのう。周陽殿が袁家の家督を引き継ぐ直前と同じ空気じゃわい。

己の信じる者を、利権の絡まる相手を家督に就かせる為にまた陰惨な暗闘が繰り広げられることになるか。

周陽殿のお子は二人ともこの時代には稀な純粹さを持っており、あまりこのような政治の黒い部分には関わってほしくないが、立場からそれも望むべくもないか。何より本初殿はもう政治の暗部を少なからず見ておる。

本初殿の周りに集った友人たちに関してもそうじゃ。袁家という権威に媚び諂うこともなく、まるで普通の村娘のような純朴さを失わずにいる。本初殿を支えてくれる友人としてはこれ以上はないだろう。

一番の気懸かりはやはり弟子たちか。

司馬の双子は存在そのものを忌み嫌われて生きてきた。そのせいか儂又に対し異常と言って良い執着心を持っておる。今は儂又が彼女らの精神を安定させているが、もしそれがなくなったらどうなることか。なまじ末恐ろしい才を持っておるだけにな、このまま伸び続ければ儂の悠に頭の上を行くじやろう。彼女らの心に溜め込んだ歪みが噴出しなことを祈るしかあるまい。

だが一番の気懸かりはやはり儂又か。ある意味で一番壊れてい

るのは彼女かも知れんな。その表裏の激しすぎる人格は時に薄ら寒いものすら感じる時がある。それに彼女は自分の命を軽んじておる節もある。万事に於いて如何に手を尽くしても自信に満ちることのない、ある意味で臆病とも取れる性格の癖に自分の命を危険に晒すことに対しては微塵も途惑わん。今まで出会ってきた者達の中で、見えていて一番不安になるわ。

折角その性を変える為に旅に出してみれば、乱のお陰で早くに戻ってきておった。肝心の戦の理由も本初殿たちの笑顔が見たい、と確かに己が欲なのかも知れぬが結局は他者に依存したものの、性根の部分で変化がない。

全く持つて不安が絶えん。儂も齡が九十を数えるようになった。もう長くないが・・・何の巡り会わせか、まだまだ安心して逝けんわい。

第十八回 食材の価値は文化で変わるがそれは今回どうでもいいのかも知れない

「あら、中々美味しいですね。変な色の麺で不安でしたけど」

「まあ、一応何回か実験しましたし」

この日は暇が出来たので懐かしの味再現実験をやることにした。その際麗羽様と猪々子、裏亞、裏禍に見つかり済し崩し的にちよつとした食事会みたいな感じになってしまった。斗詩だけは部隊の訓練の仕事からまだ戻ってないが。

「久方振りのお姉様の創作料理なのです、と裏禍は喜びを感じます」

「やはり時折これがないと物足りなかったのです、と裏亞は感慨に耽ります」

や、あたしの創作ではないんだけど、まあこの時代にはまだ存在しない料理だしな。あたしも席に着き一口。うん、成功、結構

いける。ただ、予想外に人数が増えたのでちょっと一人当たりの量が減っているけど、まあ今回のもう一つの目的を考えると丁度良かったかも知れない。

「けどアネキ、これって麺にしちゃ随分食感違うんだけど、何でできてんの？」

「確かに初めての食感ですわね」

まあ、そうだろうな。だってあたしが作ったんは麺じゃないし。

「それ、蕎麦を粉にしたやつに小麦粉を混ぜたやつでして」

「「「「ブフウ!」「」」」」

あ、吹いた。まあ、分らんでもないけど、この時代の漢人ならあ、裏亞と裏禍、吹いたのがベールに掛かっている。慌てて水場でスロープを落としに行った。

「ちょ、アネキ、蕎麦!?!んなもん食わせたの!?!」

一番最初に声を上げたのは猪々子だった。驚きの表情でこちら

を見てくる。

この時代の中国に於いて蕎麦は食べ物として認識されていない。基本的に家畜の飼料用に作られるだけで、飢饉でもなければ人が口にすることは殆どない。故にこの時代の人間にとってはあれだ、某表向き警視總監の人風に言えば「お前の料理、豚の餌」なのだ。材料的な意味で。

時に、この時代に麻婆豆腐が有ったりとか、本場のラーメンにこしがあるとか歴史的にありえない筈の料理があったりするが、そこは伝わっていた歴史が間違っていたと言うことにしよう。

「ちよつと、黒羽さん。いくらなんでもこんな下賤なものを食べさせるなんて悪戯が過ぎますわ!」

「ハイ麗羽様まさにそこです!」

あまりにも嬉しい反応に思わず主君を指差してしまったのは後で反省するとして、その言葉こそがこの時代に於いてあたしが蕎麦に求めるものだった。

「そう下賤!だからこれを食べられる形にすることに意味があるんですよ!」

つまりはこう言う事だ。

「つまり市場価値の低い穀物を食べ物として普及させることで我が勢力圏内の食糧事情を改善しようと言う目的である、と裏禍は推測します」

「成功した場合蕎麦の市場価値は高騰するでしょうが全国的に普及することは漢土の風習上非常に長い年月掛かるでしょうから米や麦よりは安いまま、と裏亞は推測します」

・・・あたしの言うことがなくなっちゃったよ。まあ、戻ってきた二人が言っていた通りだ。ちよつとあたしが考えていた範囲よりかなり先まで内容が進んでいるけど。

「・・・あゝ・・・まあ、そんな感じですよ。最近は何巾とかが無茶してくれてますから流民が増えて収入減で支出増ですから」

実際そうでなくても民屯なんていうコストの掛かる政策をやっているのだ。提案者あたしだが。今はまあ一応税収は黒字維持しているが、それはあくまでも袁家の資産を一部提供して貰っているからだ。この時期の戦が終了する頃にはどうなっているかは分からないから、こういう手もありだろう。

「つまり・・・お蕎麦で食費を浮かせ・・・と言うことですか。有効そうだということは分りますが・・・」

ふむ、反応は芳しくないか。

「反対する理由はないでしょ。あたしらと違って、農民は雑穀を口にすることは少なくないでしょうし、兵士の多くは農民の出です。あたしらが普通に蕎麦を食べれば彼らも納得するでしょう。それに事情も説明すればいい。浮いた金は彼らの家族を助けるかもしれないものでもあると。第一何も蕎麦だけを食えという訳でもない。今後の献立に特別安い日が追加されるだけです」

他にも蕎麦の普及は他の穀物の消費を抑える。結果として米、麦の価格高騰に対する押さえにもなる筈だ。これは郡の財政だけでなく、臣民の生活を経済面から援護する結果になると考えたのだ。

「ん〜、さっきは驚いたけど、まあ美味いからいいんじゃない？」

説明していたら先ず賛同してくれたのは猪々子だった。まあ、ここ数日の彼女の食事を見る限り、あまり素材と言うものに頓着してはいないようだし、美味けりゃいいという感じだ。そういつて意味で蕎麦に対する抵抗も少なかったのだろう。

対して裏亞と裏禍は小声で何か呟き始めていた。多分蕎麦の普及に必要な手段とその経過をシミュレートしているのだろう。

あたしは黙って、考える麗羽様の返答を待つ。決定するのは彼女で、あたしは自分の分を超えてはいけない。

「……計画を形として纏めてください。それを見て判断しましょう」

少し間を空けて、麗羽様はそう応えた。

「はい、と言ってもあたしよりこっちの二人の方が頼りになりますけどね、こういうのは」

そう言ってあたしは双子に視線を向ける。

「はい！すぐに蕎麦の市場調査に向かいます！と裏禍は応えま
す」

「手分けしてすぐに終わらせてきます！と裏亞も行ってきました」

「ちよつと量が少なかったからちゃんと外で食って来いよ」

元々呼ぶのは麗羽様だけだったつまりだから四人で二玉分けることになったからな。さて、あたしも片付けてちゃんと飯を食うか。

「あ、じゃあアタイももうすぐ訓練の仕事が入ってるから外で食ってくるよ」

猪々子も出て行くのを見届けてから片付けをはじめた。

「一つ聞きたいんですけど、黒羽さんはこのことで私を説得するために蕎麦で料理を作ったんですの？」

ふと背後から麗羽さまが聞いてきた。あたしは片付けの手を止めて振り返るが、麗羽様に続けて構わないと身振りでも伝えられた。

「ん〜、まあその目的があったのは確かですね。まともに食い物って思われてないものを食えって言われて嫌だなんて思わん訳ないでしょうから」

この時代の人間の感覚で言えば間違いなくゲテモノだった訳だし。あたしだったら絶対嫌がるだろ。

「結果としてちょっと騙すような形になっちゃいましたけどね。まあ、そこら辺は見逃して下さい」

「それは別にどうでもいいんですけどね。あ、お茶いただけます?。」

はい、と返事を返し片付けを中断する。中身の入っている茶壺を探し、茶碗を二つ用意して麗羽様の座る席に向かう。

「こついつ時、普通新しく淹れませんか?。」

「美味しくないんですもん、あたしが淹れても。それにこの方が早いじゃないですか。まあ、一番大事なのはあたしが猫舌ってことなんですけど。」

どこか憂鬱そうな麗羽様にそう応えた。

麗羽視点

まるで子供を見やる親のような顔をしますのね。笑顔で冷めたお茶を淹れる黒羽さんを見ると自分の不甲斐なさを見せ付けられているかのような気分ですわ。本人には微塵の悪気はないのでしようけど。寧ろ親友が国の為に働いているのを見てそのような考え

が浮かぶ自分に嫌悪感が湧きますわ。

「で、何か相談事ですか？」

尋ねるような口調でしたが、その目線は確信を持っておりますわ。

「何故そう思いますの？」

「あたしが死に掛けた頃と同じような顔してましたよ？多分猪々子も気付いてたんじゃないんですかね」

それは相当分り易かったと言うことかしら。

「まあ、あの二人は気付いてなかったようでしたけど。あの二人は麗羽様と会って日が浅いですから」

言いながら淹れたお茶を差し出してきました。次いで自分の分を淹れて席に着きました。

「ただ、あたし相手の相談はあまりお勧めできませんよ？麗羽様の相談に乗れそうなほど人生経験ありませんから」

それは遠まわしに拒絶と言うことかしら。冷めたお茶を啜りながらそんな事をのたまいましたわ。

「相談事は周陽様・・・は洛陽だから元皓様か沮授の兄さんにしてください。あの人たちなら安心です」

これはやつぱり話すな、と言うことかしら。

「でもまあ、愚痴とか聞くだけなら出来ますよ。碌な助言は期待しないでいただけるなら。ついでに言えば必ずしも麗羽様の悩みに共感できるとも限りませんので、そこら辺は悪しからず」

そこまで言ってふと思い出した、と以前作り置きしていたらしい爆米花の皿を台所から探し出して来ました。

「ではお聞きしましょうか。存分に語ってくださいな」

さあ、準備は万端とばかりに笑顔を浮かべる黒羽さんを見て、この甘やかしの姉に色々と溜まったものを吐き出しても良い気になっ
てしまいました。

中央で官職について思い知らされた、権力闘争にかまけ国政を

鑑みない高官。民の財を吸い上げることに腐心する地方官僚。

長い時間を勉学に費やし自信を持つて官職に就いたにも拘らず、周囲の真つ当な官僚たちと比べれば自分の不足を自覚させられもしました。そして同時期に官職に就いた華琳さんの手際の良さを見せつけられると、まるで自分の不甲斐なさを見せ付けられているような気分でした。

そして何より心苦しいのは、私と妹の美羽さんの後継問題で袁家が二つに割れて裏で陰湿な権力闘争が行われていると言つことです。

そして久しぶりに有つた友人にも大きく水を開けられているようです。

「要は色々うまくいかなくて自分がへっぴこに思えて惨めだと」

ええ、その通りですわよ。ですけど、もうちょっと言い方が有るんじゃないませんか？

「まった予想道理つちゆうか贅沢な悩みですよね。まあ、最後の一つはまだ見ぬ我が従姉も関わっているでしょうから代わって謝らせていただきますが」

話し終えた後に待っていたのは黒羽さんの呆れを含んだ表情でした。流石にその態度は少し頭にくるものがありますわね。

「まあ、言いたいことは分らなくもないんですけどね？人間どんなに頑張ってもどうにもならんことは有るんですよ。素直に諦めるのも悪い考えではないと思いますよ？」

またこの人は。頭に血が昇りそうになりましたが、無理矢理に自分を押さえつけます。

「うん、少しは大人になってますね。麗羽様、諦めとか下手に出るようなこと要求されるとすぐ怒ってましたから」

その後が続いて来た言葉と笑顔が気になりますわね。私だって反省することくらいは出来ますわ。

「で、結局何が言いたいんですの？」

「自分なりに頑張ってるならそれでよし。どうしても足りない分は人に頼りましょう。人の上に立つ人間に個人としての優秀さは必ずしも必要ではありませんから」

「・・・安い慰めに聞こえてしまいますわ」

「有名な実例ありますよ？高祖とか個人の能力は「それ以上言っってはなりません！」・・・えゝ、折角高祖の醜態を面白おかしく脚色してみつともなさ三割り増しでお伝えしようと思っただのに・・・」

この人は・・・我が王朝の祖に対してなんて事を言おうとするのですか。

「月並みですけどね、他と比べても仕方ないですよ。どう頑張っても自分が出る以上のことは出来ないんですから。それが嫌なら誰かの助けを借りないと。才能のある人って、ない人じゃ全然追いつかない早さで突っ走りますからね。うちの妹らもすっごい勢いで成長してきてるんで、後どのくらい姉らしくいられるか、ですよ」

苦笑いを浮かべて語る黒羽さんの姿は、どこか心地よい滑稽さを感じさせるものでした。

「ま、どうしても自分の力を上げたいのなら無理な背伸びだけはしないことです。碌なことになりません。これあたしの経験則です」

「興味有りますわね。一体黒羽さんはどんな失敗をしたんですの？」

黒羽さんは私たちが出会った頃から常に一步後ろから見守り、時に助言を与えてくれていた、そんな憧れさえ抱いたことのある人でした。ですからそのような人物の語る失敗と言うのは私の興味を引くのに充分でしたわ。

「やゝ、あたしが、その、父上から色々教えられていた頃なんですがね？」

恥ずかしいのか、少し顔を赤らめながら話したのは黒羽さんの幼少の頃、お父上から薬物の取り扱いの指導を受けていた頃の話でした。事前に摂取して特定の毒を一時的に受け付けなくなる薬を勝手に調査して、それが失敗して危うく中毒死すしかけたとか。

「それ・・・笑い話ではすみませんわよ？」

「や、まあ、一番身にしてみたものを選んだんですけどね？まあ兎に角焦ってもあたしの二の舞ですよってことですよ。ゆっくりやっついていきましょう」

そう言って気遣ってくださる黒羽さんの笑顔が返って痛く感じますわ。

「最後にあたしが言えるのは一つだけ。あたしや斗詩や猪々子がいるんですから。麗羽様一人で頑張る必要はないんですよ。あたしが信じられないなら別ですけど」

「そんな訳ありませんわ!」

思わず声を荒げてしまいました。

「なら問題ないですね。麗羽様は人を使う立場の人間ですから、あたしらの知らない苦労もあるでしょうけど、言ってくださればあたしたちがいますから」

姉が妹に向けるような見守る笑顔は、いつの間にか喜びで輝く少年を思わせるものになっていました。

「そう……ですわね。なら早速お願いしましょうかしら」

「ご命令であればなんであれ、ですよ、我が主」

凜々しい表情を作って対応してくる黒羽さんに思わず笑いが込み上げて来てしまいました。

「最近気分が滅入って仕方ありませんわ。何か楽器は出来まして？」

「母上から花嫁修業と幾つかかじっております」

それは楽しみな返答ですわね。何事も言ってみるものなのかも知れません。

「では何かお願いできますか？」

「麗羽様がお耳にしたことのない楽曲を披露してご覧に入れませよ」

久方振りの語らいは、私に親友の知らない面を私に教えてくださいました。

第十九話 人生悩みが尽きないものである

「どうです？ご注文の通りにこさえられたと思いますがね？」

鍛冶師の親方の言葉と共に品のサンプルを受け取る。鉄を薄く打って緩やかな曲面を作り上げる。長めの木の柄を持つそれは武器としては異様なシルエットをしていた。あたしはそれを手に取り重さを確かめる。

「・・・うん、頼んだ通りだね。良い鉄サン（金に産）だ」

鉄サン。それは土を掘るための道具であり、戦場では兵器としても機能する多機能品。なんて言うのと仰々しく感じるかもだが要はシャベルだ。農具として似たような物はあるが、木製のシャベルに先端の部分のほんの一部に青銅の歯を差し込んだだけという物だ。性能も悪ければ耐久性もない。戦場での使用には向かないので、わざわざ鉄製のやつを開発して貰った訳である。

「そりゃ良かった。では、これと同じやつを五百本でしたね。残り四百九十九本、来月の終わり頃には揃えられそうです」

笑顔で語りかけてくる親方と別れ、この日は一旦太守府に戻る
ことになった。ちなみにあたしの左右にはデフォルトとして司馬姉
妹がくつついている。

「あの鉄サンも屯田に回すのですか？と裏禍は尋ねてみます」

「その場合どれほど作業効率に変化があると睨んでいるのか、
と裏亞は尋ねてみます」

道中、二人がそんな事を聞いてきた。

「や、流石にアレは屯田には使えないよ」

確かに鉄の農具は農作業の効率を大きく上げるだろう。だけど
民屯の農具は基本的に無償提供だ。確かに被提供者に一時的な増税
措置を採っているが、一人当たりで考えると暫くマイナスが続くか
ら財政に小さくない負担をかける。流石にほぼ無償で譲渡する物を
そこまで贅沢に出来ない。まあ、場合によっては売り物としてなら
いいかも知れないが、値段を考えるとやっぱり売れそうにないし。製
造費の高さから軍屯でも仕様が躊躇われるし。

それに完全に農具として作るなら鋤とか犁の方が効率がいいと
思うし。農業に詳しくないからイメージ的にけど。

兎に角鉄そのものの価値が下がらないと無理だろう。

「それに武器としても振るえる様になっていう側面もあるしね」

元々土木作業用の道具だが、近接戦闘には充分過ぎる戦果を求められることは第一次世界大戦前後に於ける塹壕戦が証明している。

「アレは正式な武器としても扱うからな。扱い方は慣れてもらわんとならんし、弩もまだ定数揃ってないし、ほんと軍隊作るのって色々入用で大変だわ」

全く、色々有る兵装の中から必要そうなのを判断して揃えるつても結構大変だわ。予算にも制限あるから必要なものとそうでないものの判断がシビアでないといけない。そういう意味では工具と武器を兼任できる（純粋な兵器には劣るが）シャベルは使い勝手が良いのではないか？少なくとも持ち替えのタイムラグがなくなるし。

その後屋敷に着き、自分の部屋で書類処理に入る。この手の作業は得意ではないが、裏禍裏亞が手伝ってくれるから結構はかどる。

そして日が傾きかけてきた頃、意外な客人がやって来た。

「偽又さん、いますか？」

戸の外から聞こえたのは、意外にも許攸の声だった。

「あ、はい、どうぞ」

処理し終わった書類を纏める作業を中断する。何だろな？あま
り会話するほど仲が良い訳じゃないんだが。取り敢えず用事を聞く
か。双子が外していた笠を被り、顔を隠したのを確認してから戸を
開ける。

「ええ、もうすぐ祖父のの命日なので久方振りに里帰りするこ
とになりました。一応挨拶に、と」

どうやら暫く仕事を休むからその挨拶回りみたいなものらしい。
律儀やね。その後、礼儀として二三応答して帰っていった。あ
たしも席に戻って仕事に戻る。

それにしても……

「里帰りか……」

そう言えば色々有ったとは言え、元皓様に引き取られてから一
度も墓参りに戻ってなかつたな。と言うか思い浮かびすらしな
か。ちよつと親不孝が過ぎるかな。あたしも一回くらいは墓参り
に行った方がよいな。

最近は黄巾との戦いもこの付近は落ち着いてきたし、許攸が休みをもらえたってことは、あたしも申請すれば休みもらえるかな？ 偶然にも父上の命日がもうすぐだ。

ふと、顕わになった姉妹の目がこっちを向いているのに気付いた。

「どうかした？」

「いえ……お姉様は……家族が恋しいのか、と……裏禍は疑問を……」

「その……お姉様には……裏亞たちがいる、と……裏亞は……その……」

いつもは物事をはっきりと言う二人が珍しく顔を赤くしながら言いよんでいる。これは……慰めてくれてるのかな？

「別に気を使うようなことじゃないよ？随分昔のことだし。それに今の生活にも満足してるし」

あたしは二人の間に立ち、抱きしめるように頭を撫でる。サラサラした髪の毛が手に気持ちいい。二人も悪い気はしていないようで、何も言わずにされるがままにしている。大体一、二分程そうし

て、一旦二人から離れる。

「やゝ、そう言やあたしが戻ってきてから何だかんだで二人とゆっくり過ごしたり出来ないでいたよな。良けりやさ、あたしの里帰りついでに暫く三人でのんびりするか？」

「……と言つやり取りが有りましてですね……」

「……それはご愁傷様と言つか、ってことは許攸さんも？」

「あゝ、城を出た直後を呼び戻されたそうで」

その日、いざ休暇を申請しようとしたその時、見計らったかのように入ってきた大規模な黄巾が冀州に侵攻して来たと言う報告の為、あたしらはそれらを口にするタイミングすら得られずに軍の編成に駆り出された。

東南から押し寄せた黄巾軍から領民を守るために兵を出すこと

になった訳だが、一体どうしてこんな急に黄巾軍が雪崩れ込んだのか。聞く所によると小規模の部隊が幾つも現れ其々が近隣の邑々を襲っているらしい。

幸いこちらも数には余裕があるため、軍を三つに分けて対応することになった。麗羽様と猪々子が一つを率い、斗詩と許攸が一つ、あたしと沮授の兄さんが一つ。元皓様と審配がお留守番である。

尚、この組み合わせを選ぶ際、許攸と猪々子は絶対に同じ部隊に入れてはいけないという不文律があった。フィーリングで行動する猪々子と理詰め許攸の相性の悪さはみな知るところだということだった。

で、馬に乗っておよそ一万の軍勢の先頭を歩くあたしと、横に馬車で揺られている青年こと沮授の兄さんは目的地に向かいながらも雑談をしていた。と言っても油断しているつもりはない。斥候は定期的に出しているし、事前に出た情報の分析も終えている。今は特にできる事がないのだ。

ちなみに裏禍と裏亞には後方の輜重隊の指揮を執ってもらっている為ここにいない。更に言えばあたしの部隊二千も留守番である。まだまだ使い物にならなさそうなので。

「それにしても急にわらわらと。どういふことですかね？」

事前情報だとやけに統制の取れていない印象を受ける黄巾の動き。流石に気になるものがある。

「正直読めませんね。確かにまともな統制を失っているように見えますが・・・もしもあの情報が本当なら納得もいきますが、今は何とも・・・」

沮授の兄さんの言う「あの情報」。それは曲阿という地で張角が討ち取られたと言うものだった。ただこれに関しては情報が色々錯綜しているため判断が付かないと言うのが出発前の軍師団の結論である。

結局この一連の戦いは二ヶ月余りでけりが付いた。その際に何人が捕虜を捕る事に成功し、そこで張角のいた本隊が撃破されていたという情報は時事だったと言う裏が取れた。張角の生死は不明だが、黄巾党は完全に統制を失い各地で殲滅されていつている。黄巾の乱そのものの終わりが近づいてきていると言うことだった。

正直あつちこつちに、小規模な盗賊団程度の規模しかない相手を潰していくのは煩雑で、且つ弱い者苛めみたいで気分の滅入る作業だった。

その間、北海ともなるべく連絡を取り合って情報交換にも努めていたが、曹操、劉備、孫策の名がよく話題に出るようになってきた。当然と言えば当然なメンツだが、やはり先を思うと怖いと言うのが正直な所だ。この中で劉備だけは朱里と雛里というパイプ（二人が劉備軍に受け入れられたと言うのは護衛につけた兵士たちから

報告を受けていた）があるが、天の御使いとか言う奴のこともある。果たして味方にして大丈夫な奴なのか。や、こういう分析はあたしがやるべきことじゃないか。

兎にも角にも、黄巾の乱が一段落し、あたしらは誰一人欠けることなく再び渤海で再会を果たした。この再会を喜び合ったあたりは、されど翌日元皓様が提起した会議でなんとも言い難い感情を抱くことになった。

「先程公路殿の荊州刺史就任が決まった旨が、使者より伝えられました」

皆を集めた元皓様の言葉に一同がざわつく。ちなみにここにいるのは麗羽様、元皓様、沮授さん、猪々子、斗詩、許攸、審配、そんであたしである。麗羽様陣営の中心が出揃っている。

「それはもう勅令が下されたのですか？」

先ず発言、と言うか質問をしたのは許攸だった。

「いや、荊州管轄内の太守たちが朝廷に推薦し、それが通つての。じゃが、一応乱も収束しきつておるとは言い難い現状、正式な勅令として下されるのはまだ時間が掛かる」

ふむ？そうだろうか？本来その混乱を収束させる為にも早く刺史を・・・ああ、乱が中途半端に収まった今からもう権力闘争始めたのかな？宦官と外戚たちの。いや、呉越同舟の理屈で清流派まで復帰しているから更に混沌としかねんのか？もしそうならガチで外を気にする余裕もない？

「ならば我々も本初様に刺史くらいには就いてもらわなくては
いけませんね」

許攸のこの発言は袁家の後継争いを意識してのものというの
は明らかだ。だが麗羽様は妹様と事を構えたくはないのだろう、顔を
顰めている。

「それでしたら、幸い、と言っ
てはいけないのでしょうか
けど、青州の刺史が乱の影響で空位になっ
てますね」

続いたのは審配である。新参の二人は麗羽様
が袁家の跡目を狙う事を前提に話している。それが麗羽
様の機嫌を損ねていることに気が付いてい
ないのは、まあ仕方ないだろう。これも麗羽
様を想つての考えだろうし。でもやっぱり、麗羽
様の意思をはっきりさせてもらわんといかん
かな。

「すみません、二人とも、まだ麗羽様
がどうするか口にしていない以上、そこ
まで考えるのは早いでしょ」

あたしの言葉にまず、許攸と審配が不思議そうな表情でこちらに視線を向け、ついで猪々子と斗詩が「ああっ」とあたしの言葉の意味に気が付いたようだった。元皓様と沮授の兄さんは初めから、少なくともあたしと同じところまで考えていたのだろう、特に表情を変えることもなかった。

「その通りじゃな。我らが主殿は己の為したきを明確にしておらん」

続いたのは元皓様だった。

「本初殿がどうしたいか。それを示さぬでは我らに為すべきこととはない。御心はお決まりですかな？」

意地の悪い訊き方するな、元皓様。でもまあ、こればかりは麗羽様にしてもらわなくちゃならん決断だしな。実の妹と、どういう立場を選ぶのか。多分、麗羽様にとってソレは大きな葛藤なんだろうな。

「……私は……美羽さんとは……争いたくありませんわ」

姉として、麗羽様が優先したいのはソレなのだろう。だがそれは私情であり、臣下の立場からすれば決して良い返答ではない。こ

ここにいる人間だけなら兎も角、他の臣下にも伝われば勢力の瓦解に繋がりがかねない。何せ麗羽様の下での出世が難しくなるのだ。

「それは・・・家督を譲るといことですか？公路殿に」

・・・訂正、ここにも上昇志向の高い人いたわ。許攸つてのが。あからさまに態度が表に出てるな。気持ちは分らんでもないけど。対して麗羽様はそれに目を合わせないでいる。一応分っているって事か。

さて、どうしたもんかね。麗羽様が公路様と対立したくないのは分る。が、公人としてはよろしくない。けど姉妹喧嘩どころじゃなくなるであろう対立を睨けるのもな。あたし自身、立つべき位置を見極められない。う~~~~あ~~~~。

「・・・誰からも発言がないようですので、僕からよろしいでしょうか？」

先の麗羽様の発言以降、嫌な雰囲気沈黙していた会議で発言したのは沮授の兄さんだった。あたしや斗詩、猪々子は色んな意味で発言し辛いし、元皓様は何やら考え込んでいるし、許攸は不機嫌そうだし、審配はオロオロしているし。

「妹君との関係を心配しているのなら、寧ろ今は後継争いから降りるべきではないと思うんです」

ん？普通、ここで降りなければ敵対フラグでしかないように思えるんだけどな？当然麗羽様もそれを疑問に思い、沮授の兄さんに聞いたです。

「この場合重要なのはお嬢様方の心積もりより臣下の思惑ですね。忠臣たる者、誰しも自分の主をより高みに押し上げ、名を馳せることこそ生き甲斐です。お嬢様方の持つ袁家という家名、それは大きな武器になるものです。これを獲る事を放棄した場合、お嬢様の派閥は散り散り、結果としてお嬢様とお嬢様の関係は殺すか殺されるかの二択になるでしょう」

沮授の兄さんの話では、もし麗羽様の勢力が崩れた場合、後の禍根を断ち切る意味で麗羽様の命が狙われることになるだろう。そして、麗羽様陣営の古参である斗詩、猪々子、そしてあたしも確実に狙われるだろうと。

これが逆の立場なら、麗羽様が臣下を押さえ込んで公路様を保護することも可能だろうが、少なくとも公路様の側に臣下を完全に制御することが出来る人物は恐らくいないだろうとの事。

まあ、多分単純な人数は公路様の方が多いただろうな。お家の地元を制御下に置いているのは政治的に大きい。だからこそ組織的に肥大化しすぎて制御が難しくなっているんだそう。まあ、黄巾の乱勃発以前から、実質荊州を半ば支配していたようなものだったらしい。それほどの勢力を纏めきるには人材が不足、優秀な人材の大半は孫策配下だから重用するのも危険だそう。

結論から言おう。結局麗羽様に選択肢など与えられていなかったと言うことだった。

沮授視点

お嬢様が袁家の次期当主の座を望むことで決着が付き、解散の運びとなりました。各々が自分の仕事に戻る中、お嬢様の顔色が優れなかったですが、いつもの三人が付いているのでさして心配していませんが。と言うよりそれほど余裕もありませんね。

そして自分の部屋に戻って仕事の続きをしようと思っていたら元皓さんに声をかけられました。

「嫌な物言いをするようになったの、沮授よ」

「いまいち言うことが分りかねますけど」

険しい顔で語る元皓さんにそう返します。

「本初殿と公路殿との事じゃ。お主あのような事を言ったがの。」

本初殿たちなら他の臣下を纏めきれると思っておるのか？」

確かに、小お嬢様と似たようなことが言える程度にはお嬢様の派閥も小さくない。今のこの派閥を事実上取り纏めているのは元皓さんですからね。

「難しいでしょうね。そう考えたから元皓さんも敢えて言わなかったのでしょうか？」

僕が思い立った事に元皓さんが考え付かなかった筈がないですしね。

「……まあ。下はもちろんのことじゃが、上も些かな」

まあ、僕や元皓さんを除くとお嬢様近辺の人間は基本的にご幼少の頃のご友人ですからね。友誼での繋がりですから信頼は出来ませんが、それが他人から見ても鼻屑に見えることもあるんですよ。特に上昇志向の強い人には。今のお嬢様では纏めきれないでしょうね。今の状況を見るに……数年待てば或いは雫又さんが元皓さんの立ち位置に立てそうですかね？今でもお嬢様たちの姉代わりみたいな感じですよ。

「ですが、事実として希望はあるのです。お嬢様たちを信じるだけですよ」

そう、如何に難しいとしても希望はあるのです。

「それはそうと元皓さん、お体の加減は如何ですか？」

「・・・何のことじゃ」

元皓さんとのやり取りの末に出てきた質問に、元皓さんの表情が一瞬強張ったように見えました。

「いえ、人間体が弱っていると弱気になるものですから」

「そう言うお主は余程体の調子が良いのじゃな」

らしくもない悪態をつき、溜め息を吐く元皓さん。

「お嬢様たちには僕らと違って確実な未来がありますから」

そう、僕や元皓さんになくて彼女たちにあるもの。それが元皓さんを苛立たせているのでしょう。僕も、厭くまでここ最近体の調子が良いだけで、実際お嬢様たちの役に立てたことは多くないんで

すよね。

「信じましょうよ。僕たちは持てる時間で精一杯やりましょう。後はお嬢様たちにお任せしましょう。それが多分一番良いでしょうし、それしか出来ませんから」

きつとそれが最良なのだと思いますから。

僕の言葉を聞いた元皓さんは暫く黙ってから、せめてもう十年遅く生まれていれば、と溜め息を吐いて去っていきました。

ええ、それは僕も思いますよ。せめて普通の書生程度には、次の朝に目が覚めないという不安が付き纏わない程度に体が丈夫だったらと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0100w/>

吉川的に三回死んだ人

2011年11月16日03時28分発行